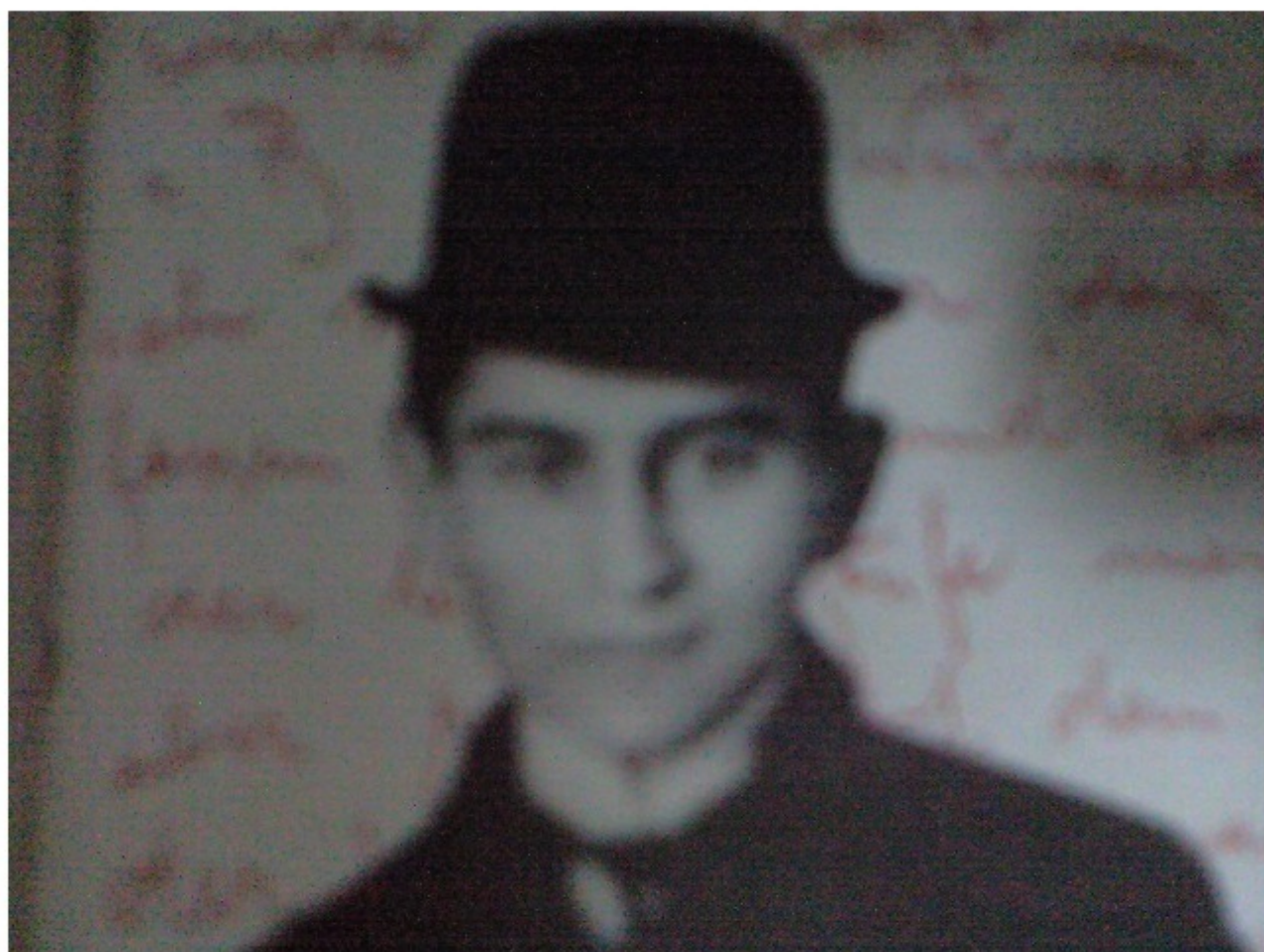


プラハの人形遣い



1 - 14章

Grasshouse



朝、人々がカレル橋の上に集まって身を寄せ合い、しきりに囁きあっていた。古い石を積み上げた橋桁の暗がりのところに、何か見えるらしい。太陽が昇って、水面のいたるところを銀色に照らしていた。しだいに人が増え、薄い埃を背景として、ちょっとした群衆を形成していった。

海獣の背中のようにじっとりと鈍い光沢を帯びて浮いているのは、男の死体だった。

グスタフ・ヤノーホは、私語をかわしている群衆をかき分けながら、石橋の前列に乗り出した。ギムナジウムに通っている彼は、いかにも生意気ざかりの顔をした少年だった。

偶然突き飛ばされそうになった老婦人が、日傘を持ち直しながら、びっくりしたように灰色の目を大きく見開き、彼を見返した。口元をもごもごさせ、何かを言おうとしている。ヤノーホは目を伏せて、丁重に謝った。なおも老婆は、傘を斜めに下げたまま、ふりかえりふりかえり険しい目つきで彼を見る。

ヤノーホはポケットに手を突っ込み、小さく舌打ちをしながら、並んでいる背中の後ろへと紛れ込んだ。

橋桁の奥のところで、その鉛色の物体は、しばらくの間動かなかった。

何人かの子供たちが、金色の髪の毛を日に透かし、棒を振り回して元気に叫びながら石段を降りて行った。

通りを行く馬車の客の中には、懐からオペラグラスを取り出して覗く者もいた。

暑くなりそうだった。

広びろとしたモルダウの川面は、ぼんやりとした靄につつまれ、カンパ島に建てられた古い館を囲む木立は、幾つもの青い炎のように並んでいた。

水鳥が白く浮かび、靄の中でまぶしい姿を点在させている。

水際に降りた子供たちが、恐る恐る手を差し込む。そのぬるりとした水は、死体を浸けているのと同じ水なのだ。

まもなく人々の見守る中、橋桁の暗がりから、ゆっくりと黒いものが、押し出されるように流れてきた。石垣の内側には、柔らかい無数の弓形の光がゆらゆらと反映している。石橋の上には、もうかなりの黒い人だかりができています。

その真下を、うつぶせで両腕を開いた太った男のからだは、まるで意志あるもののよう堂々と進んでゆく。

丸い頭に丸い胴体。からだ半分が浸かっている。大型の黒い豚のようにも見える。

じりじりと昇ってゆく朝陽にフロックコートが照らされて、黒い雨傘のように滲んで黒びかりしている。

白く禿げた頭部に残る髪の毛だけが、水草のようにゆらいでいる。

警官が幾人か集まり、水際の方へ降りて行った。

グスタフ・ヤノーホは、死体が引き上げられるまで見ていようとも思ったが、耐えられない気もした。

男の顔が、水に浸けられてどんなに変化してしまっているのか、好奇心が疼いた。

死人の顔は、伏せられた秘密のようであった。

一九一七年の大戦で川に飛び込んだ兵隊の腐乱した顔からは、乳色の虫が出入りしていたという話を聞いたことがある。

橋の上の群衆を見ていると、しだいに嫌悪を感じてきた。

口をぽっかり開けている若者や、冷静に観察している鬚をたくわえた役人ふうの男、死体の存在自体が許せないというような貴婦人。

すべて、良識そのものの顔つきだった。

(ふん。どいつもこいつも、どうせ同じようなことしか考えていないんだ)

彼はポケットに手を突っ込み、いつも何か思いついた印象を書き留めることにしている小さな手帳を取り出した。

「水の中にゆらぐ髪」と、まず書きつけた。

目を閉じて、想像をふくらませる。いま見てきたモルダウの光を反射した川面や、プラハの古びた街並みの映像が浮かんできた。

「……水の底の男の頭部に、透明な陽光が差し込む」

ノートを離して、字面をじっと眺める。

うまくいかない。

何か詩らしいイメージを書き連ねようと思ったのだが、集中できなかった。急に不機嫌になり、それが目の前の群衆のせいでもあるかのような気がしてきた。

(同じことしか考えられないというのは、やいグスタフ、お前だって同じじゃないか！)

ヤノーホはそう自分を詰問すると、たちまち不愉快になり、片手で強く自分の髪を耨った。見物人の背中を眺め、大きく深呼吸すると、うつむいたまま橋を離れた。

——いまフランツ・カフカと一緒にいたら、あの死体を見て、何ていうだろう。

死体そのものには触れず、それを見ている群衆の視線や、最近のプラハっ子の気質の荒み方について、詩的な批評を吐いてくれるに違いない。

彼は沈んだ色をしたカフカの痩せた顔を思い浮かべた。

あの不思議な微笑。それだけでこの少年の心は満たされ、自分だけが孤独なのではないという確信が得られた。

(カフカの顔を思い出すと、僕はどういうわけか、心が落ち着いてしまうんだ。うちの親父の顔を思い浮かべても、とてもそうはいかないけど)

ヤノーホはとにかく、誰かを尊敬したくてたまらない年頃だった。

反対に、それが満たされないと、人を徹底的に軽蔑した。彼自身に価値があると思っているすべてのことを、心から語り合える友に飢えていた。

そしていま、彼の意中には、フランツ・カフカがいる。

(まったく、不思議な人物だ)と彼は思った。

そして、カフカについて、心の中で何度も驚いてみることにした。

これは、確認のための精神的演技であった。

(うちの親父だって、保険局の同僚カフカのことには心から心服しているみたいだ。天才肌とは、ああいう人物のことをいうのだろうか。でも、それにしちゃ、カフカには全然わがままなところがない。天才って、もっといびつな個性のはずだけど。凄く精神的で、ときどき深すぎて怖いみたいなのところがあるんだ……でも僕みたいな子供に対しても、対等に扱ってくれる。昔っからの友達みたいだ)

彼はポケットに手を突っ込み、笑いながら通り過ぎてゆく若い娘たちを横目で見た。

自分の流行遅れのおかしな靴について、彼女たちが笑ったように思ったので、一瞬、不愉快になった。

来月、ちゃんと新しいものを買うことにきめているのだから、余計なお世話だ。

(まてよ。カフカが僕を対等に扱ってくれるのは、ひょっとしたら同じ詩人という人種として、認めてくれているということだろうか。仲間として扱ってくれているということだろうか)

ヤノーホは、そんな考えを思いついて、不意にぽっと顔を赤らめた。

そして自分で恥ずかしくなり、きょろきょろと周囲を見回すと、怒ったような不機嫌なような顔をわざと作って、大急ぎでハンケチを取り出し、乱暴に鼻をかんだ。

馬車や車の量が、しだいに多くなってきた。

物思いにふけりながらふらふらと歩いていく彼の脇を、猛烈な勢いでガラガラと車輪が通り過ぎてゆく。かすかに埃が舞いあがる。

「どこに目をつけてるんだ、小僧」

鞭がうなり、中から侮蔑的な声が飛んだ。てかてかと栗毛色に輝いている馬たちが、動揺し、脚並みを乱した。チッと少年は舌打ちをした。

「小僧か。ふむ、よろしい。僕がまさか大詩人グスタフ・ヤノーホ様だとは、お前ごとき御者風情には、わかるまい」

馬車は不安定に傾きながら、橋の向こうを大きく曲がってゆく。陽に照らされた大きな立像の脇を埃が舞いあがり、春の淡い空が輝く。

霞んだ大気の中に、川向こうのプラハ城の一群が、あたかも古代からそこにあった山脈のように、穏やかな褐色に浮かび上がっている。回廊の柱の影が、でこぼこの石畳の表面に、面白い模様を作っていた。彼は温められた石のひとつひとつを睨んで、いろいろな映像を思い浮かべた。

——中国の皇帝。むく犬。絶望したピラトの顔。サソリ。ホムンクルス……。

その辺を歩いている連中には思いつかないようなイメージを、わざと思い描いた。今度カフカに会ったとき、さりげなくその連想ゲームを持ち出し、感心してもらうつもりだ。

実は彼は本日、学校をずる休みしたのである。

父親には内緒だが、教室で退屈な授業を聞くより、いろいろな想念や映像の渦巻く迷宮のよう

なプラハの街で「詩を発見する」ほうが、ずっと高尚だと思ったのである。

しばらくポケットに手を突っ込んで広場を歩いていると、街灯の向こうから、よく知っている顔が現れた。あの大きな団子鼻とがっちりとした体型、それに自信のありそうな立ち振る舞い。

(まちがいなくマックス・ブロートだ)

カフカの親友で『ティコ・ブラーエの神への道』の作者。

もうひとりには皮肉屋の三流ジャーナリスト、ヨーゼフ・クラムに違いない。

とはいっても、彼が相手のことを雑誌や新聞で一方的に写真で知っているだけで、あちらの二人は無名の学生でしかないヤノーホのことなど、まったく知らない。

グスタフ・ヤノーホは、どういうわけか彼らの視線を避けるようにして花売りの陰に隠れた。向こうはまったく知らないのだから、その必要などないのにもかかわらず、である。

(さあ、思想探偵ヤノーホ君。あいつらを追いたまえ。このプラハの、石畳や迷路の襞にひそんでいる詩のかけらすら、見逃すな)

ヤノーホは、二人が通り過ぎていくのを、花売り車の薄桃色の花束の陰で確認すると、しばらくの間目を伏せてじっと立っていた。ブロートとクラムの二人が、広場の向こうのカフェに入ったのを見届けると、新聞を一部買って脇にはさみ、足早にその店の方へ向かっていった。

太った花屋の老婆はその間中、両手を腰にあて、妙な顔をしていた。

「プラハも物騒になったな。殺人があったのは、ストロモフカ公園の森の中らしい。ということは、車か馬車で死体を運んだということか」

マックス・ブロートは新聞を大きく折ると、赤くて大きな鼻をそらせて、溜め息をついた。二人はカフェの明るい窓際の席に座っている。

「で、犯人は、捕まったのかね」

ヨーゼフ・クラムは無感動な小さな目を、ジロリと光らせた。この男には、どこことなく疲労したようなよどんだような、重い雰囲気がある。

ブロートは新聞を渡しながら、大きな頭を振った。

陰気な相棒は、すでに冷えかかっているコーヒーを飲みながら、新聞を大きく広げて、関連記事を目で追った。

ヤノーホ少年は彼らの隣までくると、待ち合わせの誰かを捜すようにあたりを見回し、偶然いま見つけた席にでも座るかのように、さりげなく腰を下ろした。

(なるほど、ここが有名なカフェ・アルコか。……こりゃ学校の先生や同級生を相手にしてるより、よっぽど面白いや)

マックス・ブローとヨーゼフ・クラム。

この二人の印象は、陰と陽というべきか、きわめて対照的な風貌であった。

ブローは特徴のある赤い団子鼻でメガネをかけた押しの強そうな男だった。

見るからに自信たっぷり、顔の表情が派手で精気にあふれ、快活だった。何かその場で一騒動あれば、かならず座の中心に立ちあがり、拳をふるって一席ぶたなければ気が済まないといった顔つきだ。

クラムの方は、きわめて目立つ鉤鼻に、やはりメガネ。しかし陰気な懐疑派といった風情で、唇を冷笑的に歪めている。人をあまり近づける雰囲気ではない。油断のならない気配があり、疲れた頹廢の匂いがあった。柱の脇でコートに首を埋め、他の連中を観察し、その愚かしさに批評を加えているといった風貌だ。

(なんだか政治運動家と秘密警察が、よからぬ裏取引でもしているといった感じだな) ヤノーホは、コーヒーを注文しながら二人を横目で探った。

モダンなインテリアを配置したカフェ・アルコの騒々しい空間には、議論好きなジャーナリストや学生や文士崩れなどが、タバコの煙をもうもうと充満させながら、午前中から話に熱中していた。

すぐ向こうのでっぴりと太った赤ら顔の男が、最近プラハに起こりつつある絵画と建築の新しい運動をこき下ろす。すると対座している痩せた若い男は「いやいや、わたしは断然彼らを擁護します。なんとなれば……」などと身を乗り出した。パイプの縁をしゃぶりながら、その芸術論をにやにや笑って見ている小さなくたびれた初老の紳士もいる。

その隣では、男のように断髪にした美人のまわりを、取り巻きの画家らしき数人の若者たちが囲んでいた。彼らは口角泡を飛ばしている隣のグループを、鬱陶しそうに横目で睨み、軽蔑的に顎をしゃくった。

「ふん、あいつらは、いつだって結局、概念ばかりさ。何も生みだせやしない」

「そう。言葉、言葉、言葉ってわけね」

断髪美人が、胸を張り、宣言するようにいった。

煙はしばらく彼らの頭上に漂い、ゆっくりと斜めに上昇してゆく。

そこには社会主義者、無政府主義者、自称ニヒリスト、わけのわからないオカルトに凝った非合理主義者など、なんでもござれといった雑多な人種が集まっていた。

新聞に顔を隠しながらも、しだいにヤノーホはわくわくしてきた。

「しかしこの事件、チェコの民族派とドイツ人との対立のような匂いがするな。号外もそれを暗示しているような書き方がしてある。はっきりとは書けないのかも知れないが」

ブローがいぶかしげな顔で、肉づきのよい顎を撫でた。

「ほう、そうかね。俺はまた『協会』の連中でも動いたのかと思ったよ。そうになると、ちょっと身辺がヤバくなってくる。火の粉がかからないうちに、ウィーンにでも逃げておくかね。……おや。君の新作についての書評がでているぞ。読んでやろうか」

クラムが、新聞を覗き込むようにしてメガネを直した。

「いらん、いらん。書評なら、断るよ。どうせ『よく書けてはいるが、真のオリジナリティに欠けている』だろう。今度のは、大かたそんなところだ。こないだのフランツ・ブライが『ヒューペーリオン』でやってくれた辛辣な評以来、胃がキリキリしてしょうがないよ」

そしてブロートは声を低めて、

「ところでクラム。注意しておくが、あの悪名高いウグリノ叢知協会についてだが、もうそろそろ君は離れた方がいい。ロクな噂がないからな」

「さてよ」とクラムは話をそらした。

「……ほう、とりあえず最後では、尻上がりに褒めてある。まあ前半ではずっと君の作品の主人公の性格をけちょんけちょんに、それこそ立ち直れないぐらいに徹底的に貶してあるのだが、読んでやろう。『……とはいえそれでも筆者には、あの昆虫が書き綴ったかのようなフランツ・カフカ氏の子供っぽい作品よりはまだしも読めるというものだ。したがってこの著者には大いに感謝しなければならないともいえるのである。人生は短く、退屈な芸術はさらに長い……』か。なるほど」

嫌な沈黙がきた。

すぐ脇でヤノーホ少年は、異常に神経を集中して聞き耳をたてている。

「誰だそいつは」

「匿名評だ」クラムはタバコの煙をふーっと吐いて、鼻で器用にすすった。二本の煙の筋が、ゆっくりと正確に穴の中へと昇ってゆく。

「クソッ。俺のことはいいが、そいつはカフカの散文の、あの装飾をすべて削ぎ落とした鉱物的な清潔さの意義が、ちっともわかったらん」

隣の少年は、心の中で快哉を叫び、テーブルの下で小さく拍手をした。

「あいかわらずだな、君の友人思いは。そういえばそのフランツだが、最近、アタマの悪い妙な子供に追いかけまわされているという噂だが」

クラムは、気の乗らないような陰気な調子でいった。

「子供？ ああ、分かった。グスタフ・ヤノーホとかいう奴だ。ギムナジウムを終えたかどうかという少年で、労働者災害保険局の同僚の息子だそうだ。何でも詩を書いているとかで、父親がものになるかどうかフランツに見せたらしい」

隣の少年の顔からたちまち血の気が引いた。

テーブルの下にだらんと下げられた両手首まで、蒼白になった。

「ほう。変わった父親もいるものだな」クラムは、苦々しい顔で舌打ちをした。

「普通だったら、子供の詩など発見しようものなら、破り捨てて叱りつけて、目の前で燃やして灰にするところだろうに。いわば、父親が心ならずも息子の自慰を発見したときのようなものだ。身に覚えがあるだけ、きまりが悪い。そのくせ、このまま猿のように中毒するまで悪癖を放っておくのもどうかという懸念もある。しかし……それでフランツは、その子のお守り役にでもなったのかね？」

ブロートは、深々とため息をついてうなずいた。

「例によって、断りきれなかったんだらう。あの性格だから」

「ケッ。この世で、自称詩人だと思っているガキほど、始末に悪いものはない。まったくそういう話を聞くと、虫酸が走ってくる。もし俺のまわりにそんな青虫がつきまどってきたなら、たちまち串刺しにしてやるどころだが」

そして横目でジロリとグスタフ・ヤノーホの方を見て、何かを考え込むような顔をした。少年は椅子から、飛び上がらんばかりになった。

「そうだ。いま思い出した。フランツの奴に、金を借りていたんだ。ずいぶん前の借金が、二回分放ったらかしになっていたんで、こないだはまさか、貸してはくれまいとあきらめていたんだ。ところがあの坊ちゃん、インドの王子様みたいな顔で笑って、二つ返事で貸してくれやがった。まったくあの男、どこまで人がいいのやら」

クラムは他人事のようにそうつぶやくと、白い煙を吐いて、二つの鼻の穴で吸う芸を続けている。

「どうしてほかの奴に借りないんだ」たちまちマックス・ブロートは険しい顔をし、人差し指をぴんと伸ばした。

「ヴェルチュとかオスカル・バウムとか。まったくなんて奴だ。カフカに金を借りたら、それがまた、あいつの新たな強迫観念になってしまうじゃないか。なんとかならないのか、キミのそのヤクザな性格」

ブロートは両腕をテーブルに踏ん張ると、凄い面相で大きな鼻をつきだした。

クラムはニヤリと暗く笑うと、髭をおもむろに撫で、素知らぬ顔で新聞に目を走らせた。

「……ナニナニ、大戦の真の真相、だと」

マックス・ブロートは新聞をうばい、ヨーゼフ・クラムの顔を睨みつけた。

「返しにいくよ、店を出たら。昨夜突然、カードでツキが回ってきたんだ。小金は持ってる。わかったから、そんなでかい鼻をつきだすなよ。俺はキミほど売れっ子じゃないんだ」

旧市内広場のティーン聖母教会の建物は、正面に陽光を受け、晴れやかに胸を張った貴婦人のように輝いていた。

背の高いヤン・フスの黒い記念像は、いかめしい顔を和らいだ午後の陽に照らされ、その上空をどこか古びた教会の窓脇に巣くっている数羽のイワツバメが舞っていた。

二人の男性と、その十数メートル後からそしらぬ顔をしてポケットに手を突っ込みながらついてくる少年とは、足速にプラハの中心地区へと入ってきた。

広場の脇に入りキンスキー宮の前に来ると、見覚えのある看板が出ている。鴉を商標とした地味な看板だ。二人はそこで立ち止まった。どうやら躊躇しているらしい。

洋品店『カフカ商会』の前に来ると、店の奥ではすでにヘルマン・カフカ氏が堂々たる筋骨質の巨体をゆすりながら、使用人を怒鳴りつけていた。

「この、泥棒猫め！ たまには自分の給料ぶんぐらい、働いてみせたらどうなんだ。いったいさっきのは、得意先に対する口の利き方か。ええっ？ 相手は地位のある方だぞ。プラハでも屈指の名門といわれるほどの方だ。本来ならば、貴様ごとき、靴の先もなめられないような名士なんだ。それを貴様はッ」

「申し訳ございません。申し訳ございません。わたしはただ、言葉の使い方を知らなかっただけで。きょ、教育がないもんで」

小柄で顔色の悪いほとんど子供のような使用人が、はいつくばるようにして弁解していた。二人は装飾品などの商品が下がっている入り口のところで顔を見合わせると、腰を折るようにしてほの暗い店内を覗きこんだ。

「やめようか」とクラムが両手をコートに突っ込んだまま、タバコをくわえた顔だけをこちらに向けた。

「フ란ツは、今日はここにはいないだろう」

「とりあえず、居場所を聞くだけ、聞いておこう」と腕組みをしたブロート。

ヤノーホ少年は、隣の店の商品を覗くようなふりをして、ちらりちらりとカフカ商会の方を伺っていた。

「いいか。わしが貴様の年には、地を這い回るような苦勞をして、ようやく最初の商売のきっかけをつかんだんだ。ほんの子供が、七年間も、村から村へと歯を食いしばって、手押し車を押して働いたんだ。雪道の中、手はあかぎれ、足は霜焼け。叩き上げ？ ああそうだと。叩き上げさ。ところが今では、プラハのお偉方連中とも、口が利けるようになったというわけさ。ふん。こんな目抜き通りの店で、最初からヘラヘラしている貴様には、それがどれほどの苦勞か想像もつくまい」

「申し訳ございません、ご主人様。申し訳……わたしがすべて」

使用人はおろおろと青ざめて下を向き、主人のヘルマン・カフカ氏の怒鳴り声に身をふるわせている。

巨漢のカフカ氏は、柱に手を当て体重を預けながら、彼を見下ろした。

「お前には、前々からいおういおうと思っていたがな。……お前のそういう卑屈な態度そのものが、見ているといらいらさせられるんだ。嵐が通り過ぎるまで、形だけ謝っておけばいい、お前は今、そう考えておる。どうだ。凶星だろう。わしはそうではなかった。わしはそうではなかったぞ。反省すべき点は、ちゃんと反省した。そして人生を少しずつ、少しずつ、じりじりと変えていったんだ。今のお前のように、いじけたところなど、少しもなかった。運というものは、そういう前向きな男にこそ、ついてくるんだ。わかっているだろうが、わしは、黒白はっきりしない奴は、大嫌いなんだ」

何かカフカ氏に連絡があったらしく、女の使用人がやってきたが、彼女は裏の出入り口の所でこの騒動に勘づくくと、うつむいて躊躇し立ち止まった。

カフカ氏はまるで堂々とした軍人のように見える。

大声が飛び出すたび、若い青白い店員は、小エビのように店の奥のほうへと後ずさりしていく。

「こんにちは。あの……カフカさん」とブロートがかしこまって帽子を脱いだ。

巨大なヘルマン氏は両腕を腰にあて、息子の悪友たちを上から下までジロリと見ると、「やあマックス君。何か用かね」といった。

形式的な笑いは浮かべてみせたものの、こんなところに何しにきたという表情が、ありありと出ていた。

家ではこの長男の親友のことを『あの変人』と呼んでいるのだ。

身長は息子のフランツと同じぐらいだが、肩幅と体重がまるで違う。

この父親は、爵位を持つ者や政治家や医師など、地位のある実利的な知人なら下にもおかないほどに歓迎するのだが、息子の将来にとって何の役にもたたないプラハのカフェ文士や役者風情には、冷やかな態度を取るらしい。

それでもともかく、息子のフランツが公園に行っていることを懇懇に教えてくれた。そして二人の顔をゆっくりと見比べると、不意に静かな、しみじみとした調子で口を開いた。

「あんたがたは、わしの今の振るまいを見て、不愉快を感じておられるに違いない。しかし商売とは、厳しいものです。今、あれはわしを、恨むでしょう。しかし、この厳しさが、いつか踏ん張りになる。あれにも、そのとき初めてわかってもらえると思う。人間というものは、悲しいかな、身にしみて思い知ったことしか、武器として使えないもんです。痛みが、知恵になる。あんたがた大学出の若い連中の考えとは、だいぶ違うだろうが。ま、これがわしのやり方です」

二人は軽く会釈をした。そして、肩をそびやかした。

「疲れるね。どうも、ああいうのは」クラムは、笑った。

そして通りの建物の屋根を見上げると、首筋をぼりぼり搔いた。

「わしは心から」と、再びカフカ氏は店の奥から大股でこちらに戻ってきて、何か弁解するようにいいかけた。

「あいつらがわしの店を出てからも、ひとかどの商人として独り立ちできるかどうか、そればかりを考えておるのです。……そういうことです。では失敬」

また、二人はにっこりと店主に会釈をした。

そして同時にフーッと溜め息をついた。

「フランツの奴も、大変なおっさんの息子に生まれたもんだ。……ところで、まあ、あの親父も、われわれの正体が何者かは、結局知らずに終わるだろう」

クラムは煙草を取り出すと口にくわえ、ゆっくりと歩きだした。

「例の工場の労働争議の背景や、H.H.ヤーン惨殺事件とわれわれが、どのような関係があるか、親父さんは真相を知らない。ただの息子の友人ぐらいに思っているわけだ」

ブロートは、慔然としてそれには答えなかった。

怒りをあらわにして横を向き、「一緒にされてたまるか」とつぶやいた。

「こりゃ凄い」とヤノーホ少年は、隣の店の前で小さく叫んだ。

以前から話は聞いていたものの、確かにヘルマン・カフカ氏は恐るべき叩き上げ、立志伝中の人物だ。

呆然としていると、隣の店の女が彼を追い立てるように箒を振り回したので、ヤノーホは慌てて道路の真ん中に飛び出した。

もう、例の二人は広場の方へと向かっている。

「この、給料泥棒！」

ヤノーホが角を曲がろうとすると、店の方からふたたび中断されていたヘルマン・カフカ氏の雷のような怒鳴り声が聞こえてきた。

3章 プラハの人形遣い

鉄柵の角に、黒い帽子がかかっていた。

型としては少しだけ流行遅れではあるが、しっかりとした作りのフェルト帽である。

公園のこちら側には、数人の子供たちと老人がひと組いるだけであった。

ときおり公園の植え込みの中で、褐色の穴兎がからだを丸め、何を食べているのか鬚のついた口だけをもぐもぐと動している。半ば立ち上がった格好で、ひくひくと風の匂を嗅いでいた。

あたりは静かで、羽虫まじりの透明な陽光が、ベンチの老人夫婦の背中を柔らかく照らしていた。鉄柵にひっかけられた帽子は、しだいに温まってゆく。

マックス・ブロートとヨーゼフ・クラムは、鼻歌を歌いながら花壇の向こうに蛇行している路を回り込んできた。二人の姿は、林の蔭に見え隠れしている。

灌木の群れの中、ヤノーホ少年は、見失うまいとして、小枝を鞭のように振り回しながら、並行に進んでいく。

(クラムの奴め、僕のことを青虫とかいってたな。虫酸が走るって？ 串刺しにしてやるだつて。チッ、一回も会ってないくせに。自分こそ、陰険なハイエナみたいじゃないか。ああいうのを、やくざなカフェ文士っていうんだ。そんなのプラハに、うようよいらァ)

カフェ・アルコでの件で多少は落ち込んで不機嫌になってしまったものの、こうして若草の中を歩いていると、彼は何か散歩に連れていってもらっている子犬のように、嬉しくてしかたがなかった。

梢を見上げると、毎日しだいに濃くなってゆく緑を透かして、金色のひかりが洩れていた。ヤノーホは不意に走りだしてわざわざ遠回りをし、明るい牧草の斜面で深呼吸すると、さっと両手を伸ばし、くるりと空中転回をした。

叢からひょこひょこ兎が逃げた。彼は草の中にばたりと倒れると、脚を伸ばして大の字になった。水のように澄み渡った空が見える。

森の向こうに、たくさんの教会の灰色の尖塔がのぞいている。

――百塔の街、プラハ。

やがて全身をけだるい疲労感が満たしていった。ともかく学校で先生に小言をいわれているより、ずっと気が利いた午後の過ごし方だ。

ヤノーホの横たわっている斜面から、大きな花壇を隔てた鉄柵のところでは、さっきから子供たちが、二度三度、例の帽子を見張りに来ていた。

「まだ来ないの」とか「どうしちゃったんだ」などといいながら、子供たちは顔を上気させ、花壇の奥へと消えていった。

指令を発する小太りのガキ大将と、それを受けて集合したり解散したりする男の子たちがいた。彼らに手をつながれ、訳もわからないままあちこち一緒に走っていく小さな女の子たちもいた。

。

彼女たちは、自分で編んだ花飾りを頭につけていた。どうやら皆で隠れんぼをやっているら

しい。

しばらくしてようやくブロートが鉄柵に近づいてきた。何となく見たことのある帽子だと思って見上げてみると、小路の方から二人の男の子が走ってきて、その中のひとりが雄叫びをあげながら柵の脇で跳びはね、帽子を奪った。

そして何か大声でいいながら、柵の向こうの石畳へと駆けぬけていった。

仄暗い林の中から落ち葉を払って現れたのは、ブロートとクラム共通の友人、フランツ・カフカの背の高い痩せた姿であった。

彼は鉄柵のところを見て、何かを探しているらしい。

「やっと見つけた。フランツじゃないか。何をやってるんだね、こんなところで。実はいま、親父さんの所に寄ってきたところなんだ」

「ああ君たちか。いや、その、保険局の同僚の子供たちとね」

カフカは多少どぎまぎすると、膝にかかった草を丁寧に落としながら、特徴のあるぎこちない照れ笑いをして見せた。

首を縮めるようにしてマックス・ブロートの方を見ると「せがまれちゃって」と弁解するように、服の袖を直した。流行の最先端とはお世辞にもいえないが、品のよい地味な服には、きちんと折り目がついていた。

「帽子を見なかった？ 公園の見回りの守衛が三人、門の前を通り過ぎる前に、隠されてしまった持ち物を探しださなきゃならないんだ。いま二人目なんだ。もし見つけないと、僕はまた鬼にされちゃう」

「なんだねそれは」クラムが冷やかに、そして怪訝そうにいった。

「つまり、そういうゲームなんだよ」

カフカ自身もよくわからないというふうに、照れたように笑ってみせた。

「帽子なら、子供たちがさっき持ってったよ」

カフカの顔にうなずきながら、悪戯っぽくブロートが答える。

カフカ。この男の不思議な顔。奇妙に特徴的なエキゾチックな微笑。まるでエジプトあたりの王子様がヨーロッパ風の服を着せられ、お忍びでまぎれこんでいるようにも見える。マックス・ブロートはこの微笑を見るたび、毎度のことながら「フランツ！」と喋り抱きしめてやりたくてしょうがなくなるのである。

このひとつ年上の友人は、彼の父性本能をかきたててやまない。

「こんにちは」妹のオットラも一緒だった。

ふんわりとしたスカートをつまんで腰を屈めた。

フランツには、エリ、ヴァリ、オットラの三姉妹がいるが、その末っ子である。

ブロートとクラムは、カフカの大柄な妹に、にっこりと笑いかけた。

「子供好きなのは、大変結構」とブロート。「ところで、先週は、保険局を休んだそうじゃないか。珍しいね。また、何か書いているのか」

もじもじしながら「帽子が……」などつつぶやいている兄の代わりに、妹が喋り出した。「あの日は父が兄のことを咎めたんで、ちょっと精神的に。だって、聞いてくださるブロートさん。家の父って、ひどいのよ。フランツのことなんて、何もわかってないくせに、いつも自分の意見ばかり押しつけて。人生で商売に成功する以外のことは、全部無意味だと思っているの。そのくせ肩書のある人になら、どんな馬鹿でもヘイコラしちゃって」

「オットラ……」フランツが首をふった。

「兄さんも兄さんよ」くるりと妹は向き直った。

「あんなに言われて、何も言い返さないんだもの。男のくせに情けなくないの、自分で。お店の使用人だって、あそこまでいわれやしないわ。夕方の時間をどう使うかについてだって、あたしがいり返してあげただけじゃない。あたし、兄さんの弁護士じゃないのよ、いっとくけど。こっちが怒鳴られちゃって、もういい迷惑だわ」

オットラはわざとぶりぶり怒ってみせた。

これは実は、彼女なりのサービスなのである。ブロートもクラムも、あの軍人のように厳めしいヘルマン・カフカ氏を思い出して、笑いを噛み殺していた。

「もうたくさんだよ、オットラ。よけいなことを。いや、何でもないんだ」

カフカは困ったようにそう言うと、クククッと、小さく笑った。

花壇の脇から、さっきの花飾りをつけた二人の小さな淑女が、手をつなぎながら現れると、うかがうような目をしてカフカの前に出、ちょこんと膝を曲げてうやうやしく挨拶をした。よく太った虻が一匹、ぶーんと飛んでいったので、クラムはひどく真面目な顔をして、慌てて片手で追い払った。

女の子の一人が後ろ手に隠していた帽子を、丁重にカフカに手渡した。その後ろにいた小太りの男の子が、胸を張り、もったいぶって一歩前に進み出た。さっきのガキ大将だった。

ちびのくせに、立派な身なりをしている。

「ドクトル。今回のゲームは、やむをえず中断いたしましょう。事情が事情ですからな。次回は、きっちりこの状況から続行しますぞ。では皆さん、ごきげんよう」

労働者災害保険局副書記官ドクトル・カフカは、にっこりと笑って帽子を受け取り、しっかりと頭にのせた。

三人の子供は一礼すると、噴水のあたりで待っている仲間のところへ、笑いながら走っていった。

花飾りをつけた女の子たちは両手で口を覆い、おかしくてたまらないとでもいうように、何度もカフカを振り返って、くすぐったそうな笑顔を見せながら駆けてゆく。

クラムは、メガネを透かして標本でも覗くように、じっとカフカを注視した。

「なかなか、牧歌的だな。君が羨ましいよフランツ。だいたい俺には子供なんぞ、寄りついたためしがないからね。どうも連中は、敏感に匂いを嗅ぎつけるらしい。先天的なものだな、これは。この鉤鼻と刺すような灰色の目が、嫌われるのかね。それとも、いつも苛々してるのが、子供に恐怖感を与えるか。……ところで、また動物の小説でも書いているのかねフランツ。今度は、モモンガの災害保険局の話などどうかね」

「文学の話は、よそうよ」

首をすくめて、カフカは笑った。

「いやいや、マックスはそのために君のことを探していたようだぜ。決して俺が借金を返しにきたわけじゃない。ふむ。そんな期待、してはいけない。人間、品性が重要だ。カードで勝ったといっても、飲み屋の払いがかさばって、借金取りに追われている身だ。それに俺はいつ、敵方の刺客にズブリとやられるかも知れないしな。ところでマックス・ブロート氏も、これで案外、子供には好かれるクチだろうな。ま、根が素直なんだろうな。隅におけんぞこの男も」

クラムはメガネの奥で陰気な鋭い目をジロリと動かした。

ブロートは憎々しげに舌打ちをしている。すると先ほどの花粉を背中いっぱいにつけた虻が、再びクラムを狙ってでもいるかのように周囲を飛びまわったので、彼は眉をつりあげ、むきになって帽子で打ち落とそうとした。

怒った虻がクラムを追いかけて始めたので、この冷静な皮肉屋は、帽子を振り回しながら噴水の方まで逃げまわるはめになった。

三人は笑った。

「どうやら、虻にだけは好かれるらしい」

ブロートが、一矢報いた。

四人は明るい林の中で、お喋りを続けながらそぞろ歩きをした。

去年の小枝と枯葉が踏みしめられ、ぱりぱりとはぜるような音がした。金色の木洩れ陽と蒼紫の影とが、四人の男女の顔を淡いまだら模様になぞっていた。

新芽と樹液とのむせ返るような匂い。繊細に伸びた下草は、透明でみずみずしい色を帯びていた。

繁みで野鳥が啼き、栗鼠がふっくらとした尾をひるがえしながら、枝先を渡っていった。

オットラは、兄の友人たちに囲まれるという興奮に我を忘れ、陽気にふるまっていた。家とは違って、自由なことがいえるからである。

「兄さんも、一回パシッと父さんに言い返してやればいいのか。こそこそと日記の中でなんかカタキ討ったりしてないでさ」

やがて、モルダウの水死体事件のことを思いついて、彼女は好奇心をむきだしにした。

さっき広場で売られていた号外には、群衆の見守る中、警察により水死体があげられてる様子が大きく載せられていた。

現場を見た二人は、少し得意そうにカレル橋の情景を兄妹に語った。

クラムにいたっては、両腕を前に伸ばし薄目をして、水死体の格好まで真似て見せた。しかし話が進んでいくにつれ、三人の男たちは、何か事件に対して思い当たる節でもあるのか、しだいに無口になっていった。

それを察知すると、賢いオットラは直感的に話題を転じ、今日は天気がいいし時間もあるのだから、ひさしぶりにクライン・ザイテ地区やペトシーンの丘あたりを散策したいと申し出た。

三人は、わがままだが健康的で気持ちのよいこの娘の願いを叶えてやることにした。

カフカたちは、マラー・ストラナ地区の方へと歩いていった。もう日射しはだいぶ疲労して、街

路を黄色っぽいひかりで染めあげていた。

ひさしぶりにフラッチャヌイの古い修道院わきの小道や、ペトシーンの丘のこんもりとした緑の葉群に囲まれたゆるやかな坂道を散策する。

道端の崩れかけた石垣の隙間から、たくさんの小さな白薔薇が咲き乱れ、花卉を散らしていた。そんな日向の道に沿って、蝶が二匹、もつれあいながら愉しそうに追いかけっこしていく。

実はこの散策の提案は、最近目に見えて体力の衰えてきた兄のフランツに対する、オットラの思いやりでもあった。

ある時期からフランツは、結核で肺を悪くし、ときおり保険局から休暇をとってサナトリウムでの療養生活を繰り返した。実は、一昨日もフランツは、食事中に普通ではないような咳の発作を起こしたのであった。ここまでひどいのは、初めてだった。

兄のその苦痛に満ちた表情は、オットラに一抹の嫌な不安を残した。

もともと彼女は生まれるやいなや、この華奢で繊細すぎる兄よりも、はるかに自分の方が、現実世界や日常生活といったものを承知しているような気がしていた。

それはまったく、少女時代からの本能的な認識であった。ときにオットラは、フランツの姉や母のようにすらふるまった。父親の横暴に対しても、兄を弁護してやった。

もっとも父は父なりに、この長男には期待をかけていた。ただ期待の方向性が根本的に間違っていたのだが。

つい先年、『錬金術師通り』に、フランツの書斎用に小さな部屋を探してやったのも、いわばオットラのおせっかいであった。

『錬金術師通り』とは、昔ハプスブルグ家の王様、オカルト狂いのロドルフ二世が、かつてプラハ城御用達の錬金術師たちを住まわせていたという伝説がある地区である。夜ひとりで歩いてこそ不気味だが、実は、黄色や水色、オレンジ色など奇麗に色分けされた積木のような小さな部屋が並んでいる静かでひなびた小路なのであった。

四人がマラー・ストラナ地区に入ると、プラハ城下の元貴族たちの宮殿や、修道院やらの門構えの立派な古い建物が見えてきた。丘の途中の小道からは、それらの邸宅を取り囲んでいる広大な庭園や、灰白色の彫像群も眺望できる。

疲れてきたのか、しばらく彼らは無言で歩いていった。道をそれて広場に向かう。

石畳の敷き詰められた広場は、気取った服装をした人々で賑わっていた。

建物の下はアーチ型の回廊で、帽子にフロックコートといったいで立ちの人々がゆっくりと歩いてゆく。

雑踏のいきりの中をようやく避けてきたグスタフ・ヤノーホは、回廊の中の柱のひとつに手をやり、不満そうな顔で立ちつくしていた。

彼は夕方が近づくにつれ、しだいに憂鬱になってきた。例の四人が楽しそうに公園を歩いているのを見ていると、こうやってひとりで追跡しているのも馬鹿みただし、品性の下劣な行為のように思われたのだ。

それに、あの元氣すぎる妹のオットラの鬱陶しいこと。

崇拝するフランツ・カフカが、子供達と隠れんぼのようなことをしていたこと自体、何かひどい侮辱のような気さえした。

ヤノーホはカフカと会うたび、彼を尊敬するあまり、家に帰ってから一言一句、ノートに書き留めておく習慣をつけていた。

実はヤノーホは、カフカの作品に登場する奇妙な小動物『オドラデク』について、昨夜ベッドの中で悶々としながら考えた解釈を、何としてでも作者に伝えたかったのである。

「ドクトル・カフカ。あれはあなたのもっとも忠実な自画像であり、告白なのです。僕は、発見したのです。この世界としっかりむすびつくことのできないあなたの、不安な自我の肖像なのです」

いっそクラムのいる前で名乗りをあげて、自分がその「頭の悪い自称詩人の子供」であり、「青虫」であることを証言してやろうと思った。あいつめ、どんなに感心することだろう。ところがあのいまましい骨太の妹オットラが出現したため、そんなこともできなくなってしまった。しかもくだらない話題で三人を引きずり回しているのが、何ともうんざりさせられる。

したがってヤノーホは、ただ小路に隠れ、下唇を噛み、両手の拳を握り締めているしかなかったのであった。

彼は仕方ないので、こんな失意の気持ちをいかにして詩にして、後で師匠に読ませるかに思いを凝らせた。

――瘦せたみすぼらしい犬が、とぼとぼと河岸の道を歩いてゆく。

明るい蜜の色をした夕陽が、水面を金色にかきまぜながら、河柳の向こうに落ちてゆく。

しかし、ヤノーホ少年の気持ちはさっきと打って変わって、滅入り込んでいた。

河はどんよりと重たい水を湛えている。黒い運搬船がゆっくりと銀色に光る水を分け上流へと進んでゆく。夕靄の中、遠くにたくさんの灯がにじんではいる。

ヤノーホは下を見て、ゆっくりと唾を吐いた。

弱々しい弧を描いて、風の中に消えてゆく。街燈がぼんやりと灯り始め、明かりが水面に映り、きらきらと無数の鱗のように輝き始めた。ひんやりとした川風が、顔をなでる。

三時間ほど前の陽気さとは、何という違いだろう。敗北感に責めさいなまれた彼を、モルダウは暗く快く、誘っているように思われた。

少年は、橋から少し身を乗り出した。両腕に力を入れて、目を閉じ、踏んばった。

(なーんてね。自殺ができたなら苦勞はないさ)

彼は力無く、自嘲的に笑った。そして小石を思い切り蹴っ飛ばした。

いい気になって、あんな探偵のまね事などやるものではなかった。

彼らがペトシーンの丘のベンチで大声を出して自分のことを喋っているのを、背後の灌木の繁みから聞いてしまったのである。

はじめのうちは保険局でのカフカの仕事ぶりの話や、カフカの小説のチェコ語版翻訳者で、密かな恋愛関係にあるウィーンの人妻ミレナの話、同僚の出目金めいた顔をしたトレムルの話、同じくシロウト詩人のギュートリングの悪口。

「ちっ。とんだディヒターぞろいで、わが国の輝かしい官僚機構の未来も、思いやられるねえ」などといって、連中はたわいなく盛り上がっていたのだが、いきなりヤノーホ自身の話に話題が変わった。

「ヤノーホ？ グスタフ？ いやはや、話によると、どうもグスティ坊やときたら、君を聖者あつかいらしいじゃないか」

ブロートがふたりの関係をからかうと、カフカは少し赤面しながら、真剣に反論した。

「そんなことはないさ。でも、いつもいきなり保険局に訪ねてくるには、まいるよ」

ヤノーホは、はっとして聞き耳を立てた。

――まいるよ、である。

カフカは困り切ったように続けた。

「彼はね、宿題をどっさり持ってくるんだ。あの子が書き溜めた詩とか、読んで感激した本とかを、両手に抱えて。こないだなんか、自作の詩を七十五篇も持ってきたよ。もちろん、あの子に悪気はないわけだし、そういう時期って、誰にだってあるもんだけど。実際の話、自分の創作と仕事のことだけで、もう僕は頭がいっぱいなのに、何でこんな余計なことまでやらなきゃなら

ないのかって、真剣に悩むんだ。膨大な保険の公文書作成と、自分の馬鹿げた妄想とに引き裂かれているだけで、僕は死にそうなのにね。ああ。……でもきっとそれがつまり、僕自身の悲しい定めなんだ」

カフカはいつものように、寂しい微笑でしゅんとしたように口をつぐんだ。

(もう、ダメだ。カフカは、自分をうとんじている！)

血の気がみるみる引いていく。何という恥ずかしいことだろう。これではプラハ中の迷路から「詩のかげら」を探し出す思想探偵も、形無しだった。

クラムが何かつまらない冗談をいったので、オットラが頑丈な顎を開いて、大いに笑った。その笑い声の大きいこと。

カフカは自分の詩を、何回も褒めてくれたではないか。もちろん、毎回いつもというわけではないけれど。あれはただの、同僚の息子に対する表面的な社交辞令だったとでもいうのだろうか。それに、

——まいるよ、である。

ヤノーホ少年は、頭を鈍器で殴りつけられたような衝撃を受けた。目の前が真っ暗になり、ふらふらと彼らを背にした。そしてもう意固地になって、小路から小路へと捨てばちになって歩き廻り、夕暮れの河岸までやってきたのであった。

それにしても、ついこないだって古本屋で見つけたレオン・ブロア『貧者の血』のチェコ語訳を貸してやったら、嬉しそうに感謝の意を表してくれたカフカではなかったか。それが「まいるよ」である。

しかも連中の間では、「グスティ」などと呼ばれて馬鹿にされているのだ。クラムごときにまで。

(もう、モルダウの中にでも飛び込んで、死ぬしかない)

彼の頭の中には、一瞬、モルダウ河をゆっくりと流れてゆく自分自身の水死体が見えた。

うつ伏せになり半分ほど舟のように水に浸かり、悲劇的な映像を刻印しながら群衆の視線にさらされ、しだいに下流へと流れてゆくのだ。

もちろんカフカたちも、その悲痛な風景に混じっている。

後悔しながら帽子を胸にあてて、こう呟くことだろう。

「ああ、あそこにかわいそうなグスタフが流れてゆく」

「皆、なんて彼に冷たかったんだろう」

「生きるには、純粹すぎたのね」

「どうしてもっと理解してあげなかったのかしら。ゆるしてグスティ」とつぶやくだろう。しかし、そのときになって泣いても、遅いのだ。

後悔しても、もう遅いのだ。彼は蜜柑色の夕陽を見ながら、うっとりとして下唇を噛みしめた。

どこをどうさ迷ったのか、ヤノーホが夕暮れのプラハの路地伝いに歩いてゆくと、薄暗い通り

に出た。

汚い服を着た子供たちが走り廻り、建物と建物との間に紐が張られて、貧しい洗濯物が干してある。

石段を降りてゆくと、壁の下に座って猫を抱いていた皺だらけの老婆が驚いたように彼を見上げ、険しい目で睨みつけた。饑えた匂いがしていた。

路地の底に汚水がたまってぴちゃぴちゃしている。避けて歩かねばならない。水たまりはランプのひかりを反映し、金色の平らな円盤のように見えた。

ランプで明るく浮かび上がっている奥の一角に、人だかりができています。

明かりの下で行われているのは、人形芝居だった。

簡単な台座の上で、二、三のグロテスクな操り人形が、長い手足をぎこちなく動かしていた。目鼻の誇張された美女やら、道化やら、魔法使いやらには、極彩色のぼろぼろの衣装が着せてある。

黒い服の狡猾そうな男が、子供たちや若い娘に、卑猥な冗談をいい、大きな目玉をギョロリとむいてみせる。

人形遣いの表情には、何かしら死神めいた陰惨さがあった。

その隣に、盲目らしい小柄な女が、リュートのような楽器を持ちながら座っていた。白くて丸い顔をした幼ない尼僧のようにも見える。芝居のところどころで、弦を引っ掻き、ぱらんぱらんと、悲しい音を響かせた。

灰色の両眼は、ばらばらの方向をむいている。

「ロミオ様、ロミオ様、あなたは どうしてロミオなの」

どう見てもジュリエットに見えないグロテスクな人形が、肩を左右に揺すりながら叫ぶ。人形遣いの指は長く、骨ばった指だけが異常に発達しているように見える。

子供たちはからだを前に倒して笑っている。

嗚れた中年男の声で、少女ジュリエットの台詞が語られているのがおかしいのだ。

どの子供の顔にも、あらかじめ不幸が刻印されていた。彼らは隣の子供も笑っているのを確かめるため、笑いながら横目で見ると、そんな仕草すら、ちっともかわいらしくない。

路地裏の片隅で、皮膚病で毛のぬけた犬が、桃色の地団のような脇腹を見せ、恨めしそうな目をしてぶるぶるとふるえていた。こいつももう、そんなには生きられまい。

「ああ今晚は、暑いわ。人が見ていないから、あたしどんどん脱いじゃおうかしら」

ジュリエット人形にかけられていた布の一枚が、落とされる。誇張されたふたつの乳房が、あらわになる。すると台座の下から道化が這い上がり、

「おお、おお。ジュリエット。なんておいしそう。食べちゃいたいくらいだ」

ロミオ役は、道化の人形が演じているらしい。痙攣したようにからだを震わす。どうやらシェークスピアを、無茶苦茶に脚色しているようであった。

「あー、はっはっはっはっ」突然太った中年女が、大きな口を開け、からだをそらして笑った。口腔内部が、桃色に覗く。眉のないつるつるの白痴的な顔が照らしだされる。ヤノーホは、豚を連想して、ぞっとした。

「ロミオ、どけ。ひひひ、俺様に先に食わせろ」

背中に瘤の盛り上がった醜い人形が、黒蜘蛛のように這いあがってくる。

「うるさい、リチャード三世。ジュリエット姫は、化物は嫌いなんだ」

ロミオは瘤をぼんと叩き、足で蹴落とす。リチャード三世は、ぱたりと落ちた。

また、げらげら笑い。

例の前掛けをした太った女は、あたかも自動人形のようにゆっくりとからだをそらせ、両膝を叩き「あーっ、はッ、はッ、はッ、はッ」とまた笑う。

「……人生なんざァ一幕の夢。人は役者だ、化けたがナンボ」

死神のような酷薄な顔をした人形遣いは、手慣れた口上をリズムをつけて続けた。

「どうせこの世は人形芝居。運も不幸もクジ運しだい。意味などハナからありやしねえ」

ヤノーホはその文句に、言い知れぬ反撥を感じた。

「……人生なんざァ一幕の夢。どう生きようが同じこと。人間みんなボチボチよ」

死神のような人形遣いは、ロミオ人形とジュリエット人形を、重ね合わせた。

蜜柑色のランプの光と毒々しい哄笑の中、グロテスクな人形はもつれあい、からみあい、器用に腰を動かし、ゴトゴトと音をたてた。

腐ったような汚水の匂い。

盲目の尼僧のような女が、古びた楽器を、ぱらん、ぱらん、とわびしげに鳴らした。

路地の上の月が、陰惨な人形遣い顔を浮かび上がらせる。

ヤノーホは、いやなものを見たような気がした。

そのくせ、しばらく水たまりの脇に立ち尽くしていた。

紫の雲に半分隠れた月が、あたりをオリーブ油でぬぐったように、蒼白く照らしている。

狭い小路には、あの盲目女の楽器の音だけが、いつまでも響いていた。

その年のプラハの夏も半ばを過ぎ、金緑色の新しい芽も、日射しになぶられ、濃緑の重い色合いに沈む季節となった。

迷路状になった小道を覆う石畳は熱気を帯び、花屋の娘がいくら水をまいても、すぐに乾いてしまう。モルダウ河畔の公園の白柳やポプラも、熱を帯びた大気のためか、ぐったりとうなだれている。

遙かな水面を渡って湿気を帯びた風が、岸に面したカフェのカーテンや、窓辺の鉢植えの草花を煽っていた。

マックス・ブロートは、忙しさのためしばらく会っていないカフカからの手紙を、溜め息をつきながら読んでいた。多少はじれったさにいらいらしながら、大きく腕まくりをした腕で手紙をつまみ、もう片方の手では演奏の拍子でも取るかのようなポーズをし、こつこつと部屋中を歩き回って、文面を読み進めた。

カフカは今、自作小説の翻訳を通してつき合っているウィーンのエルンスト・ポラック夫人、ミレナ・イエセンスカとの関係を悩んでいるようだ。

この前会ったとき「でも僕らは、絶対に一緒にはなれないんだ」と深刻な顔をして、カフカは告白した。

「人妻との火遊びか。まったく、柄にもないことを。どうもフランツの奴も、実際問題に関しては小回りが利かないからな」ブロートは天井を向いて、目を閉じた。

あまり風通しのよくない暗い部屋は、蒸し蒸ししていた。妻が奥のキッチンで洗い物をしているので、水の撥ねる音や食器の擦れ合う金属質の音が響いている。

学生時代からのフランツを思い出すたび、彼は庇護本能がわいてきて切なくなる。

あの少年じみた微笑と洗練された物腰。例えば天使がまちがってこの世に降りてきてしまったような、奇妙な存在感。カフカは本当の意味では、誰にも打ち解けず、心を開かなかった。通俗性というものが、根本的に欠けていたのである。

ところが普通そういった人物は憎まれてしかるべきなのに、彼の場合はむしろ好意的に遇されるのであった。学生時代もそうだったし、保険局に入ってからも同様らしい。なにしろロクに会話を交わしたこともない掃除婦にすら、慕われているのだから。

ブロートは会うたびに、何かこの親友の助けになることはないかと、気を巡らせてしまう。それでいて、カフカが時折吐いてみせる鋭い警句めいた言葉に接すると、感嘆のあまりひそかにノートに書き留めざるをえないのだった。

それは、学生時代からの彼の習慣なのであった。カフカが授業中に描いた教師の似顔絵の落書きすら、大事に保存してある。あのひ弱な男には、何かしらそら怖ろしい、普通ではないところがある。詩人や文学者というよりも、むしろ旧約の預言者めいた不可解なものが。

魂はどこから来て、どこへ行くのか。

われわれの精神の秘密をかいま見させる閃光が、彼の言葉のいたるところで、暗い紫水晶の彩りを帯びて輝いている。この世のミステリーをあばくヒントが、あのスフィンクスめいた微笑の奥には隠されているはずだ。

ともかくカフカがまだ無名の作家だとしても、自分だけは彼の理解者なのだ。そして誰もまだこの株は、買ってはいない！

彼は口元をひきしめ、目を鋭く左右に二、三度動かすと、大きく何度もうなずいた。

しかし、最後に落ち着く考えは、いつもこうであった。

友人の散文がいくら透明で緊密で素晴らしいとはいえ、フランツ・カフカが確かに何者かであるとはいえ、自分は自分として、このマックス・ブロート氏として、相当なものなのだ、ひとかどの人物なのだ。

彼は部屋の鏡をじっと見つめ、お気に入りの蝶ネクタイをひっぱりながら、そう思う。持ち前のリーダーシップ、弁舌とアジテーションの才、人好きのする健康的で明るい笑顔、そしてある種の男気と友情と決断力……。

プラハのカフェのいたるところで這いつくばって、論敵がやってくるのを蜘蛛のように待ち構えているだけの連中、うさん臭い政治パンフレットを書き散らして呑み代に代えているような凡百のカフェ文士どもと、このマックス・ブロート氏は違うのだ。この世に、この社会に、重要な役割があるのだ。

そう考えることによって、ブロートは自分自身にも、心から感動してしまうのであった。そして団子鼻を得意そうに反らせながら、蝶ネクタイを片手で大きくはじくのであった。

それから数日後、編集の仕事がひと段落したある晩の午後遅く、例によってブロートのところに唐突にヨーゼフ・クラムが現れた。

二人は友人のカフカやオスカル・バウムなどには内緒で、よく「詩と女をさがしに」プラハのいかがわしい夜を探索に行く習慣があったが、今夜はそちらの方の誘いではないらしい。以前クラムは、裏町の馴染みの売春宿に入り浸っており、その二階の奥の部屋で、ヤクザな原稿を書き飛ばしたりしていたのだが、最近はより強い刺激を求めて、さらに罰当たりな秘密の館にも出入りしているらしかった。この前は、初めて連れて行かれた家で阿片まで勧められた。

扉を開けると、クラムは両手をポケットに突っ込んだまま、秘密警察のような陰気な顔でタバコをくわえていた。夕陽が街路樹の片側だけを、丸みをおびた桃色に照らしていた。コーヒーを勧めると、珍しく彼は断った。

「これから、ある人物に会いに行くところなんだが」と彼はいった。

「君がご察しの通り、ウグリノ叡知協会の関係だ。一緒に行かないか、君も。いや、別に無理にとはいわんが」

本心をいえばブロートは、あまりクラムの裏の人脈とは、接触したくはなかった。というのも、無政府主義者や社会主義者、それどころか犯罪者以外の何者でもない者、よくてせいぜいが奇

人風のアウトローといった面々が、多すぎるのだ。

それに、いつかマックス・ブロート自身、シオニストとして堂々と選挙に打って出てやろうとも考えていた。つまり、政敵がどこを叩いても、スキャンダルひとつ出てこない『紳士』でなくてはならない。

「それなら、なおのことさ。この人物は隠れた有力者だ。プラハは狭いからな、どこで力になってくれるかわからない。いわゆる、奇蹟師のひとりだ」

奇蹟師、ヴンダーラビとは、ユダヤ教の特殊なラビのことである。

ヴンダーラビは、ユダヤ教の中でも根幹を成すモーゼ五書や『タルムード』のみならず『ゾハールの書』などのカバラの秘儀、つまり「生命の樹」の奥義に通じている少数のラビのことで、いわば秘教の導師の側面を持っている。

ラビによっては効能のある護符を作ることによって著名であったり、魔術的な病気直しを施したりするため、西欧社会の表面には現れなくとも、儀式を司る者として、ユダヤ共同体内部ではいまもなお隠然とした影響力を持っているのであった。

それはいい。しかし、クラムがいまから訪問しようとしているラビ・レムは、別名「きちがいラビ」ともいわれ、奇矯な言動により風変わりな異端の導師として、あまりよくない噂があった。まともな教養のある市民や正統派ユダヤ教徒からは、うさんくさい目で見られているのだ。

プラハ大学で物理学を学んだというのも例外的であったが、その反面、中世の伝説的な導師ラビ・レヴィの闇の部分を受け継ぐ者とも噂されている。中には「あれは、ラビなんぞではない。ただの山師だ。とんでもない俗物以外の何者でもない」という者すらいた。

かと思うと、プラハっ子なら知らぬものとしてないような大物政治家や高級官僚が、このラビのところにお忍びで訪ね、内密の相談事を持ちかけたなどという噂もある。

以前、オーストリア・ハンガリー二重帝国中枢部に属するある有力者の妻が、個人的な病気の悩みで彼を訪れたというゴシップが流された。ところがその直後、実は政府とシオニストとの間の調停問題で、このラビが重要なフィクサーとして動いたので、それをカバーするためにそんな噂が流されたのだという、さらに穿った解釈も流布された。

しゅしゅ、というか、断る理由がすぐに見つからなかったので、ブロートは促されるまま帽子と上着をかかえて、クラムの後について行った。

十字路には、すでに黒塗りの車が用意され、運転手は無言でドアを開けた。深い藍色に沈んだモルダウを横目に、夏の終わりの疲弊した風景の中を、車は静かに進んでいった。一行がやがて到着したのは、プラハ郊外ジュシコフ地区の外れあたりらしい。市街地から離れた丘陵地には、貴族や実業家の別荘、修道院などが点在している。ときおり林の奥に覗いている広大な館を幾つか過ぎて、車は小石を踏みしめつつ、ゆるい坂道に滑り込んだ。虫の啼いている闇の中、やがて長い鉄柵に囲まれた建物の中に入ると、鱗のような群葉と夥しい蔓に覆われた灰色の無愛想なロマネスク風の城館が現れた。

「月一回、ここで『協会』の集まりがあるんだ」

クラムは小さくつぶやいた。

アーチ型の黒い鉄枠で囲まれた窓が、監獄の建物のそれのように、蒼黒い空に開いていた。黒

い炎のように並んだ樹々の隙間からは、回廊に囲まれた広いテラスや、フランス式幾何学庭園が見えた。ギリシャ風の彫像群が、闇を背景に灰白く立体的に浮かびあがっている。一部は手入れされているようだが、その奥の庭は、雑草や下草が、伸び放題に荒れた廃園のようであった。

まもなく頭の禿げた小さな礼儀正しい男が、オレンジ色の灯を背景にして現れ、丁重に二人を奥へと通した。神経質げに頻繁に目をぱちぱちさせるこの男は、親切的な靴屋といった印象だった。

この館は、古い貴族の別荘でも買い取ってそのまま利用しているようであるが、いったん内部に入ると、ウィーン分離派やアールデコふうのインテリアや調度品が備え付けられていた。屋敷の主は、なかなか流行に敏感らしい。

二人は、赤い絨毯の敷かれた部屋に通された。彼らは、多少の緊張を感じながら、植物装飾の刺繍のついた豪勢で重そうなソファに沈み込んだ。

しばらくして三十くらいの美人が、謎めいた微笑を浮かべながら、銀の盆にのせたワインを持ってきてグラスに注いだ。青く光るドレスの胸元から、豊かな谷間が仄暗く覗いた。よく磨かれて艶のある豪華な調度品が、シャンデリアの下で底びかりしている。ブロートはぎこちなくあたりを見回していた。

「どうかねマックス、こんな邸宅に住むってというのは」クラムは冷ややかに笑った。

「そして、ああいうグラマーな美人を侍らすのさ。あの、尻の形を見たかね。悪かアないだろ。……ところでこの間、カフカの親父さんと、ぼったり市庁舎前で会ったよ。もっとも奴さん、帽子に軽く手をかけただけで懽然として行ってしまったがね。相変わらず、尊大なおとつあんだな。ぷッ！霜焼けになりながら村から村へと手押し車を押して歩いたって。今じゃプラハのお偉方連中とも口が利けるようになったって。……なかなか面白いおっさんだ。ま、君と違って、あまり俺は好かれてないらしいが」

「なに、お互い様さ」そっぽを向いた。

「しかしあの親父も、まさか俺たちに生殺与奪の権を握られているというのは、夢にも知るまい」

「……その話か」ブロートは不機嫌になり、眉間に深い皺を寄せた。

「一九一二年、プラハ・アスベスト工場ヘルマン会社設立。いうまでもなく、カフカ家のファミリービジネスだ」

クラムは煙草をくわえた。

「そしてその後の労働争議。いろいろあったなアあの頃は。一步間違ったら、俺も今頃は豚箱だった。これでも俺は、血を見るのは嫌いなタチでね。叡知協会の息のかかった政治家が何人が動いてくれたんで、何とか警察も新聞も押さえることができたんだが。君だって、あの事件は、忘れちゃいるまい。何しろ、労働者の阿呆どもを煽るパンフレットの文面は、君に頼んだのだからマックス。なかなかの、名文だったよ。あれはプラハ中の工場で、連鎖反動的に内部分裂を図り、経営側とプロレタリアートを対立させ、しかもそこに保険金殺人を連鎖させるという、実に壮大な謀略だった。最終的には、ボヘミア王国政府の屋台骨を揺るがせることが狙いだったわ

けだが。カフカの工場は、その計画の第一群グループに属する工場のひとつだった。半年前から、われわれの息のかかった職工を、何人も内部に送り込んでおいた。二人の工員の事故死と、目撃者の職工H.H.ヤーンの失踪、そして死体発見劇。ある妨害があって、計画は残念ながら途中で尻つぼみに終わったがな。あれから、何年になるんだ。懐かしいなァ。あれでもう俺たちは、友情とは別の意味で、離れられなくなったってもんさね」

「俺はあのとき、計画のすべてを聞かされていなかった」

ブロートは吐き捨てるようにいった。そして苛立たしげにグラスを口元に運んだ。

クラムは後頭部で腕を組んで、大きく伸びをした。

「何をそんな顔しているんだね。それに、あんまりここで飲みすぎるなよ。これからちょっと面白いものが見られるんだ。……ところで、こないだの話に出てきたグスタフ・ヤノーホとかいうガキと、カフカとの関係だが。ある未確認情報によると、カフカはヤノーホに例の事件の裏を、洗いざらい語ってしまったという話があるんだ。しかもヤノーホは、フランツとの対話を、克明に日記に書きしるしているという」

水晶色の大型のシャンデリアが、煌々と赤い絨毯を照らしていた。調度品を過剰に装飾している金銀細工の縁取りが、妙に陰惨に重苦しく見える。

「問題は、どこまでヤノーホが、そのことに自覚的かということだ。その坊やにずる賢い知恵があれば、その手記をある種の連中に、大金で売り渡すこともできる。ま、ひと財産さ。むろんその場合、命の保証はないがな。裁判で証拠として引っ張り出せば、文字通りの物証ではないが、あの事件に関する今まで見えなかったものが、ごっそり見えてくる。何しろ、現役の保守派の政治家まで絡んでいたのだからな。とてつもないスキャンダルさ。われわれにとっても、フランツ・カフカ氏にとっても一大事だ。いや、追究し過ぎると、プラハ中があっと驚くような政界の大物の名前も出てくる。……君は、マックス、過剰防衛と笑うかも知れない。しかしわれわれはつねに、臆病なくらいの態度で臨んでいる」

「その話をするために、ここに連れてきたのか」こめかみに、冷や汗がたれてきた。

「それも、ある」

「フランツによると、グスタフの親父さんは、ときどき息子のノートや詩を、こっそり見る癖があるらしいぜ。保険局の同僚だがね。なにしろその覗き見こそが、フランツに息子の面倒を見てくれと頼み込んで来たきっかけなのだから。ともかくあの坊や、フランツのことは聖人あつかいだしな」あえて挑発するように、ブロートはいった。

「そのノートの内容が発表される可能性は」

「それは、ありえないだろう」

「われわれの調査によると、グスタフ・ヤノーホは、すでにいくつかの詩や評論を、目立たない雑誌に発表している」

「それが、もしそうだとしても……。考え過ぎだな。君たちは」

「あのガキ、H.H.ヤーン事件の事も、フランツの口から聞かされているかもしれない。君も知っているだろうが、あの労働争議の内幕を知ったヤーンという男が突然失踪し、その後、森の奥で惨殺死体で発見された二次的事件だ」

「カフカは、事件の実体を知らないはずだ。彼がヤノーホに話すとか、ましてや、ヤノーホがその件を公表するなどという馬鹿なことは、まずありえない。相手はまだ、ほんの…」 「なぜそういい切れるんだ。なぜ断定できるんだ。君だって、まんざら無関係ではないんだぞ。いっちゃ悪いが、歯車のひとつだった。われわれは最悪の事態をつねに考える」

語気鋭く、クラムはいった。ブロートの顔は、怒りで赤くなった。

「それにこれは」クラムは目を伏せて、静かに続けた。

「俺だけの判断や推測ではないんだ。わかるだろう？ 小さな芽すら潰しておくというのが『協会』の方針なんだ。ヤーン事件が公になると、今度は確実にわれわれの身が危ない。さらにあの事件の追究が発端となって、過去の未解決の事件がむし返しされるだろう。それに、俺にも『協会』に借金がある。本当は、個人的には気の進まない仕事なのだが」

重苦しい沈黙があった。クラムはおもむろに、顔をあげた。

「……グスタフの居所は、わかるかね？」

ブロートは、ぞっとした。

「おいヨーゼフ。相手はまだ子供だぜ。どういう理由があろうと、君たちの謀略に巻き込むわけにはいかん」

ブロートは、憤然としてワイングラスを空けた。来るのではなかった。

「子供？ それがどうした。われわれは初めから、人情というものを切り捨てている。つまらない感傷にひたっている暇は、ないんだがね。ふん、心だの魂だのヒューマニズムだの文学だの、そんな議論は、もう聞き飽きたさ」

「誰がそんな話題を出した？」ブロートは声を荒げた。

「誰もそんな話、してないじゃないか。一体、誰がいまそんな話題を出した？」

クラムはぴくんと耳を動かした。

そして不意にひきつけを起こしたように、嘲り嗤った。

「ああ。君が正しいさ。いつでも君やフランツの方が、正しいんだ。なにしろマックス・ブロート氏は、名士だものなァ。リーダーシップのある優等生だものなァ。俺はしょせん、墮落したゆすり屋さ。すさんだ目つきの、志の低い、三流新聞のゴシップ書きだ。君やカフカを横目で見て、いつも羨んでいた。そして内心、恐れていた。こいつらはいつか、俺を見下すだろうってな。ゴキブリを見るように、顔を背けるだろうって」

ブロートは、驚いたように顔をあげて、クラムを見た。

「それがどうしたね。エエッ。それがどうしたっていうんだ、マックス。いいか。俺がもし本気になったら、君もカフカも、現在の地位を失うんだぜ。信用を失い、職を失うんだ。社会的に、転げ落ちるんだ。いや、俺の料理のしよんによっては、監獄行きだ。どうとでもなる。……それだけははっきり、覚えておけよ。俺を、甘くみるなよ。文学だの、詩だの、言論だの、美だの、そんなものがこの世を動かしているんじゃない。魂がどうした？精神がどうした？ アア？ そんなものは純情なヤノーホ君とやらに、任せておけ。この世を動かしているのは、操作しているのは、操っているのは、別の力だ。もっと、不条理な力だ。きれいごとじゃないんだ」

充血した暗い目に憎しみを滲ませ、クラムはいった。息が荒くなっていた。しばらくすると彼は、苦しそうに片手を胸に当て目を閉じた。彼も肺を病んでいた。「どうやら、内部の情報によると、この間のカレル橋の水死体の件も、実は……」

「そんな話は、聞きたくない」ブロートは横を向く。

――来るのではなかった。

はっきりいって、ある時期からこの男とは、縁を切るべきだったのだ。政治ゴロや名士のゆすり、アングラ情報誌に仲間のスキャダルを売るようなことを平気でやるのが、このヨーゼフ・クラムという男である。

それにプラハの闇の部分、変態相手の陰惨な売春宿に自分を連れ込もうとするのはもっとたまらない。この男の嗜好は普通ではない。

以前彼の部屋に行ったとき、中から女の尋常ではない悲鳴が聞こえてきて、あわてて踵を返したことがある。それ以前にも棚の奥から、妙な鋭い形をした黒っぽい器具を出してきて見せられた

ことがある。

「ウィーン製で、めったに手に入らない」そう囁きながら、クラムは意味ありげにニヤニヤしていた。マルキ・ド・サドやマゾッホ気取りなのだ。

以前、凄まじい格好をした男女の夥しい裸体写真も見せられた。

中には乳房を大きく新月型に切り裂かれている中国女の死体写真なども混じっていた。ウィーンかプラハの地下室のどこかで、夜毎そんな光景が展開されているのだろうか。あるいはどこかの植民地や香港あたりの光景かも知れない。

「あの事件には、われわれの友人フェリックス・プルシーブラムの父親で、プラハきっての名士であるオットー・プルシーブラム博士なども、少なからずかかわっている。なにしろ博士は、保険局の理事長だったからな。ま、何も知らないのは、あのふんぞりかえって怒鳴ってばかりいるヘルマン・カフカ氏ばかりなり、だ」

「君は、ゴロツキ新聞屋の本領を発揮して、俺やカフカまでゆすろうというのか」

「ほう、そう見えるかね。それならそれでかまわない。まあ、いま名前を並べたトンマは、我々の据え膳を食わされた気の毒な連中だ。しかしもし、あの労働争議の背景が、何かのきっかけでもう一度暴かれて当局が動けば、当時の金の流れも追及され、政治団体『クルプ・ムラディフ』や、無政府主義者のいくつかの結社、あるいはその背景にあったウグリノ叡知協会、そして政界中枢にも、捜査が及ぶことになるだろう。となると、ほぼ忘れられて迷宮入りとなりつつあるH.H.ヤーン惨殺事件、工場で事故死ということになっている二つの保険金殺人、労働者災害保険局法規課副書記官フランツ・カフカとの関係、さらにはわれわれ自身も問題とされるだろう。少なくともわれわれの仲間だけでも、五、六人の逮捕者が出てくることになる。組織本体を守るために、途中の下っ端が犠牲になるわけだ」

「フランツは関係ないだろう。君は何を考えているんだ、ヨーゼフ」

「そんなことはない。そうは問屋が降ろさない。工場の発起人のひとりにはフランツ・カフカ氏だ。それに、奴のサインは保管してある。彼が否定しても、証人など幾らでも作ることはできる。裁判というのは君、創作活動なのだよ」

ブロートは背筋が冷たくなり、危うく、持っていたワイングラス床に落としそうになった。

「何をいう。だいたいカフカは、工場の監督なんか、死ぬほど嫌がっていたんだ。あれは親父さんに、無理に押し付けられた仕事なんだ。創作する時間はなくなるし、役所仕事だけでも消耗しているのに、工場経営なんて、とうてい無理だと嘆いていた。それを君は」

ブロートの声は、怒りでかすれた。

「関係ないな、他人の内面の問題など。それに、午後二時で帰宅できる高級官僚ドノの待遇など、別に同情の余地はない。奴のいう、ご大層な不安だの苦悩など、せいぜいがそんなお坊っちゃん気質の甘ったれじゃないか。……いや、なに、証言や証拠さえ出てこなければ、この事件はなかったも同然だ。こちらとしてはこの件をつつつく奴さえいなければいいんだ。証拠は徹底的に隠滅する。バレたら地獄にご同行願うが、バレなきゃこれまで通り。つまりそれだけのことだ。しかし世間には、そんなことをつつつく奴、さらにはつつつく奴を作る者も出てくる。力の均衡というものでね。力と力。金と金。自由自在。歴史なんてものは、そんなものだが」

「まさか君は、あのヤーノホを消すことを、考えているのではあるまい」

「いや、むろん確実なのはその方法だが、目的を達する秘策さえあれば、それに準ずる方法でも十分だ。選択肢は、今のところ複数といえる」

ヨーゼフ・クラムは、相手の反応を伺うように、無遠慮な目つきでじろじろとブロートを見た。

「……しかし」

ブロートは呻くような声を上げ、苛立ったように溜息をついた。

二人が黙りこくっていると、装飾彫刻のついた重い木製の扉がゆっくりと開き、さっきの小柄な几帳面そうな執事が現れた。

彼らは案内されて、赤い絨毯の敷かれた長い謎めいた廊下を進み、階段を下に降りてゆく。どうやら地下室らしい。

仄暗い踊り場には、青銅の二体の女神像の掲げたランプが金色の光を放ち、白い壁に彫られた鮮やかな植物模様のレリーフを、立体的に際立たせている。

扉を開くと、そこには極彩色の異様な部屋が現れた。

それは工場、倉庫、いやほとんど機械仕掛けの地獄であった。

あっけにとられていると、不意に暗い黄緑色をした何かとてつもない巨大な動物が、唸りをあげて彼の目に飛び込んできた。ブロートはからだを反らせた。まるで小型のインド像が、頭ごと踊り出したようだ。あたりの宙空を左右に移行しているのが、鈍い光を放つ大小さまざまな金属球体であることがわかってきたのは、ようやく自分たちの位置関係をつかめてからであった。

――これは巨大な動力天球儀とでもいったところであろうか。

部屋の隅に、大きな黄色い顔面をしたもったいぶった老人が、ナポレオンのように片腕を胸に当て、現れた。背の低い老人で、ラビ特有の服装をしているが、通常よりも毒々しく魔術的な気配がある。ふたつに分かれた白くて長い顎鬚。自己顕示欲の強そうな、何とも食えない顔だ。

どうやらこの老人が、ラビ・レムらしい。

「安全じゃよ、そこに立っておれば」甲高いダミ声が床に響いた。

「……これが太陽。そして、そのサファイア色の物体が、地球だ」

白い髭をなでつつ、ラビは銀の錫杖のようなものを片手で持ちあげ、指し示した。中世の魔法使い気取りらしい。

「このオブジェは、作るのに二十年かかった。どうかね、なかなか独創的な芸術品じゃろう。しかし、例のアインシュタインの相対性理論を反映させるのには、これから二十年かけて改造しなければならんな。まったく迷惑な話だ」

厳めしい顔つきで、老人はゆっくりと階段を降りた。ブロートとクラムが立ちつくしている脇を、ウォンウォンと凄まじい振動音を響かせながら、石榴色の冥王星が横切ってゆく。中心には蜜柑色の溶鉱炉のように輝いた巨大で豊満な太陽が、ずっしりと陣取っている。その周りを小さな美しい水星が、コバルト色にきらめきながら回転している。

エッフェル塔の一部のような鉄骨が、大きく弧を描いて横に走ってゆくので、ブロートは上着を抱えたまま、飛びのいた。クラムは見慣れているのか、退屈そうに隅っこでタバコをふかしている。頭部だけ異常に発達した背の低いラビは、落ち着きなく天球儀の中を歩き回り、ひょいと惑星を避けたりしながら、古い礼服をかきむしるようにして脱いだ。

「室温が、高いな。暑かったら、遠慮なく上着を脱ぎなさい。かまわないから。……君たちは、ヨハネス・ケプラーの天体模型の構造を、詳しく知っておるかね。なに、知らない。これだ。まあ

いい。ケプラーはプラハにも住んでいたが、わしの模型はそれ以上にすばらしい創造物じゃよ。旧市庁舎のハヌシュの天文時計など、問題ではない。何しろ、物質宇宙を表現しているだけではない。これらの天体はすべて生命の樹、カバラの秘儀セフィロートに対応している。プラハ大学の阿呆教授どもには、もったいなくて拝ませられんがな。天球儀と時間概念と光の解釈、カバラ神秘学の世界観を融合させ、モデル化しておる。小宇宙と大宇宙との対応だ。これが、絶対界アイン・ソフからの存在世界の流出だ！」

老人はそう宣言すると、預言者のように錫杖を上げた。

ファウスト博士か、魔術師のプロスペローでも気取っているのだろうか。

「いやはや、最近の若い連中は、ちっともタルムードやカバラを研究しとらん。慈悲深いラビの言葉より、場末の踊り子のたわごとに、真理があるというわけだ。嘆かわしい。我が民族精神の源の研究もしないで、ユダヤの陰謀などというドイツ人の馬鹿話に一杯食わされておる始末じゃ」

こんな奴がラビであってたまるか、とブロートは思った。彼は芸術的には開明的ではあったが、宗教的には保守派に属していた。それに彼は、さっきのアスベスト工場設立当時の事件の話で、すっかり気分が滅入っていた。

クラムには、はっきりと憎悪を感じた。

不意にラビと、目が会った。

老人の目は不思議な光を帯びて、ブロートを捉えた。彼はすぐに目を伏せた。

執事の案内で、彼らは別室に移された。暗い書斎のような部屋に座る。書棚には、ラテン語やギリシャ語の本がぎっしりと並んでいた。何か香がたき込められているのか、奇妙に沈静した気分になる。大きなマホガニーのテーブルが、鈍い鉛のような光沢を放つ。

「クラムから、あんたのことは聞いておるよ」

ソファに身を沈めていたラビは、ゆっくりと口を開いた。古い革表紙に金文字の刻印された分厚い書物を持ってこさせ、どっさり黒いテーブルに置いた。ページを開くと、鮮やかな中世的色彩の人体解剖図が描がかれていて、不可解な象徴がびっしりと記されていた。挟まれていた数枚の書類には、ブロート自身の経歴や生年月日などの細かいデータが、書き込まれていた。

大きな丸められた藍色の布が届くと、ラビはテーブルにその美しい布を広げた。老人はその上に乗って、あちこちに数字を書き加えていった。

まるで大きなグロテスクな赤ん坊が、這い這いをしているようだ。

さっきの青いドレスを着た肉感的な女が現れた。豊満な乳房が挑発的だ。

彼女が持ってきたのは黒いビロードに大切そうに包まれた大きな水晶球だった。つややかで透明な水晶球の中心に、室内の映像が丸ごと魔術的な細密画のように映りこんでいた。

女が肉づきのいい白い腕を伸ばし、照明を消した。

ブロートとクラム、そしてラビの顔だけが闇の中に黄色く浮かぶ。つるつるとした透明な水晶球の奥に、鮮明な炎が小さく映り込んで、金色に繊細に慄えている。ラビは床に降りて、疲れたようにソファに座った。そしてしばらくの間、瞑目した。

不意に顔をあげると、ブロートの顔を静かにのぞき込み、ゆっくりと口を開いた。

「ほう、生命力が、強いな。うむ。あんたの人生は、あんただけのものではないな。……問題は、そう遠くない時期に、たくさんの国を巻き込むような、かつてないほどの大変動が起こるということだ。われわれの多くの知人たちが、運命を二分されるだろう。直感的に危機を感じ、不安になっている者や、精神的に病み始めている者すらいる。しかし、あんたはブロートさん、何とかやっていけるだろう。そのときは、思いやりを持つことじゃ」

老いたラビは、目をしょぼしょぼさせた。それはさきほどの偏執狂のような目つきとは違って、田舎の村によくいる酸い甘いもかみ分けた苦労人の年寄りの目であった。

「……ふむ。旅の暗示が出ておるな。ある時期から、プラハを離れるということか。そちらの方でも発展の暗示が出ておる。気になるのは、おまえさんの友人に、不思議な星を持った者がいることだな。大変、妙な星だ。兄弟、なのかな。違うな、これは。なにしろあんたと非常に、縁が深い。占星学的に、興味深い例だな。文筆の仕事については、まあうまくいくじゃろう。愛される人柄じゃな。自説に固執する難点があるようだが。うん、まずまずの幸運なよい星を持っておられる」

ラビは黄色い大きな顔をあげた。白い鬚が胸元まで垂れている。相手をいたわるような、あるいは子供にゆっくりと噛んで含めるような、独特の口調。東洋の老賢者の風格。一瞬、昔啓蒙的な書物で知った「老子」のような人物を思い、その連想を自分でおかしく思った。

青いドレスの女が、ハンケチで老ラビの額に浮かんでいる大粒の汗を拭き取った。

ブロートは少なからず感動していた。

奇妙な占いに説得力があったからではない。さっきの権威的なきんきん声と比べて、今度はなんと思いやりのある優しい声で語ってくれることだろう。同じ人物とは思われない。

「この、お前さんに近接する星が、後半生にかかわってくるな。微弱だが、厳しくて、深い光を放っている。青紫色の透明な光だ。なかなか消えんぞこの星は。お前さんは、まあいわば、その惑星のひとつじゃな。徳があるな、あんたは。誠実な星だ。お世辞ではない」

一見、奇人風のこのラビの人気の秘密が、ブロートにもわかったような気がした。

ふたたび巨大な動力天球儀のある部屋に戻ると、ラビは奥の機関室のようにになっている箱の中に入り込み、また険しい顔で足を踏ん張り、数本の鉄のハンドルを操作した。いきなりグオーンという物憂い金属音が響いて、みるみる複数の球体が、上下さまさまに動いてゆく。

海洋生物のような鈍い色合いをした球体群が、風船のように持ち上がる。

しばらくして、天体が静止した。どういう仕掛けになっているのか、上方の窓から幾筋かの光が、極光のように射してきた。まもなく、天体は静止した。

「どうかな。これがおまえさんのホロスコープじゃよ」

まばゆい光線が天体を照らしていた。紫水晶やルビーやエメラルドの色合いをした透明な光が、スタンドグラスを通したように壁や床に投影されている。部屋の中空には、淡い円光が幾つも浮かんでいる。機械仕掛けの地獄めいた部屋が、プラトンの幻想的なアイデア界に変容した。ブロートもクラムも、その虹色のオーロラに包まれ茫然としていた。垂直の光の淡い立体像が、幾つも浮かびあがった。霧のように微細な光の粒子が上下している。

――生命の樹、セフィロートだ。

老ラビは、天球儀と光の曼陀羅の前に立ち、厳かに両手を挙げた。そして荘重に反響する暗い丸天井に向けて、嘎れた声を発した。

「知恵の樹から、生命の樹へ。……偉大なるケテルへの、われわれの、大いなる魂の旅。広大な無限者への帰還よ……叡知の光よ」

ゆっくりと歌いあげるように続け、それからラビは古代ヘブライ語らしき言葉で、何か呪文のような言葉を唱え始めた。

館の背後の黒い森の中で、フクロウが物憂く鳴いていた。

ブローとクラムは押し黙ったまま外に出た。深々とした夏の樹木の匂いがする。ひんやりとしている。館は小高い丘陵にあるので、遠くプラハ市街の街灯や教会の明かりが見える。

モルダウの暗い川面に、銀の光が縮れている。

「ブロー様。お忘れ物です」

玄関のランプの下で車の用意を待っていると、例の几帳面な靴屋のような執事が、足速に帽子を持ってきてくれた。背の低い彼は、見上げるようにしてささやいた。

「くれぐれも、今夜のことはお話しにならないように」

ぺったりとした平面的な顔に、冷たい微笑を浮かべた。

「われわれとの付き合いの基本は、約束を、お守りになることです。わたくしどもは、力にもなり、また毒にもなる。ブロー様も、この間のモルダウ河の椿事は、お忘れではありませんまい。新聞にはよく出ておりましたな。あの男もわれわれの約束を守れなかったばかりに……」

執事は薄い唇を歪め、目で語った。

「もっとも、報道では意図的にあのようになっています」

はじめてこの小男が、不気味に思えた。

それにしても、暗示的な表現が好きな奴らだ。

樹木の黒い枝がたわみ、大きな蔭を落としている。

ブローは黙って帽子を受け取った。

モルダウの件とは、さっきクラムがいかけた水死体の揚がった殺人事件のことだろう。

帽子を目深に被ったクラムは、両手をポケットに突っ込み、執事の話の効果を確認してでもいるのか、じろじろと友人を見ている。

「しまった」とブローは舌打ちをした。

ヤノーホ少年についての彼らの考えについて問いただす機会を失ってしまった。

下っ端のクラムを相手にするより、直談判ができたのに。密かに催眠術でもかけられたのか、あの老獪なラビのペースに巻かれて、無為な時間を過ごしてしまった。

フクロウが低く啼く中、黒塗りの車がゆっくりと曲がり、二人の前にとまった。

グスタフ・ヤノーホは、あれからしばらくカフカと会っていなかった。

ひとりで鬱々として、ベッドに寝転びながら本を読んだり、他愛のない書き物をしたりして、その日その日を過ごした。

相変わらずプラハの裏町を、憑かれたように歩き廻り、色づく街路樹や路上の風景を見ては、じっと考え込んだ。何かヒントを得ると、そそくさと家に帰って、夢中で散文にしたてあげた。翌日になると、その詩や文章を読み返し、がっかりしたあげく、朝食を平らげる食欲すらなくしてしまう。

彼は「インスピレーションに襲われる」と、授業中でもノートを取り出し、自分の世界に立て籠もった。

「グスタフ、何をしている！ 今はギリシャ語文法の時間だぞ。勝手なことは許さん。わかっているぞ。立って。立つんだヤノーホ。いま隠したものを、出しなさい。いいから出すんだ。さあ、読み上げて」

彼がのろのろと椅子から立ち上がり、観念していやいやながら読み始める。するとまわりの生徒たちは、両手でバタバタと机を叩いて囃し立てた。

(こいつら、何もわかっちゃいないんだ)

級友たちを相手にしても子供っぽいばかりで、まるでカフカの代わりにはならない。

音楽室で好きなピアノを独りで弾いていると、いまましい彼らがやってきて、わざと変な声で、流行りの歌や卑猥な替え歌を唄ってみせた。

ヤノーホが連中を無視してショパンを弾き続けると、ピアノの下にもぐり込んで、鶏の鳴き声をしながら羽ばたいてみせ、お尻をつきだし卵を生む格好までしてみせた。

相手にしないでいても、つつい生意気な表情が顔に出てしまうらしく、いたるところでよく同級生にいじめられた。

ことに市会議員の息子のオスカルという、よく太ってほっぺたが赤い少年は、ことあるごとに彼を標的にした。

「やい、ヤノーホ。お前、ホモの気があるんじゃないのか、そんなに、カフカとやらに気があるってえのは」

「何いってるんだ。違うよ。だいたいお前みたいな白豚には、芸術はわからない」

「ケッ、なに気取ってやがる。けったくそ悪い。やーい。グスタフのホモ野郎。ほうら、顔を赤くした」

ヤノーホは、がに股で逃げてゆく相手の尻に、小石を投げた。

友達から孤立してしまっただけではない。しだいに教師からも嫌われ始めた。彼らの温和で薄味の授業よりも、大作家や、独創的な思想家や、天才詩人たちと読書で対話していた方が、はるかに知的で刺激的な時間が過ごせるように思われた。

教師がセンスのない駄洒落をいうと、彼は低い冷めた声で馬鹿にしたように嗤い捨てるので、

憎悪をむきだしにした若い教師によって、とうとう廊下に立たされるハメになった。

(なあに、かまうもんか。カフカさえ、僕を認めてくれればいいんだ)

これが彼のすべての免罪符だった。

それにしても、本当はカフカは、自分を『詩人』として対等に認めているわけではなくて、単に保険局の同僚である父との交際の延長として、お義理で付き合ってくれているだけだろうか？

そう考えると、途端に重い暗雲がたちこめ、いてもたってもいられなくなってしまふ。けれどもつまらない意地から、彼はしばらくカフカに会うことを自分に禁じていた。

そのくせ深夜ひとりでカフカの作品集を読み進めていると、自分がその世界をさ迷う孤独な作中人物のような気がして、仕方なくなるときがあった。そのまま夜更けの街頭に飛び出し、作品の一説を口ずさみながら、月光に縁どられた白柳の揺れている河岸を、夢うつつでそぞろ歩く。深夜ですら両親に内緒で部屋を抜け出し、濃霧の這い寄るモルダウの黒い水面を眺めたり、賑やかな音楽の弾けている歓楽街を、横目で通り過ぎたりした。あのカフカ特有の感覚は、プラハ中の誰よりもこの自分が、隅々まで味わいつくせそうな気がした。『観察』や『田舎医者』の不安に満ちた薄明の空間が、自分においでおいでしているような、奇妙な夢見心地の気分。その世界から見ると、父親も教師も友人も、皆どうでもいい影絵のように思われてくるのだった。

先日も、音楽に対して普段から無知な偏見しか持っていない父親と喧嘩をしたあげく、ふて寝をきめ込んだ。するとどうしたことか、翌朝自分が『変身』の主人公ザムザのように毒虫に変容したような滑稽な妄想に囚われた。

仕方ないので半ばその空想を楽しむようにシーツにくるまったまま、わざと学校を休んでしまった。両親は心配して何度も部屋に説得にやってきた。

年の離れたこの夫婦は、いつも口喧嘩ばかりしていたが、息子のことだけはさすがに心配だったらしい。甘やかされた「グスティ」は、わざと寝返りをうちながら頭が痛いと駄々をこねた。

あわてて医者と呼ばうとするので、いま人に会うと本格的に悪化しそうだから、今日はひとりでそっとしておいてほしいと訴えた。ベッドで彼は、短いピアノ曲を一曲ひねりだした。ヤノーホは、厚い夜具に包まれながら、このまま『火夫』の主人公カール・ロスマンのようにアメリカに渡ってしまったらどうだろうとも思った。でもその前にはまず、女中に誘惑され妊娠させなければならぬのだった……。

頭の中が濁ったような、重苦しい憂鬱が続いた。彼はひどく疲れやすくなっていた。

妄想が頭の中を巡り、カフカの物語が青緑色の半透明の空間として、彼の眼前に現実よりもリアルに立ち現れてくる。貧血気味になり集中力が落ち、成績は下降していった。

自分はひょっとしたらカフカの文学世界に、身も心も食われつつあるのかも知れない。プラハの街のあらゆる場所が、あらゆる石畳とあらゆる小路が、カフカの作品とつながっていた。孤立無援の中で、彼はますます痩せて青ざめていった。

(カフカは僕のことを、一体どう思っているのだろう。自意識過剰の青虫とでも思っているのだ)

ろうか。あのクラムがいったように)

ヤノーホは、かつて自分を一人前の詩人として扱ってもらおうとして、カフカにやたらに小難しい議論をふっかけてみた。もちろん、スピノザの汎神論やブレンターノ哲学にうつつをぬかし、いまもときおりキルケゴールやニーチェをひもといてみるカフカ自身も、哲学や思想に関してはそれなりの意見で応酬してきた。

それはカフカにとって軽い楽しいスポーツであった。しかしヤノーホの方も、何とか師匠に負けまいとして、話題を転じて必死に抗戦するので、カフカもしだいに疲れて不機嫌になってしまう。

とはいうもののヤノーホには、何となくわかっていた。ゲートにおけるエッカーマンの役割のように、カフカはこの自分を相手に話しているとき、あれで案外、どんどん新しい着想が湧き起こってきて、混沌とした思想が整理されていく快感を、ひそかに味わっているはずなのだ。

(つまりだ。このグスタフ・ヤノーホ様は、天才カフカ氏にとっての貴重な『触媒』なんだ!)

そう考えた途端、彼の顔にぽっと赤みが射した。

ある日ヤノーホが学校から帰って、ふと自分の部屋を見回すと、どこか雰囲気が変わっていることに気がついた。

靴を置いてよくよく考えてみると、本棚の位置が、心持ち前につき出ているのだ。床を子細に調べてみると、確かに、親指一本分の幅ほどずれた跡が見える。

親がときどき部屋を覗きに来て、勝手に机の中を調べていることを思い出し、猛然と抗議しに行った。

「そんなことはない。絶対にありえない。少なくとも父さんに限っては、そんなことはしてないがな」父は妙に陰のあるいい方をした。

「誰もあなたの部屋になんか、入っていませんよ、グスティ」

父をきつく睨みつけながら、母も否定した。

奇妙である。しかし思い違いのはずはない。

ヤノーホ少年は、首をひねった。

彼はその不審を拭いさるようにして、ポケットに両手をつっ込みながら外に出た。

そしてしばらくあちこちを歩き回り、河畔沿いの道を通って、ニクラウス橋を渡った。秋の匂いを含んだ川風で髪を乱しながら、カフカのことを考えることにした。

プラハの裏小路を、カフカと一緒に散策した思い出のことを。

以前、ヤコブ教会の『鎖に吊るされている手』を、カフカと見に行ったことがある。

しーんとした教会の聖堂の内部に、黒褐の古びた干肉のようなミイラの手が、吊り下がっているのだ。

――この呪われた手首の由来は、こうである。

昔、ある晩教会に盗賊が忍び込んだ。彼が祭壇の聖母マリア像の回りに掛けてある金貨と銀貨でできた飾りに手を伸ばすと、驚いたことに像の手がにゅっと伸びてきて、怖ろしい力で彼の手をつかみ、一晩中動けなかった。

翌朝になってもそのまま腕は外れず、市長の命令によって、僧侶や長老たちの見守る中、刑使の一刀のもと、ブツリと生身の腕が断ち切られたというのである。

その後、悔い改めた盗賊は、真面目な修道僧となり、改悛の象徴であるその腕は、永遠にくすんだ伽藍の宙空で、敬虔な信者たちの目にさらされることになったというのである。

カフカは子供の頃、はじめてこの『手』を知ったときからなぜか異様にひきつけられ、何度も見に来たらしい。

乾いて干肉のように縮んだ腕は、教会の天井から垂れ下がった鉄鎖に吊るされ、救いを求める地獄の亡者の手首のようであった。乾からびた肉を貼りつけた骨ばった指々と、あの時のカフカの蒼ざめた横顔とが、忘れられない。

探検は、ヤコブ教会だけではなかった。

プラハの入り組んだ坂の多い小路から小路へと、二人で探偵のように身をすべらせているうちに、何かこの奇妙な「友情」と、プラハという奇跡的な都市の存在とが、永劫に続いてくれるかのように思われた。この謎めいた都市は、確かに詩に満ちていた。裏道のいびつな石壁の上からは、灰色の尖塔や古い時計台がのぞき、その塔を目指して小路を歩いていくと、思わぬ迷路に紛れ込んでしまう。

その坂道を不安な表情で降りていくうち、見知らぬ人々の住居に迷い出る。さらにその奥には、あらゆる窓辺が花々でいっぱい飾られた不思議な共同広場が現れて、その真ん中にぽつんと立ち尽くしている自分を発見したりする。

無目的に歩くことは、下手な詩を書き連ねているときの、あの色鮮やかな夢々の秘密の扉をかき分けて進んでいくような、芒洋として柔らかな至福感に似ていた。

とはいうものの、時折カフカは、保険局の大きなデスクの上に頬杖をつき、ひどく憔悴しきった顔をして彼を迎えることもあった。そんなときは、痩せた顔がいつそう小さく暗く縮んでしまったように見えた。

前から肺を悪くしていて、ここ二、三年も何度か転地療養を重ねているし、父によると、先日も保険局の通路で立ち話をしているときに、カフカは急に後ろを向いて、見ていて痛々しいぐらいに激しくむせたそうだ。

砂を噛むような膨大な書類の分類や、自分の文体を抑圧しながら機械的に書かなければならない保険機構に関する専門的な論文、多くのチェコ人に囲まれたたった一人のユダヤ人としての人間関係の窮屈さ、そんなものが重荷になっているのだろうか。

(だからこそ、無邪気に僕と裏道を歩いたり、議論したりすることは、カフカの精神衛生にとっては、絶対にいいことのはずなんだ)

『触媒』はそう思った。

その日、また両親は激しく口論を始めた。

母親は泣き叫び、父親はテーブルを蹴飛ばした。ヤノーホは、すさんだ感情に胸をかきむしられて、モルダウ河畔の公園の森を歩き回った。青味をふくんだ夕靄には、朽ち葉の匂いが漂い、木立はすでに黄色や赤に色づいている。肌寒い空気の中で、恋人たちがベンチで寄り添い、甘い

言葉をささやきあっていた。しだいに薄暗くなっていく街の景色の中で、彼は自分の足を痛めつけるようにして歩き回った。

その日は学校でも、またオスカルを中心とするグループに、さんざん嘲られた。取っ組み合い寸前の状態になり、先生が止めにかかったが、「有力者」の息子であるオスカルは大したお咎めもなく、ヤノーホだけがしつこく説教された。

髭を生やした実直そうな老教師は、覗くようにしていった。

「どうして君は、わからないんだね。アア？　ちゃんとこっちを向いて。大体、話を聞く態度じゃないね。またそうやって口答えするのかね。みんなちゃんとやってるじゃないか、みんな。どうして君にはできないんだネ。人間が、素直じゃないんだらうね、つまり。こうなった以上は、学校側にも考えがある」

彼は教師の前で、わざと自分が毒虫に変身してしまったのだと思い込み、目の前の現実を拒絶して、ほとんど説教など上の空で聞いていた。憂鬱な顔で帰ってきたら、今度は夫婦喧嘩だ。（最近、いいことなんて、ひとつもありゃしない）

家を飛び出し、皺くちな顔をした老人がやっている広場のコーヒー屋台で、濃くてまずいコーヒーを二杯がぶ飲みしてから、どの橋を渡ったのか分からないような気分で、小さなビヤホールのような地下の店を見つけた。

彼はまず財布を覗いてから、捨て鉢になったあげくの妙な勇気を出して、黴臭い階段を降り、汚らしい格好をした労務者たちに混じってビールを一杯注文した。

泡だらけのジョッキをあおっていると、周囲から毛色の違ったものに対する刺すような視線を感じた。

くらくらしながら再び坂の多い裏町の古い小路の走った迷路のような地域にさしかかり、彼は石段でしばらく休んだ。飲み慣れないビールが廻って、息がぜいぜいしていた。落ち着いてからさらに奥の小路へと入ると、それまで見たことのないような薄暗いアーケードに出くわした。

積石の崩れかけた灰色の小さなシナゴークのような建物が見える。ユダヤ地区だろうか。窓にはわけのわからない神や悪魔や聖人たちの恐ろしげなガラス絵がはめ込まれている。彼はチェコ人だが、カフカをそして部分的にはマックス・ブロートのことも尊敬していたので、民族的偏見はないつもりだった。

市中央のヨゼフォフ付近のユダヤ人街だったらよく知っているのに、ここの雰囲気は少し違う。ゴーレムの伝説や古いゲッターの逸話を思わせる不衛生な一画であった。彼も、土から復活させた恐ろしげなゴーレムを操る魔術師ラビ・レヴィの伝説は知っていた。

大きな樹木の見える方に行くと、墓地があった。

低い墓石が思い思いの方を向き、中には石板が割れているものもあった。文字はもう判別しがたいほど風化している。

樹影は濃くひんやりとして、まわりの空間とは異質な空気が支配していた。木の股に灰色の妙な猫が座り、こちらを見下ろしてしっぽをゆっくりと動かしている。

猫は痩せて耳が異様に大きく、半分子犬のような猫であった。

ヤノーホが墓地を通り抜けようとする、松葉杖を片手に抱えた門番らしい大男が、のっそりと現れた。

「何をしているのかね、そこで」

門番のような男は、ふんぞりかえっていた。カイゼル髭をたくわえ、黄色い陰しい目つきをして古びた軍服のようなものを着ていた。

「ここを、ただ通ろうと」

「だめだ。通り抜けるには許可がいる。せっかくだが、回り道してもらおう。どうしてもここを通るつもりなら、市庁舎の窓口まで行ってもらわねばなるまい」

「どうしてただの墓を通るのに、そんな許可がいるんですか」

退役軍人らしい大男の門番は、いらだたしげに松葉杖を木の幹にぶつけた。

「ただの墓だと。おいゲオルグ。いまのを聞いたか。ただの墓だとこの学生はいったぞ」

門番らしい男は、樹上の耳の大きな猫を見上げた。

猫はしっぽをゆっくりと振り回す。

「馬鹿に簡単にいうじゃないか。お前はまだ若いようだが、わしのような苦労人を前にして、大胆な態度に出るもんだな。悪魔のような子供だ。わしをやり込めようってんだろ。どうだ、わしをやりこめようって魂胆だな。だが、そうは問屋が降ろさない！」

夕闇の中、恐ろしい顔で退役軍人は立ちはだかった。

狂人だ、と彼は思った。

こめかみの血管が膨れ、髪の毛が立ち上がり、悪鬼のようだ。

「お前にこないだの大戦がどんなに悲惨なものだったか、想像もつくまい。同期の者は、みんな死んだのだ。人でなしめ。あのうめき声が聞こえんのか。ただの墓などといった以上、意地でも通させるわけにはいかん。そうだろう、ゲオルグ！」

男は振り返って、いきなり隠していた笛を出し、両目をつぶり、思い切りピーッと吹いた。驚いた鳥がふんわりと数羽、黒く散っていった。

樹木が濃い蔭を落とし墓石を青紫に染めている。

ヤノーホは熱があるのか、頭がくらくらしてきた。

氷を粉碎したように斜めに倒れている墓の石板までが、前よりも増えているように思われた。猫の金色の目が、じっとこちらを見ていた。

ヤノーホは混乱した頭を抱え、靴を踏みつけるようにしてひたすら路地裏を歩き回った。濃いどろどろとしたコーヒーとビールとが混ざり合い、一種異様な興奮状態でモルダウの幾つかの石橋を行き来した。

墓の番人を自認している狂った退役軍人のあの異様な目が、頭から離れない。半分意識は不確かになっていた。

そのせいか、さっきから妙な足音が聞こえているような気がする。

そういえば随分前から、足音は聞こえていた。

それだけではない。彼が疲れたのでしゃがんで休むと、少し離れたところで黒い影が同時に立ち止まった。初めのうちは偶然だろうと思ったが、もう三、四十分もあの影が、後ろの方にちらついている。酔っ払い相手の悪戯にしては、ずいぶんしつこい。

(つけられているのだろうか？ まさか。それに一体なぜ。もしそうだとしても、理由がわからない)

それにしても最近自分はどうしちゃったんだ。父親とも学校ともうまくいっていない。唯一の理解者だと信じていたカフカにまで疎まれてるらしい。

もう夕闇が色濃く、河面には街灯の明かりがにじみ、風景は紫色に染まっていた。彼はプラハの迷宮のような街路をひたすら歩いた。さっきの黒い影の追跡者を巻いてやろうと、二、三度路地から路地へと小走りに走っていったが、安心して休憩すると、必ず少し離れた所に男が立っていた。

男は火をともし、煙草をふかす。

夕闇の中に、赤い点が滲む。ひょっとすると、連中は独りではないのかも知れない、そう思ったとたん、冷たい感触が背中を走った。

……もしかして、この間本棚の位置が、ずれていたことにも関係があるのだろうか。まさか。彼の目の前に、親指一本分ほどの幅の書棚のズレた跡の映像が、くっきりと浮かび上がってきた。

石堀の向こうに見えるいくつかの尖塔が、怖れの色を帯びていた。

彼は息を殺しながら、旧市街から少し離れた路地裏の小さな階段を昇ってゆくと、向こうの角から、待ち構えていたように派手な格好をした女が二人現れた。

そのうち長い栗色の髪をした方の女がグスタフの腕を取り「遊んでいかない」と囁いた。黒い影の男と、自分だけになったような気がしていたので、少しほっとした。

「いくら持ってるの？」と女は彼のポケットに手を突っ込んだ。

ヤノーホは、びっくりして手を離そうとしたが、女はけらけら笑って首に抱きつき、彼は奥のアパートに背中を押されるようにして連れ込まれた。

雑然とした建物の中には暗い階段があり、少年は酔っていて何を話しかけられてもうまく答えることができない。

一階からは、絶えず中年女と赤ん坊の声が聞こえていた。壁には暗い色調の傾いた油絵が掛けられている。

ヤノーホは、追跡者の影が気になった。この部屋の下で待ち伏せているのだろうか。しかし女にベッドに押し倒され、それ以上考えることをやめにした。

女は自分の姿を鏡に映し、鼻歌を唄いながら服を脱ぎ、派手な刺繍のある下着だけになった。狭い部屋には、安っぽい色あせた花柄の壁紙が貼られてあった。

横になっているグスタフの靴を脱がせると「だいぶ飲んでるみたいね」と耳元で囁いた。

手首をつかまれ起こされると、ゆっくりと厚みのある唇をおしつけられ、片手首をつかまれて乳房に持っていかれた。

柔らかいなつかしい感触がした。

「アマリアっていうの」ズボンを取られ下着だけになったグスタフは、そのままぎこちなく女の乳房を両手の平で覆った。

「あんたいくつ？」

グスタフは馬鹿にされまいとして、三歳ほどサバを読んだ。

「ほんとう」と、いずらっぽくアマリアはいうと「確かめてやる」といって両手に力を込め、一気に彼の下着を降ろした。

「あたし、ちゃあんとわかるんだから」

泥酔しながらも前を覆い隠そうとすると、女は笑いながらそれを取り払った。

そしてむきだしになった彼の性器を、いたずらっぽくもてあそんだ。

酔いと性欲と濁った絶望とが混じり合い、彼は身を起こし女の乳房をわしづかみにした。「そうよ、そう」女は全裸になると、ベッドの上に両膝で立ち、若い魚のような下腹と、オレンジ色の焰のような陰毛を、彼の前にかざした。

そして彼の手を下に持ってゆき、狭く湿ったすきまに押しつけた。

グスタフはぼんやりとした視線で、女を見た。

アマリアは凄い美人というわけではないが、ウェーブのあるふさふさとした栗色の髪と、よく肉のついた腰が魅力的だった。

「辛いことが、あったんでしょ」彼の頭をつつむように抱きかかえた。

「わかるわよ、そんなの」女は彼の頭の上に顎をのせると、「はじめから、顔にかいてある」といった。

「僕は……」と彼はいった。「なあに？」女は、少年の耳もとに囁いた。

彼はあえぐように「詩人なんだ」といった。

そしてしばらくすると、ハッとしたように顔をあげ、

「僕、追われているかもしれない」といった。

するとアマリアは含み笑いをしながら「詩人で、追われるものなの？」といった。そして子供をあやすように片腕をまわし、後頭部を優しく撫でた。

ここにいると、彼はやっと安心できるような気がした。

なぜかグスタフの目に涙がこみあげ、耐えきれなくなって、女の乳房に強く顔を押しつけた。

彼はふと顔をあげ「あれ何？」と尋ねた。

「なあに。何も見えないわ。ただの壁よ」

「動いている」

壁に何か手の長いものが映っていて、動いている。

「……人形遣いだ」

「なに、それ」

壁の上の方に、黒い痩せた人形使いの影が、骸骨のような長い指で、人形を操っている。道化た人形たちが、ヒョコヒョコと不器用に手足を上下させる。あの陰惨な節回しの口上が、耳元に聞こえてくる。

「なにも、いやしないわ。飲み過ぎよ」

一階から、また中年女と赤ん坊の泣き声が聞こえた。

下の部屋で男が帰ってきたらしく、荒々しく怒鳴っている。赤ん坊が泣きやまない。激しく水を流す音がしたかと思うと、今度は女の悲鳴とともに食器が碎ける音がした。このアパートの女は、皆同業者なのかも知れない。

気がつくアマリアは彼を見下ろし、両手で見事な栗色の髪を広げた。

乳房のふくらみが、仄暗い明かりの中で優美に浮き出していた。女の円い両膝が、彼の脇腹を柔らかく垂泊した。ランプの光が、女の乳白色の喉と顎を、蒼白く照らししている。グスタフはしがみつくように、両腕を差し出した。

壁には二人の影が、大きく波打つように動いていた。少年は濁った絶望の中で、身をよじりながら放出した。

—続く—

ひさしぶりにマックス・ブローとカフカは、カフェ・サヴォイに入った。以前は何度も来た店で、ここはイーディッシュ語の劇団が小劇を演じるので有名な店であった。

がやがやした喧噪の奥で、役者たちが大袈裟な身振りで腕をあげ、何やら政治的演説らしきセリフを怒鳴っていた。ときどき、くわえ煙草をした客の間から、ぱらぱらと拍手が起こった。「その通り!」「異論なし!」の声。あちこちでもうもうと立ち昇る煙草の煙が、役者たちの顔を明るい灰色にくすませている。彼らの台詞も、客のげらげら笑い話し声で、聞き取りにくい。ある者は演劇など鼻もひっかけないという顔つきで新聞を大きく開き、ある者は唾をためて猛然と議論をし、ある者は耳をふさぎながら書き物に余念がなかった。カフェ・サヴォイの天井には濃いタバコの煙といっしょに、いつもさまざまな思考が渦をまいてた。ブローとカフカは、壁際のテーブルに座った。

カフカは、頬の肉がますますそげ落ちてやつれていた。両耳は尖り、目は透明に澄み切って、人間とは別の生き物、たとえば森の牧神か、それとも無力な精霊が、ジャケットを着込んで人混みに紛れ込んでいるように見えた。そしてどうも落ち着かないというふうにあたりを見回し、しばらく無言であった。

「イサック・レヴィは、もういないね」ぼつりと、カフカはいった。

「ああ。レヴィか。そういえば君とは、ずいぶん仲が良かったからな」

イサック・レヴィはユダヤ人旅劇団の若い役者で、かつてカフカとは無二の親友だった男である。親友といってもそれはカフカの解釈であって、イサック・レヴィの側から見れば、立派な公務員が自分のような旅役者と交際してくれることを、ひどく恩にきていた。事実、父親のヘルマン・カフカ氏は、世間体の手前、役者風情と自慢の息子がつき合うことに苛立っていた。そのためフランツは、家族には隠れて彼と付き合った。昔は二人で、プラハ中の小劇場の演劇をよく見に行ったものである。レヴィはその後プラハを離れたが、しばらくの間文通を続けていた。

「ところで、どうかね創作の進行ぐあい」ブローは話題を変えた。

「ああ。このところさっぱりさ。忙しいんだよ。明日からは保険システムの論文も幾つか書かなきゃならないしね。それに、保険局でまた新聞に弁明広告を出さなければならなくなったんだ。憂鬱だよ。なにしろ税金の無駄使いだの、無用な役所ナンバーワンだのと、いろいろ世間がやかましいもんでね」

「保険局の広告なら、この間も出したじゃないか」

「あれ、誤解を受けちゃったみたいなんだ。……僕の書き方がまずかったんだ。だからもう一度、書き直してわけさ。まったく、やれやれだよ。もう、上層部がいろいろ疑心暗鬼になってるものだから、ああでもないこうでもないって、なかなかOKが出やしない。まるで両極端の指示を出して、誰も責任なんて取りやしない。けっきょく最後は、僕がまとめるハメになるんだろうけど。でもお偉方はみんな、自分の意見がちゃんと文面に反映されているかどうか、覗きにくるだろうさ。|おや、ドクトル、わしのいったことはどうしたのかな。おやドクトル、この表現はちと文学的すぎやしないだろうか、ってね。(声色を使ったカフカは、肩をそびやかして笑った)。お役所仕事の典型というわけさ」

そういい終わらないうちに、カフカは前屈みになってひどい咳をした。ハンケチを、口に当てる。顔は青ざめ、二三度かすれた笛のような息をした。

「疲れているようだな。悪くしないうちに、また病院で検査しておいた方がいい」

「何でもないさ。……ただ、眠れないんだ。なにしろ、休みの日に創作に集中すればするほど、翌日の仕事にさしつかえるしね。午前中は意識朦朧状態だし、まるで脳みそが、爆発寸前で地熱をもっているようだよ。創作と役所仕事では、神経構造のまるで違った部分を使うから、精神は分裂状態さ。まったくフランツ・カフカ氏は、これでよく気が狂わないもんさ(彼はまた寂しく笑った)。ああ、僕は、ウィーンのプロイト教授の良い症例になりそうだな。……本当にまとまった創作ができる時間は、休日だけだからね。ちょうど水泳をやり始めた人のように、次の息つきができるまで、僕はひたすら頭を下にして、下手な犬かきを続けなければならないんだ。しかも水面には厚い氷が張っていて、なかなか息つぎのできる穴がみつからないって寸法さ」

カフカは、ちょっと泳ぐような格好をしてみせ、それから再び微笑した。

どうしてフランツはいつも、こういうふうに自分を滑稽化して語ってみせるのだろう。本人にとって、笑いごとなどではなくて、深刻な葛藤であるはずなのに。

カフカは笑ったあと、また少しむせて、肺に響くような妙な咳をして顔を歪めた。

「役所を辞めて、ジャーナリズムに打って出るってのは、どうだい」

「僕にはそんな器用な才能はないよ。世間のことだってよくわかっちゃいないさ。カール・クラウスなんか見ると、感心するよ。君もだけどね」

「クラウスか、あいつは特別さ。冷酷無比の批評家だしね。でもフランツ、君の観察力と分析力というのはだな、つまり何といたらいいか、本当に僕は昔から……」

「ありがとう」カフカは笑って手で制した。「今度また短編を見せるよ。自信はないけど。でもなんだか、いままでになかった作品のような気もしてるんだ」

また演劇の方が騒がしくなった。「もっとやれ」「ブラボー！」という声があがった。「結局僕は、無意味な穴のまわりを回り続けて、ほんとうの核心部に至れずに一生を終わってしまう作家なのかもしれない。でもとにかく、今度のが不毛な失敗作か、まんざらでもないのか、君に読んでもらいたいんだ……」

「マックス・ブロート氏の評価によると」ブロートは改まった真顔をしながらも、おどけた表情で団子鼻をそらせた。「君の散文は、現代ドイツ語における最高の達成だそうだ」「その批評家はきっと」カフカはにやにやしなながら、その言葉を受けた。「ピヤホールで一杯ひっかけてから、僕の作品を読んだに違いない」愉快そうに天井を見る。

「とにかく、もっと時間を集中できたらと思う。『錬金術師小路』にいた頃は、ずいぶんとはかどったな。僕にとっての理想的な生活というのは、どこか深い穴の中に、人知れない巣穴のような小さな地下室に、ランプとペンだけ持ち込んで、永遠に作品に没頭しているという状態さ。食べ物は巣穴のどこかに蓄えてあって、地上になんか出てこなくてもいい。もう、日が上ったり月が出たり、戦争が起こったり不景気になったり、そんなことは関係ない。僕はひたすら、書き続ける。モグラや坑夫がひたすら穴を掘り続けるようにね。何のためにそうするのかかわからないが、それ以外の生き方が見つからないんだ。書くことが、生きることになるんだ。|でもこ

れは、ただの子供っぽい童話だよな」

「つまり現在の生活は、君にとって苦役なんだな」

ブロートはしばらくの間沈黙して、ビールを飲んだ。

「子供っぽいといえば、僕は本当にプラハという都市のほんの一部しか、この世界というものを知らないと思うよ。地図で見ても、この三十何年間、旧市内のほんのちっぽけな区画を行ったり来たりしているだけなんだ。ため息が出るよ。ジムナジウムも大学の法学部も、ほんのこればかりの半径に入ってしまう。そんな狭い所で悩んだり、脅えたり、不平をいったりしてるんだね。都市。そう、未来の都市とは、どんな環境なのだろう。いま、新大陸で作られつつある摩天楼のような、ああいう凄まじい姿なのだろうか」

「巨大で奇怪でザラザラした、何かとてつもないものに変貌するだろうな。その時代の都市は、このプラハのように、もはや詩というものが棲息できる都市ではないかも知れない」とブロートはしかつめらしく続けた。「プラハなら、どこのカフェにいても仲間がいるがね。暇なときには論敵にも事欠かない。ともかくもこの街には、思い出がいっぱい詰まっているじゃないか、君にとっても僕にとっても」

「昔、区画整理される以前のゲッターがあったよね。子供のころの記憶。最近、どういうわけか、やたらによく思い出すんだ。……暗い曲がりくねった路地裏をゆくと、虫食いの歩廊や、暗い木の階段が覗いている。不健康な中庭。閉じられたままの窓。いわく因縁のある二階の小部屋。犯罪のあった居酒屋。一日中日なたぼっこしている目の潰れた婆さん。病気の子供たち。恐怖と神秘と、怖いもの見たさの感情」

「そう。マイリンクのゴーレムが出てきそうな、灰暗いごみごみした小世界だ。太陽光線の入らない巢穴じみた空間。妙な名前の家がいっぱいあったな。老朽化した崩れそうな『死の家』、『左の手袋』、『胡椒パンの家』、なんてね」

「それに、『無時間の家』に、『鼠の穴』。過去の亡霊がいたるところに潜んでいるような曲がりくねった裏小路だ。ヤノーホ君をつれて、同じ場所を何度か歩き回ったけど、昔の面影はもうないね」

「別に美化するわけじゃないが、確かにわれわれの世代にとっては、生々しい記憶だな」女優が大声で笑ってシャンパンを開け、前列の客の頭に浴びせかけたので、爆笑が起こった。二人は一瞬、我にかえてそちらを向いた。

「冷たい大きな人工物に囲まれて、何もかもひからびていく。魂さえも。そこで、自分たちが、どこから来てどこへ行くのかもわからないまま、おびたしい人々が、盲目的に生き続ける。絶対的な座標は、何ひとつ見つからないまま、集団性のある昆虫のように地を這い廻る。年がら年中大忙しで、売ったり買ったり、数字を上げ下げしたりして。そして『出勤』するんだ。組織の一員として機能するために。つまり、毎日保険局に『出勤』する、僕のようにね」

「そういう都市には、文学も詩も、存在しなくなるかも知れない。人間の内部の問題など、糞食らえ、というわけだ。いまのような書店らしい書店もなくなり、人の言葉は無力化し、何か膨大な記号のようなものだけが、機械の中を砂嵐のように飛び回る。すべては恐ろしく管理される。曖昧なもの、臃げなもの、迷路の片隅の亡霊めいたものは、死に絶える」「そしておびたしい人々が、わけもわからず、毎日毎日『出勤』するんだ。僕のようにね」カフカは自嘲的につぶ

やいた。

「グレゴール・ザムザのように」とブロート。

「グレゴール・ザムザのように」とカフカ。

二人は同時に、笑った。

「やあ。おふた方お揃いで、デートかね」

不意にヨーゼフ・クラムが二人の前に現れ、ステッキを脇にはさんで帽子を取った。貧相なメフィストが登場した。

「いやあ、奇遇、奇遇。| お元気か、諸君」

メガネの下で小さな鋭い目を油断なく動かし、眉をつりあげて、とっぴょうしもない高笑いをしてみせた。けれども持って生まれた鉤鼻と陰険な目つきは、こんな高笑いを嘘臭いものにした。

すぐ後ろに、大柄の筋骨質の男が控えている。このゴリラのような男は、もうかなり肌寒い季節なのに太い両腕を剥き出しにしており、水色の小さな目玉を鈍く光らせていた。クラムの同類というよりは、運搬船か何かで働いている労務者のような印象だ。クラムがその辺で雇った荷担ぎのようにも見えるし、あるいは彼の用心棒のようにも見える。顎をしゃくると、二人を睨み、何度も愚かしくうなずいていた。くわえタバコのクラムは、用心棒には何もいわず、持っていた新聞をポケットに押し込むとそそくさと座り、ビールとローストポークを注文した。太い腕をだらりと垂らした水色の目のゴリラは、無愛想に顎をこすりながら、隣の席に座った。

「やあ、紹介するよ。こちら、陽気なアメリカ人、ビル。いやジョーだったかな。どっちでもいい。ビルにしておくか。大丈夫、どうせ言葉はわからん」

クラムは、とってつけたようにいった。彼は一見、軽薄にはしゃぎまわっているようであったが、以前よりも痩せて目は落ち窪み、ますます退廃的で不健康な感じをうけた。カフカが精神的に憔悴しているのとも違って、全体的に何か毒々しさが加わっていた。

陽気なアメリカ人、ビルもしくはジョーは、テーブルの間にはさんだまま中腰になって太い腕を伸ばし、ブロートとカフカの手を、力強く握った。目に力でも込めているつもりなのか、握手のとき、じっと相手を見据えている。ニコリともせず、黙りこくったままであった。まるで「はは一ん、お前らの魂胆は、ぜんぶ俺様には分かっているんだ」とでもいったような顔つきであった。もっとも彼は、いつも意味なくこんな顔をしているに違いなかった。

ブロートは顔をそむけて、冷ややかな表情でクネドリーキを追加した。そして「まるで、こりゃ、狐とヒグマだな」と、面白くもなさそうにつぶやいた。

クラムは来た早々、愛想がわりにカフカの執筆活動について尋ねたが、カフカは消耗しきった表情で力無く笑った。

ふとブロートが「陽気なアメリカ人ビル」の方を見ると、例の類人猿は、ゆっくりとうなずきながら小さな目でこちらを睨んでいたのが、憂鬱になった。何も知らないカフカに対し、いったいクラムは何を仕掛けるつもりなのか。もし妙なことがあったら、このマックス・ブロート様がただじゃおかないからなという意味を込め、彼はクラムに向かって、ちらちらと鋭い視線を飛ばした。しかし、例のゴリラ氏がそれに気がついたのか、しだいにブロートに対して、威嚇するよ

うな表情になった。

カフカは疲れているのか、自分の悩みで手一杯なのか、そんな視線の小競り合いには気がつかず、自身の生活と創作の行き詰まりをしきりに面白おかしく語って見せた。

「だったらフランツ」とクラムは身を乗り出した。そしてまといつくような猫撫で声で「例の、子供の頃の田舎の葬式の話でも、書いてはどうかね」といって目を細め、奇妙な具合に光らせた。

「葬式の話って、何だね」不審そうにブロート。クラムの奴は何を切り出すかわからない。「…ほら、昔話してたじゃないか。ヴォーセク村、だったかな。例のフランツの親父さんの実家のある村さ。雪の中に埋もれたように領主の館があり、村から領主の館に通じる路は奇妙な迂回路を巡らなくてはならない。館の正門はつねに閉ざされて、しかも領主は不在。あたりは濃霧といちめんの暗い雪景色。そのユダヤ人の村の連中は皆よそよそしく、村人は重苦しい因習と不安に閉ざされて、家の奥でひそひそ話ばかりしている。城館ははるか彼方の濃霧の中に煙っていて、なかなか到達できない」

ビールが運ばれてきた。

店の者とアメリカの観光客らしい女とがぶつかり、飲み物がひっかかったとかで女は両手をあげて大声でわめきたてた。場違いな奴だ。ゴリラ氏は会話の内容がわかったのか、にやにやして顎をしゃくった。

「俺は、あの話が大好きなんだがね。君の親父さんは子供のころ、その辺りの村から村へと雪の日に荷車を引いて、霜焼けをこさえたんだ。いやあ、しみじみとしたい話だなあ」クラムとブロートは、憎しみと軽蔑を込めて視線の火花を散らした。

「ああ。あの話は一度書きかけたんだけど、主人公の職業をどうするかで、ちょっと迷っていたんだ。それに、いろんなものを詰め込んでたら、どんどん増殖してかなり大掛かりな構想になっちゃってね。でも一部はこの間、マックスたちの前で朗読したよ」

「ほう、その朗読会に参加できなくて残念。ところでフランツ」とクラムはいった。「とうとつだが、ほんの少しばかりまた金を貸してくれないか」

――沈黙があった。

カフカは笑った。「今度は、幾らぐらい」

クラムは、ブロートを横目でちらりと牽制してから、改まった顔で、カフカにだけ聞こえるように片手で耳打ちした。「それはちょっと、多すぎるなあ」とカフカ。

ブロートはいまいましげに舌打ちをした。

クラムはあわてて「いやなに。話せば長いが、つまりはこういうことなんだ」と眉間に皺を寄せて煙草の火をつけた。「君のいま現在の職務は確かに辛いだろうが、まさかあの頃ほどじゃ、あるまい」

「あの頃って？」

「なに、その、親父さんのいいつけで、プラハ・アスベスト工場ヘルマン会社の監督をやった頃さ。つまり、一九一二年当時のことだ」

カフカは何をいわれたのかわからず、きょとんとしていた。ついで暗い表情になった。ブロートは、拳骨でテーブルを強く叩いた。そしてクラムに目をむき、

「くそっ、そういう魂胆だったのか」といいながら中腰になり、クラムの襟首をつかみそうになった。しかしすぐさま『陽気なアメリカ人』が、毛むくじらの腕でブロートの手首をつかんで睨みつけた。座が、一瞬にして凍りついた。

「そうか。ぜんぶ、ぜんぶ計画的なんだな、これはつまり」ブロートは呻いた。

クラムだけが、落ち着きはらっていた。彼は、冷たい鋭い目で相手を観察しながら煙草をふかした。そして、吐き出した煙を二本の筋にして、するすると鼻の穴に招き入れた。「たしかプラハ・アスベスト工場ヘルマン会社は、君と義弟のカール・ヘルマン氏が経営代表で、伯父のアルフレート氏が出資者になっていた企業だ。所在地は、ジュジョコフ区ボジヨヴァ通り。そこで君は、工場主と労働組合の代表という、実に奇妙な二重の役割を演じていたんだ。しかも昼は、保険会社に勤めながら。あの頃はフランス、いくら短期間にしても、自分に向かない仕事を、よくやったものだな。感心するよ。しかし途中から工場は、しだいに資金繰りが苦しくなってきた。にっちもさっちも行かなくなってきた。そこに唐突に、事故があったよなあ。二人ほど死んだ人身事故が。工場には十四台の機械が稼働して、二十五人の労働者が毎日働いていた。そしてアスベストをはじめ、高圧プレート、ゴム製品その他を製作していた。冬、二人の従業員が機械に挟まれて圧死した」カフカは妙な気配を感じて沈黙していた。その顔は蒼ざめていた。

「あれは確か、事故は事故なんだが、ずいぶんとまた不透明で、司法解剖なんてのも曖昧だったし、追究されてしかるべきものが追究されていなかった。一説によると、背後に幾つかの組織が関係していたともいわれている。それに、第一フランス、君の位置がはっきりしていない」

クラムは横を向き、あくまでもそっけなく冷酷に続けた。しかし言葉のひとつひとつの効果を確認するように、ときおり視線をカフカに向ける。

「僕はあの日は、工場に出ていなかったんだ。前日、体調を崩してね」

「もちろん、そうさ。もちろんそうだろうとも！ でも、その日の事故の証言をするといっていた職工のH.H.ヤーンは、なぜか失踪。その二か月後になってから、森の中から彼の腐乱死体が飛び出した。ひそかに謀略説が流された。カフカ家親子と、保険局理事長プルシーグラム氏が仕組んだ保険金殺人、公金横領事件だと。かねてからフランス・カフカの息のかかった無政府主義者の手下のチンピラどもが実行したのだと。いやいや、もちろんこれは、当時一部で流されたデマだがね。労働組合潰しを目論んで、意図的に当局が流したのかも知れないが。しかし大戦以前に君は、フランス、まぎれもなくアナキストや、社会主義者連中のシンパだったんだ」

「いいかげんにやめないか、クラム。カフカはあの心労で、飛び降り自殺まで謀ったんだぞ。それにこの間君は、プラハ中の工場を連鎖的に内部分裂させるため、自分たちが仕掛けたようなことを得々と語っていたではないか」

「マックス」とカフカは首を振って制した。「あれは実際、僕には何が何だかわからない事件だった」

「そう。それで君は、痛くもない腹を警察に探られたわけだ」

「うん。あのときは、無政府主義者や社会主義者との、個人的な交友関係を探られたよ。君がいうとおり、僕は以前、彼らの集会に参加したり、寄付をしたことがあるからね。労働者に対する考え方で、一部共鳴できることがあったんだ。でもそのことと事件とは、何のかかわりもない

んだ」

「何のかかわりもないことに、しておこう」

急にクラムは表情が変わり、強い口調でそういった。

「おい。何が『話せば長いがこういうことなんだ』だね。クラム。ゆすりじゃないか、君のやっ
てることは要するに」

ブロートが顔を真っ赤にして小さく叫んだ。隣の客が二、三人こちらを振り向いた。

「おやおや、何をおっしゃる、人聞きのわるい」

クラムは眉をつりあげ、おどけたように両手を開いた。ゴリラ氏が威嚇的な目つきでブロートを睨み、再び中腰で戦闘体制に入ろうとした。余裕のクラムは、猛獣使いよろしく、にんまりと目を閉じ、片手で大男をなだめた。

「もうひとつ重要な話がある。グスタフ・ヤノーホ、以前話に出てきた少年のことだ。彼のノートを貸して欲しい」

「ノート？」

「君との会話を、一語一句もらさず書きとめているノートがあるはずなんだ。彼の親父さんが読んでいる。それを少しの間、貸して欲しい」

「なぜ？」

「理由は、問わないことだ」

「どうして」カフカははじめて、怒りの表情を示した。

「繰り返す。理由は、問わないことだ。ある人々が所望している、とだけいっておこう」

「……それなら、断るよ」

「フランツ、もし君の口からいってくれないのならば、俺としても、保証はできない」

「何の保証さ」

「さあ。世の中には、いろんなことの『保証』があるがな。……とにかく！」

語気強く、クラムはいった。「こっちもあまり、手荒な真似はしたくないんだ。できるだけ、
穏便なやり方で済ませたい」

また重苦しい沈黙が降りてきた。

「それでは、長居は無用。フランツ、さっきのことも頼んだからな。いやなに、今の話と、俺が金を貸してもらうことは、何の直接的因果関係はない。悪しからず。……では諸君、ごきげんよう」ステッキと帽子を抱え、クラムは外套をパツとひるがえすと、大股にカフェを出ていった。『陽気なアメリカ人』も、顎をしゃくってふたりを一瞥してから、前屈みでのっそりと後をついていった。

ヤノーホの両親の言い合いは、ますます激しくなっていた。

もともとヤノーホの父は、母よりも十二歳も年下で、すでに永年の暮らしの間に、冷ややかな隙間が生じていた。

老いを感じつつある妻が、男盛りの夫の行動に対し、激しく嫉妬したのだ。

実際、父は外に女を作っていた。息子が帰宅しても、室内は荒れ放題のまま、掃除に使われたバケツは、鉛色の水を溜めたままだったし、皿や食器類は、茶色の油をつけたまま流し台に放っておかれた。

哀れな母は、髪の毛を乱して暗い部屋のベッドでうつ伏せになり、身じろぎもしなかった。父は、幾晩も帰ってこない。たまに帰って来れば、夫婦の間ですさみきった激しいやり取りがあった。

彼はそんなときは、ヘレネという少女とこっそり会うことで気を紛らわせた。

ヘレネは地方役人の娘で、素直なかわいい少女だったが、田舎育ちのために芸術や文化には興味がなく、ヤノーホの関心事のすべてには反応してはくれなかった。どこまで理解しているのか、驚いたように目を大きく見開き、彼の言うことを聞いている。何も理解できていないという絶望が、ますます愛おしさを増してくる。そんな恋人に、彼は熱心にカフカ崇拝を吹き込んだ。そして貧弱な乳房に、執拗に愛撫を加えた。

度重なる両親の喧嘩に耐え切れず、先日ヤノーホはひさしぶりにカフカと会ってみた。両親の不仲のことで、慰めと指針が欲しかったのである。

(こんなことを相談すると、またカフカは僕を、子供だと思っただろうか。でも、ほかに相談するところなんて、ありゃしない)

カフカはすでに災害保険局を辞めて、念願の年金生活者のひとりとなっていた。

彼の永年の苦痛のひとつから解放されたのである。

しかしカフカの健康は、思わしくなかった。このところやつれが目立ち、加速度的に悪くなってきているように見えた。

「お元気ですか」と尋ねると、弱々しく微笑し

「やあ、ありがとう。元気さ」

と、いつもの挨拶を返してくれるものの、顔色は土気色で声はかすれ、なんだかしきりに、厭な呼吸をしている。

いま、目ばかり澄んだ病み上がりのカフカを、外の空気にさらしてはいけないのではないかもヤノーホは思った。

しかし本人が強く所望するので、二人でひさしぶりの散歩に出た。

「外気はからだにいいんだ」と、カフカはいった。

モルダウの河岸に並んで風に吹かれ、もうもうと白い湯気をたてている街頭のコーヒー売りの

屋台で、濃くて熱いコーヒーを並んで啜った。

古書店をいくつか廻った。青ざめた瘦身の師匠は次第に元気になり、得意の蘊蓄を披露した。ヤノーホは、幸せだった。

彼は歩きながらひとしきり両親の話の続け、思い詰めたように切り出した。

「これは妄想かもしれませんが、僕は前から、何者かによって追われているような気がして仕方ないんです」

そして、ズレていた書棚のことや、絶えず彼の背後をつけ回す黒い影、紛失した書類などの話を、手身近に説明した。自分の声が、次第に震えてきた。

カフカは、痛々しい咳をしながら注意深く耳を傾けた。

「妄想では、ないかもしれないよ。ところでグスタフ、君は僕との話を、ノートにつけているの？」

「ごめんなさいドクトル」ヤノーホは泣きそうになった。

「親父が、そう言ってましたか」

「いや、そうではないんだ。かまわないよ別に。ちょっと、思い当たることがあってね」

そこでまたカフカは咽せて、ひどく苦しそうな呼吸をした。

路面電車の通るすぐ脇で、街燈にもたれかかりながら長身を折り、しゃがみこんだ。

敷石に、片膝をつく。着飾った通行人たちが、カフカを避けて通った。

ヤノーホは、彼の背中を軽く叩いた。

「何があってもおかしくない時代だ。全部、全部書いておくんだグスタフ。記録しておくんだ、すべてを」

「何があってもおかしくない、ですって」

「そう。そのうち秩序が、暴力にうって変わるかも知れない。真実を背景に持たない、虚偽の秩序と権力がね」

カフカはぜいぜいと息をして、苦しそうに喉に片手をやった。

「結核が喉にまわったのかも知れない。あまり、僕に近づいてはいけないよ。そっぽを向いて話すんだ」

季節ごとの花々が河岸に咲いて、プラハの街路をいくつかの彩りが過ぎていった。

あれから何度も、ヤノーホは路地裏のアマリアという娼婦の部屋に通った。

恋人のヘレネに対して少し気がとがめたが、彼の悩みや不安、そして生な欲望を丸ごとぶつけるには、この地方官吏の箱入り娘は、あまりにも純朴過ぎた。

わずかな小遣いと後ろめたさを握りしめ、いつもの小路でアマリアを見つける。いないときは別の客をとっているときだ。

彼は嫉妬で不機嫌になり、そのまま踵を返して、近くの居酒屋に入ってしまう。ヤケ酒の濁った酔いで、嫉妬を誤魔化すのだ。もう呑み屋には慣れていた。

カフカともよく通ったアンドレ・ドイツ書店に寄って本を買い込み、その本をカフェでペラペラとめくってからビールをひっかけ、アマリアの部屋の階段を登ることもある。暗い黴臭い階段

を上って行くとき、何ともいえない気分の昂進を感じた。

ヤノーホは、ある程度は楽器が演奏できたので、場末の映画館の楽団でオルガンを弾き、小金を稼ぐことができた。

そんな小銭稼ぎで実入りの良かったある日、小広場で高価な花束を買ってアマリアに持っていくと、彼女はひどく喜んでくれた。

キスをしながら抱きついてはしゃぎ、壁際の青い花瓶に差してくれた。

偶然、誕生日だというのだ。その日はもう客をとらず、二人でちょっと高めのワインとパンを買い込み、小さな祝い事をした。

こうしたひととき、得体の知れぬ青黒い不安の中に、温かい焔が灯る。

しかし売春婦の所に通っているのは、父親にもカフカにも内緒にしていた。

父は、グスタフが好きな音楽を学ぶことに反対だったため、しばしば激しく衝突した。父のことも母のことも愛していたのに、家庭の中は荒涼としたとげとげしい口喧嘩ばかりになってしまった。しょっちゅう言い争いが絶えないため、家庭は暗く、彼はますます読書と詩作と音楽とに逃避した。

自称詩人のヤノーホは、重苦しい家庭を逃げ出すと、いっばしのボヘミアン気取りで夕暮れのプラハのカフェを渡り歩き、そこで演説しているカフェ文士たちや、くわえタバコで原稿を書いているモノ書きたちの生態を、横目で観察した。

それでもカフェを出て首筋に風を感じると、ひりひりとした何ともいいようのない虚しさを感じた。

彼はしきりにカフカの言葉を反芻しながら、ポケットに両手をつっこんで、何世紀もの間人々に踏みしめられて黒びかりを帯びた古都の石畳を歩き廻った。

やがて、ヤノーホの父と母は離婚した。そして訴訟が起こった。

父と母とが法律的に敵対し、争うのだ。

幼いときから信じていた小さな世界が、眼前で暗い氷壁のように割れる音がした。

すでに目が落ち窪んでげっそりと痩せ衰えたカフカは、幾つかの言葉で勇気づけてくれた。彼はサナトリウムを出たり入ったりしていた。

街燈の下の石畳の冷たさは、ひどく身に染みるような気がした。

ある日、場末の映画館の楽団メンバーとビヤホールに行き、その足でアマリアの部屋に行くと、客からせしめたという飲み慣れない高価なブランデーを彼女に飲まされた。

疲れていた彼女は、行為を省きたかったのかも知れない。

夜遅くなって扉を開けた。石畳を包む冷えた空気が、肌を刺激した。

ふらふらと石段を降りてゆくと、灰色の小さな半透明な生き物が、ふわりふわりと曲がって小路の方へと歩いていった。まるで蚊の化け物でも立ち上がったような奇妙な生き物で、ぎくしゃくと歩くたびに、カサカサと虚しい音がした。

凍えるような夜だった。

「お前はだれだ」と尋ねると「知らない」という。

「どこからきた」と聞くと「あっちから」と応える。

半透明な生き物は、肺病やみのような乾いた不吉な呼吸音をさせていた。

石段を上り、こちらを振り向くと内臓のような器官の中心から、夢のような虹色の卵を数個放出した。

彼は世の中のために、その化け物を捕らえて殺さなければならないと思い、石塀をよじ登ると、蔦の葉を両手で耒りながら、ずるずると滑り落ちた。

(オドラデク……。ああ、もう僕は、カフカの世界と現実を、ごっちゃにしている)

アルコールで濁った頭でそう思い、敷石に唾を垂らしながら薄笑いを浮かべた。

不思議とそれはそれで満足な気がした。

酔いが少し醒めてきた。目の焦点がしだいに合ってきてから目を凝らすと、二人連れの外套に身を包んだ男がいた。

銀色に照らされた敷石の上に、四本の脚が立っている。

黒い外套が、月の光を浴びて藍色に見えた。彼らはコツコツと冷えた足音を響かせながらヤノーホに近づき、仲間に目配せすると、何かを囁いた。

「今日はだめだ。ウィーン式の暗示術をかけるとしても、意味がない」

「まどろっこしい仕事だぜ。いっそひと思いに」別の男。

「馬鹿。こいつがそこまでの大物か。このケースの場合、長期的に心理作戦を張るという方法でもいいんだ。とにかく社会的に、こいつの信用をなくさせるわけだ。本人が何をいおうが、何を書こうが、まったく無駄な状態をつくるわけだ。たとえば前科をつけるとかな。婦女暴行でも窃盗でもいい。時間はかかるが、いちばん金のかからない安全な手法だ。その上で新聞には、われわれが作った話を飽くまでも押しつける」

「ブロートは、その線で飲んだのか」

「まだぐずっている。だが、あいつも時間の問題だろう。それに、万が一のことがあっても、われわれのことを出すほど、あいつも馬鹿じゃなからう」

「まあ、こいつが精神的に潰れてくれれば、いちばんいいのだがな。あるいは……」

「自殺とかな」

「そう。理由は幾つでもある。両親の離婚。奇矯な性格ゆえの孤独。信頼していた師匠の肉体的衰弱。まあ、ごく自然な成り行きだろう。世間は納得する」

「おい、人が来たぞ。またな、坊や。元気でいろよ」

冷えた石壁に頭を押しつけていたヤノーホは、遠いところから響いてくる声のように、それらの遣り取りを聞いていた。

その日、どこをどういうふうに戻ってきたのかわからない。

急に気分が悪くなり、嘔吐しようとして河岸に降りて、モルダウの水に手を差し入れたような気がする。暗い水面に、月がゆらゆらと金色にゆがんでいた映像を思い出す。

「おい、グスタフ。お前、飲んだらな」

そういわれて、父にぴしゃりと頬を叩かれた。何とか家に辿り着いたらしい。

息子はその厚みのある手の感触に、父の寂しげな愛情を感じた。

玄関の冷えた石段の上で、揺すられるように起こされた。

すでに、夜中の三時を過ぎていた。

寒そうにガウンをはおった父は、中腰で彼を家の中へと押し込めた。グスタフは珍しく甘えたくなり、さらに酔いつぶれたふりをし続けた。

息子は長椅子に横たえられて、温かな毛布を掛けられた。彼はされるがままになっていた。薄目を開ける。ひっそりとした客間の明かりの中、父の眉間には深く皺が寄り、白髪が少し混じっているのが見える。

父は眠れないのか、眼鏡を取って目を凝らし、新聞を開いている。

硬い紙の音がする。丸い背中を、ぼんやりと明かりが包む。

もう、母はこの家にいなかった。

—続く—

雪が降りそうな冬のある日、マックス・ブロートの家の扉をノックする者がいた。

洗い物の手を拭いながら、妻が出た。

「まあ、オットラじゃない。どうしたの」

そこには赤いスカーフをしたオットラ・カフカの大きく見開いた目があった。

大柄な彼女は、肩で息をしながら少し低い声で「兄の様子が思わしくないんです」といった。

結核がひどくなっただけではなくて「精神的にまいっているみたい」というのである。風が強く、路地裏を新聞紙が飛んでゆき、いったん街燈にひっかかると、またどこかへ消えていった。石畳みの端にはだいぶ枯葉が溜まっている。

冷えた外気が入り込んだ。冬の匂いがした。

マックスは慌てて扉を閉め、オットラを椅子に座らせた。

彼女はため息をつきながらいった。

「兄はまた、サナトリウムに入院しなければならないみたいです。なんだか、少しずつ少しずつ、悪くなっていくみたい。それに、夜通し、幻覚に悩まされているようで」

ブロート夫人は、今いれたばかりの温かい湯気のたっているコーヒーを、寒さで震えているオットラに薦めた。

カフカの妹はスカーフを取ると、思い詰めた表情で続けた。

「こないだも、真っ暗な部屋にひとりで座って、何かぶつぶつとつぶやいているんです。『どうもプラハ郊外の森に棲息している毒虫にやられたらしい。脳炎を誘発する虫だ。もう小説なんて書けないかもしれない』なんて。変でしょう？ 脳の中を虫が動くのが見えるって。ブロートさんもご存知の通り、ふだんのフランツだったらそんなことはないんですけど。わたしは、その場は無視して、話題を変えちゃいましたけど。新しく覚えた野菜スープを作ってあげるからって。相変わらず父とはうまくいっていないし。わたし、兄を見ているだけでもう……」

ブロートから見ると、この二人は兄妹というより、どこか恋人めいたところがあった。「たぶん、神経症だろう。少し自然の中で療養すれば直るさ。あいつは昔から、物事を突き詰めて考えすぎるんだ。ところで彼はドーラとは、会っているのかい」

ブロートは、カフカの新しい恋人ドーラ・ディアマントのことを尋ねた。バルト海の海水浴場ミュリッツの宿舎で働いていた、まだ二十歳ちょっとの少女だ。

「手紙はちよくちよく来ているみたい。でも、あの人はあの人よ。（不快そうに少し肩をそびやかした）そんなことより最近、兄は昔のことをよく話すようになって。特に不和だった父のことを。わたし、何だかそれで悪い予感がして。……こないだ風邪をこじらせたフランツを看病していたら、珍しく子供時代の話をしてくれたんです。モルダウの初心者向け水浴場での思い出話。簡易食堂裏の脱衣場で、巨漢のお父さんが、小さな痩せっぽちの兄をしきりに励ましたということです。『さあフランツ！ はずかしがらないで、ちゃんとやってみせるんだ。そんな隅っこに立ってないで。もじもじしないで、堂々と泳いでみせるんだ。男の子だろう、さあフランツ。』

こんなことでびくついてるんじゃ、厳しい世の中を渡っていけんぞ。いいか、父さんのやるように飛び込んでみせるんだ。怖いことなどありゃしない。見てろよフランツ』そうやって父さんは、大量の水しぶきをあげて河に飛び込み、びっくりしている華奢な兄に、両手を振ってしきりに励ましたというのです」

オットラは涙ぐんでしまい、はっきりと声にならなかった。それでも兄の口調をまねる。

「『さあフランツ、どうした、男だろ。そんなことじゃ、この人生の荒波を乗り切っていけやしないぞ』父さんはそうやって、あのでっぴりとしたからだで水をはね、しきりに僕を呼ぶんだ。でも僕は怖じけづいてしまって、そんなとこまで行けやしない。結局のところ僕の人生は、ずっとそういう具合だったんだ。……兄はそうやってため息をついて」

彼女はハンケチで目頭を押さえた。ブロートは黙りこんで下を向いていた。

「今頃どうして兄は、そんな話をするのでしょうか。かわいそうなフランツ。わたし、何だか、とっても嫌な予感がする」

オットラは顔を手で覆った。マックスは無言で彼女の肩に手を置いた。あの陽気で負けん気の強いオットラが、こんなに意気消沈しているのも珍しい。

「何とかしよう。元気を出しなさい、君らしくもない」

人から頼られると、つつい一肌脱ぐ気になってしまうブロートは、オットラの肩を優しく叩きながら、団子鼻をそらせた。

数日後、何とか時間を作ってブロートはカフカと会うことにした。

鐘の音の美しい教会の脇にある閑散としたレストランだった。外からやるせないようなアコーディオン弾きの歌が聞こえた。皺だらけのおどけたような老いた芸人だった。冬の午後のけだるいような黄色い光線が、店内にも柔らかく射している。

客は彼らのほかは、厚着をした老夫婦しかいなかった。

いつも愛想のよいカフカだったが、その日は必要最小限の言葉しか使わないとでも決めているようだった。

もともと痩せているのに、さらに肉は削げ落ちて顔色は土気色になり、目だけが異様に光っていた。

「ウイーンの療養所には、いつ出発するんだ」

「もうすぐ。僕はもう、声がだせなくなるかもしれない」

カフカは優しく微笑した。呼吸するたび、喉か肺の奥がカサカサいうよう妙な音をたてていた。

「でもそうやって、いま喋っているじゃないか」

励ますようにブロートはいった。しかし以前の少年ぽい茶目っ気や思慮深さといったカフカの個性の特徴よりも、むしろ生命力の希薄さが感じられた。

「喉の奥が、ごろごろするんだ。結核菌が廻ったかもしれない。だから君とは、話せるうちに話しておきたい」

ブロートは、唾を飲み込んだ。

カフカは注文を取らず、水だけをしきりに飲んだ。

彼はぼんやりと虚ろな目をして、天井を見上げた。弱々しい蠅が一匹、窓の方へと飛んでゆく。

「君はユダヤ教、そしてキリスト教について、僕よりも比較にならないほど詳しいが。われわれ人類が楽園を追われたのは、アダムとイブの墮落のためだけなのだろうか」

マックスは不意打ちのような言葉に、顔をしかめた。しかし病人の切羽詰まった言葉だと思って、さりげなく相槌を打った。

「……なるほどフランス。やっと君も、民族的な主題にまで近づいてきたわけだね」

「僕は思うんだけどマックス。人類が楽園を追われたのは、あの生命の樹のためではないだろうか。聖書によればもともとエデンには、知恵の樹と、生命の樹の二つの木があった。アダムとイブは知恵の樹の味は知ってしまった。しかしまだ、生命の樹の実は食べていない。神は、知恵の樹だけで懲りてしまい、人類に、生命の樹だけは触れさせたくはなかった。なぜだろう？ きっと生命の樹にこそ、核心があるからだ。神と人間との境界の謎があるからだ。この中ぶらりんの状態こそ、この世におけるわれわれの原罪の状態ではないのか。それがおそらく、感覚で形成されたこの地上の可視世界における人間の不完全な在り方なのではないだろうか。僕にはそう思われてならない。そしてそれはきっと、時間の次元に追放されてしまった人類の、永遠に近い徒労の遍歴の始まりかもしれない。……けれどもいつかきっと、すべてがわかる日がくる。謎が、意識の前にあらわになることがある。ある日世界は、とうとつに仮面をぬぐことを申し出るだろう」

言い終わるやいなや、いきなりカフカはからだを曲げて咳込んだ。

ブロートは慌てて立ち上がり、親友の背中を撫でた。

「あまり、今は喋らない方がいい」

「僕には、時間がないんだマックス。かつて僕は、四十まで少年のままで、その後一気に老け込むだろう、そんなことを冗談にいつたけど、どうやら本当になるらしいね。ここには錨を降ろさない……。この可視世界、物質世界に錨は降ろさない……。父や母のいる世界には自分は棲息できない。そう、あるとき僕は、決心したんだ。それはもう、すごく早い時期だ。でも、どうやら刻一刻と……。怖ろしい満潮が迫って来らしい。僕はもはや、不安、不安以外の、なにものでもなくなってしまったようだ……」

友人のかすれたような声は、何か小声の悲鳴に似ていた。ひどいむせ方をしている。

「測量技師のように時代を測量し、存在世界を測量する。しかし答えは決して出ない。いっさいは宙吊りだ。僕はほんとうは、文学という測量技術で新しい秘教を、新しいカバラを作らなければならなかったんだ。新しいヨブ記を……。でももう、そんな時間もないらしい」

ほとんどカフカのいうことは、あえぎながらの不可解なモノローグとなっていた。

「ねえフランス。あるラビが、君をひとつの恒星に譬えている」

ブロートはいった。以前ヨーゼフ・クラムと一緒に会ったウグリノ叡知協会の実力者とかいう奇妙な老ラビを思い出していた。

「厳しくて、深い光を放つ奇妙な星にね。その輝きは、永い」

「そんなことをいうラビは、たぶんラビ・レムだろう。知っているよ。あの人は、人智学者ルドルフ・シュタイナー博士の昔からの友人だ。講演会の後でシュタイナー博士から、噂を聞いたことがある。彼によれば、意識の奥底を垣間見た先達だそうだ。でも、恒星というのは、違うな。僕はただ、波間で翻弄されている一枚の木の葉に過ぎない」

カフカの顔には、孤独で透明な微笑が漂った。

アコーディオンのかすれたような音が、うら悲しい抑揚で響いている。

カフカがじっとテーブルの下を見ているのでブロートが覗くと、灰色のネズミが床と壁の境目をのそのそと這っていった。半ば立ち上がり、ヒゲの生えた桃色の鼻先を、壁に沿わせるようにして左右に動かした。

フランツは、それを独特の目つきでじっと見ていた。

「まったく不衛生な。どうなってるのかね、この店は」

話題を変えようと、ブロートはしかめっ面をしてみせる。

「……一瞬、僕の目を見た」

「え？」

「あのネズミ、ほんのわずかの瞬間だけど、僕の目を訴えるように見たんだよ。切ないような、救いを求めているような。あんなネズミだって、意識を持っている。疑問を持ち、考えている」

「……フランツ、そろそろ店を出よう。その服装では少し寒いだろう」

「世界が仮面を脱いでも、それは僕のためにではない。僕はそのとき、参加できない」

苦しそうに彼はうめいた。

「とにかく、君は療養をすることだ」強い口調でブロートはいった。

カフカはむせて口を押さえ、激しい咳をした。

太った店の主人が、迷惑そうに振り向いた。奥のテーブルの老夫婦が、こちらを見ながら低い声で私語を交わす。

アコーディオンが嘎れたような音を響かせている。

ブロートはやつれはてた友人の顔をじっと見た。

それからほどなくして、カフカはウィーンのサナトリウムでの療養生活に入った。

グスタフ・ヤノーホは、映画館の楽団のオルガン弾きの仕事を切り上げると、カフェでしばらく時間を潰してから、十時頃戻った。

「お帰り」と父はいった。部屋は木屑や板切れでいっぱいだった。作業をやめて後ろを振り向き、
「椅子を作っているんだよ。うまくいったら、お前の分もひとつ作ろう。さあて、一段落したら、コーヒーでもいれるかね」といった。

大工仕事が趣味の父は、両腕の袖をまくりあげ、工具を片手にほほ笑んだ。そしてぐっと背を反らして腰を伸ばし、ぽんぽんと片方の肩を叩いた。こんな時間まで、ガタゴトと音を立て、ノコギリや金槌相手に熱中しているのだ。

もう、連れ合いがいなくて、こんな夜は気を紛らわせるために、何かに没頭していなければやりきれないのだろう。

「役所の方も、ドクトル・カフカがいなくなってから、ずいぶんと寂しくなったよ。プロート君の話によると、からだの方がだいぶお悪いらしいが。以前は釣りにも、よく付き合ってもらったな。もっともあの人は、脇で見ていただけだったが」

カフカのことに触れるのは、息子への気づかいだろう。

このところ妙に父は優しい。今夜のように場末の映画館の楽団の仕事をして帰ってきても、前のように文句をいわなくなった。居間の壁に黄色っぽい明かりが当たり、わずかなでこぼこを空虚に浮き上がらせていた。室内のすべての家具が、穏やかな失望の色を浮かべて沈黙している。

ヤノーホは新聞を開き、飛ばし読みしてから部屋に入り、ぐったりとしたからだをベッドに投げ出した。そしていつのまにか、うとうとと眠り込んだ。

「おいグスタフ。そんな格好じゃ風邪を引くよ。コーヒーを持ってきたんだがね。せっかくだから、ここで飲んでいっても、いいかね」

父親は、両手でコーヒーポットとカップをのせた盆を持ち、目をぱちぱちしながら、ドアを開けて立っていた。息子が起き上がると、咳払いをしながらベッドの脇に椅子を寄せて座った。とくに話すこともなかった。

しかし父は工具の種類や、趣味の日曜大工のささやかな仲間たちのこと、それにドクトル・カフカがどんなに惜しまれて保険局を辞めていったかなどを語った。また聞きにくそうに、ヘレネとはうまくいっているのかと尋ねた。

そしてコーヒーを飲み終わると、「悪かったな」と息子に謝るような寂しげな微笑を浮かべて、部屋を出ていった。

おそらくは、午前一時を過ぎていた。

人の気配がした。

振り向くと、カーテンの背後で黒い影が動いた。明かりのついていない暗い部屋のベッドで、

彼は戦慄し、硬直した。

黒い影がわずかな音を立てて、窓に中腰のままじっとしていた。何だか黒豹のようだ。目を開けてしだいに暗闇に慣れてくると、その男は口のあたりに黒いマスクをしているのが見えた。片手にロープのようなものと、銀色のナイフを持っている。

男は脚を伸ばし、床に立った。小柄な男で、黒いマスクに顔をうずめ、部屋に入ると同時に、つばの広い帽子を被り、太いメガネをした。妙な奴だ。

ベッドのところに来ると、闇の中のヤノーホの口を手で押さえた。

「やっぱり、起きてるな。声を出すんじゃないわねえ」

男は押し潰したような唸れ声でいった。

ナイフが頬に押しつけられた。

とうとう来たよ、彼は思った。

しかしこの男は、いままでさんざん彼をつけ廻して、心理的に脅かしていた男とも違うようだ。では、ことによると相手は、集団なのか。

男は片手でナイフを突き出しながら、ごそごそともう一方の手で本棚をあさっていたが、やがて苛立ったように、机の引き出しを乱暴に開けた。本も床に散乱させた。

「やめろ。何するんだ、勝手に人の家に上がり込んで」

ヤノーホは堪え切れずに、低く叫んだ。

男はいきなり強引にヤノーホの腕をつかみと、鼻先に、鋭く光る物を突き出した。

彼よりも背の低い男だ。握力が意外に強いので、びっくりした。

「声を出すんじゃないわねえツってんだろ」と男はいった。「顔のどまんなか削ったら、豚みてえな平らな鼻になるぜ。ライ病やみみてえにな」

ナイフの先端が、鼻の穴のひとつに、縦に鋭くひっかけられた。

「……誰なんです」

痛い。血が出そうだ。

「誰でもいい。日記を渡せ。カフカとかいうインチキ野郎との会話を、いちいち書き込んでいるノートがあるだろう。それにおめえは、カフカの工場の話が聞かされているだろう」冷たい銀色のナイフの背中を、頬にぴったりと強く押しつけられる。

男はヤノーホを押さえたまま体勢を変えて、そそくさと反対側にまわった。

「いえ。工場の話なんて知りません」とヤノーホはいった。「それに、何のために僕のノートを」

「いいから、日記を二、三年分、丸ごと渡すんだ。顔のどまんなか、黒い穴のふたつ開いた、豚みてえな鼻になりたくなけりゃな」

ヤノーホは悪寒が起るのを感じながら、天井を指さした。

「チッ。そんなところに隠してたのか。道理で、ねえわけだ。さあ、早く出すんだ」

仕方なく机と椅子とを積み上げて、天井の裏に手を伸ばし、古いノートを数冊出した。そして睨むようにしてノートの束を渡した。そのとき、下でごとごとと物音がした。父が目覚めたのだろうか。

その途端、男は焦って帽子を落とした。頭に油がこってりと塗ってあるせいか、髪が異様に光っている。小男は、馬鹿にされたと思って怒ったのか、敏捷にくるりと後ろを向いた。そしてヤノーホを睨みつけ、ナイフで素早く手の甲を切った。

ヤノーホは、ウツと唸ってからだを屈め、切られた片手を押さえた。暗い中でも、ポタポタと床に血が落ちてゆくのがわかる。間抜けな強盗だが、ナイフの使い方だけは、堂に入ったものだった。

「なめるんじゃねえぞ」

優位に立ったと思ったのか、やっと落ち着いたような声を出した。

「今日は、これで勘弁しておく。このことは、決して言うんじゃねえ。黙っていれば、おめえみてえな子供は、それで済むんだ。俺にも、そのくらいの息子がいる。もう用はない。変な気をおこすんじゃねえぞ。いいか、親にもいうな。どうせおめえはもう、俺たちの仲間に監視されているんだから。口外したらすぐにわかる。ダチ公にもいうんじゃねえぞ。くれぐれも、問題をやこしくすんなよ」

男はそれだけ早口にいうと、疲れきったようにふーっとため息をし、手の甲で額の汗を拭いた。メガネと帽子でわからないが、中年過ぎの職人のような男だ。

男は数冊のノートを、用意してきた布袋に入れて抱えると、カーテンをめくり、脚をあげ、窓から外に飛び降りた。身軽だった。

ヤノーホは道路を見下ろした。黒い男は、街燈に照らされた通りを、すたすたと斜めに駆けていった。ヤノーホはほっとするとともに、苦笑いをした。

カフカとの対話ノートは、別な場所に大切に保管してある。

あの妙にへまな強盗が持たされていったのは、ヤノーホが少年時代に書きなぐった詩作や作曲の大量の没原稿の束であった。

そんなものが両親に見つかるるとまた文句をいわれるし、後にどんな創作のヒントになるかわからないと思って、とりあえず屋根裏に保存しておいたのだ。

(あいつめ、どうせ下っ端だろう。きっと恥をかくぞ、いい気味だ)

ヤノーホはにやりと笑って、散らかった部屋を片付けた。

三日後、ヤノーホが広場で新聞を買ってぼんやりと開いていると、片隅に次のような記事が小さく出ていた。

その脇に、職人ふうの貧相な中年男の顔写真がそえられていた。

*

『三文詩人、モルダウに死す』

十六日早朝、ニクラウス橋下で引き上げられた水死体は、レンガ職人ヨハンネス・ヒーゼル(46)のものであることが、当局の調査により判明した。

ヒーゼルは、多額の借金の悩みを周囲に訴えており、そのことを苦にしての自殺との見方が

強まっている。

なお、水死体が抱えていた大量の稚拙な詩の原稿は、生前彼がレンガ仕事のかたわら、ひそかに書きためていた遺言がわりの詩作品と推定される。

—続く—

午後から空が暗く垂れ籠め、灰色の空からちらちらと雪が降ってきて、待ち合わせ場所のカンパ島近くの広場も白く覆われてきた。

凍えるような大気の中でブロートは、自分の息が白くちぎれてゆくのを眺めた。

ほとんどこの辺りには出歩く者もない。河の水が黒く押し流されるように動いていた。さきほど数人の男たちが往来を急ぎ足で横切っていたが、あとは無音でひっそりとしている。

雪の中には捨てられた昨日の新聞が、濡れてがちがちに凍っている。建物の窓には数本のツララが伸びて、いびつな光を放っていた。

黄色いぼんやりとした街灯の下に、ヨーゼフ・クラムの黒い影が現れた。

注意深くあたりを伺い、帽子に手をやると足早にこちらに歩いてきた。

すべての音が吸い込まれてしまうような銀灰色の風景の中で、お互いに目で合図をした。沈黙の中、キシキシと雪の層がずれる音だけが響いている。

二人は黙り込んだまましばらく並んで歩いた。

クラムは眼鏡を変え、少し年寄りふうに見せて変装しているが、相変わらず陰気な秘密警察めいた雰囲気は変わらない。顔色ひとつ変えないで拷問のできそうな顔である。しかし現在は、本人が官憲に目をつけられている身であった。

数冊の思想的著作を刊行し、いまやちょっとしたプラハの名士であるブロートとしては、交際に気をつけなければならない。

「もう、話すことなどないといったろ」とブロート。

「……そのことではない」クラムはわざとのように驚いた表情を作った。

「カフカの具合が、悪いと聞いたんだが」

「ああ。今、ウィーンのサナトリウムにいる」

「様態はどうなんだね」

「ほう。一応は、友達思いの気持ちも残っていると見える」

ブロートは立ち止まって、相手の顔を見た。

「喉をやられている。肺から菌が移ったらしい。声を出すのがつらそうだ。痛みがひどくて、固形物は飲み下せない状態だ。この間は、喉にアルコール注射を打つところを見せられたよ。痛々しいもんだ。本人は、精一杯元気にふるまっているが、ますます痩せてしまって、骨に皮がついたような有り様だ。モルヒネをしきりに欲しがっている。あのオットラも、看病やつれしてしまって。それに、ドーラという娘も……君は知らないかもしれないが、新しい女だ。彼女もほとんど眠っていない状態だ」

「ドーラ・ダイヤモンドか。聞いている。若い女だってな。まだ二十歳そこそこの」

「さすがだね、君達の情報網は。二人は結婚する気である。僕の見たところ、今まででいちばんうまくいっている。まるで幼なじみのまま成長した、同じ年の恋人みたいだよ。ただハイエクと

かいう藪医者か、あの病院を冷たい監獄にしている。ひどい病院だ。自分が、絶対的な支配者としてふるまいたいのか、すべての患者を実験動物みたいに番号で呼ぶんだ。とくに物書きや言論人は、大嫌いらしい。院長閣下への服従あるのみ。例外は認めないとき」

「ほう。まるで誰かさんの小説みたいだ」

雪の路上を、のろのろと馬車が揺れながら走っていった。

馬は、大量の白い息を左右に吐き散らし、たてがみにも雪がかかっている。

「つまりだ」とマックスは語気を強めた。

「君たちの望みは、達せられるだろう。アナーキスト団体やウグリノの秘密組織の裏の資金源、つまりさまざまな謀略や、保険金殺人の生き証人が、放っておいてもひとり減るわけだからな」

ブロートは、雪解けの泥水の中に唾を吐いた。

「ところでヤノーホ君は、元気かね」相手は冷ややかに尋ねる。

「とぼけるのも、いいかげんにしたまえ。将来のある若者を、心理的に遊ぶようなことをして、何がうれしいんだ」

「さあな。きっと人間研究の一助ぐらいにはなるだろう」

フラチーン城の背景には、暗い銀色の雲が覆っていた。

城のところどころに雪が積もり、褐色の円塔を静謐な姿に演出していた。

暗鬱な風景の中で、城や修道院の建物が、押し黙った獣のようにうずくまっている。

見上げると、雪の粒がしだいに大きくなってきた。

傾いだ太い樹木の向こうに、モルダウの重い水がゆっくりと移動しているのが見える。寒々とした川面には、木片や藁がまばらに散らしたように浮いている。

ぶあつい鉛色の空の下に、黒褐色の教会の尖塔や城壁の影が連なる。

「ヤノーホの家に押し入った男は、君が差し向けたのだろう」

「……知らないな。何のことかな」クラムは答える。

「この間、水死体があがったやつだ。もう、あの子にはかかわりあわないでくれ」

「何をいっているのか、わからんのだが」

「とぼけるな……父親に聞かされている」

「泥棒でもあったのかね。それなら、はやく警察に届けた方がいいぞ」

「ヤノーホは、もうノイローゼ状態なんだ」

ブロートは立ち止まり、冷たく相手を見た。

「ひどい冬だね。ベルリンじゃインフレが、お話しにならないくらいひどいらしい。それに、例の国家社会主義者の連中が、最近でかい面をしはじめた。嫌な空気になってきたわけだ」

クラムはとぼけたようにコートの襟を立て、そうやって寒そうに首を縮めた。

肌の荒れたやつれたような顔だった。相変わらず人を食ったような顔をしているが、その実、何か追われ、憔悴しきっているように見える。

「どうやら降りの方も、本格的になってきたぞ。いつまでつづくのかね、この雪は」

裏小路の曲がりくねった坂で、着ぶくれした子供が二人、手作りの橇のようなものを引きずっている。雪道にはすでに、蒼銀色のレールの跡がついている。

子供たちは遊び疲れておなかを空かして、これから母の元に夕食へと戻るのだろう。

「まもなく、プラハにはいられなくなるだろう。君とも、しばらく会えなくなる。あるいはこれが最後になるかも知れぬ」

クラムはぼそりといった。

「どうして」

「……いろんな理由でな」

ぎこちない沈黙があった。

そしてクラムは、突然くるりと振り向いて両手を開き、自分でもわからないといった顔をして見せた。醜い泣き笑いのような表情だった。

雪はしだいに激しくなり、クラムの変装した髭も、綿がかかったように白くなる。何だか、滑稽に見えた。

「俺は結局、現実深くかかわり過ぎたのさ。君やフランツに較べて」

鼻水が垂れ、クラムはハンケチでそれを拭った。鼻に皺を寄せ、遠くを見つめた。痩せたようだ。変装ではなく、本当に老いて貧相になったように見える。

二人は夕暮れの河に面した小さなビストロに入った。入り口の石段が、解けかかって汚れた雪でびちゃびちゃしていた。低く暗い天井を煙草の煙が白く這いまわっている。

クラムはウイスキーとハムを注文すると、じっとブロートを見た。

「無意味な、人生さ」といった。

目が赤く濁って血走っている。助けを求めているようにも見える。

「もう、今の運命の因果関係から、抜け出せない。自分の最後は、だいたい予測がつくよ。結局、若いころ、俺が考えていたようには、生きられなかった。見積もりが、甘かったんだな」

「具体的に、いいたまえ」ブロートはグラスをあおった。

「それが出来ないから、辛いわけでね」クラムは顔をひきつらせ、神経的に笑った。

「われわれは、動乱とテロリズムの二十世紀に生きている。そこでは策謀と詭計が日常化し、人々は疑心暗鬼と妄想の暗い藪の中で息を凝らしている。いまやすべての空間を、鉄の力と政治とが支配しはじめた。それは怖ろしいほどだ。時代の流れはもう、止められやしない。そしておそらくは、このちっぽけな俺様の運命もな」

一点を睨み、テーブルの上で拳を固く握りしめて、暗く自嘲的に笑った。

ブロートは黙って相手を見つめていた。

「戦争か、さもなければ労働と消費だ。それが、われわれの人生だ。……もはや、どこにも超地上的な価値は見当たらない。おや、笑ってるねマックス。どうせ俺みたいなヤクザが口にする言葉ではないが。どこを見渡しても、夢もなく崇高さもない。裏切りと妬みばかり。強い者が強い、文句あるか、というわけさ。つめたい夜の湖底のようなニヒリズムの憂愁だ。もう俺は、評論家のマネゴトなどとっくにやめてしまったが……われわれはこれから永い間、ニーチェを超えられないだろうよ。ニヒリズムと無意味の憂愁をな」

暗い窓の外に、河面に砕ける夜の明かりが揺れている。前の方だけ、斜めに落ちて行く雪の粉

が見えた。ガラスは店の内部の湿気で曇っている。

「ほう、ゆすり専門の三文カフェ文士が、ごたいそうに世評を論じるとはな。それに、ニーチェときたか。なつかしいね。……フランツと出会ったのも、僕が大学で、ニーチェとショーペンハウエルについて幼稚な演説したことがきっかけだったけどな」

「ふむ。フランツ、フランツ、フランツ！ お前さんは、いつもそればかりだな。たいした友情だよ今どき。あいつは結局、俺のようには、泥にまみれていない。真っ黒な泥に、そしてこのプラハの毒の渦にな。俺の地獄に比べれば、奴の病気など……」

興奮口調でまくし立ててから、クラムははっとしたように気づき、鉤鼻の脇を、つまらなそうに指でぼりぼりかいた。

そして照れたように眉をつり上げ、乱暴にウイスキーを口に放りこんだ。

「いや、俺はフランツを認めている。ひょっとすると誰よりもな」

ブロートは、ほう、とつぶやいて顔を上げた。

「奴はつまり、前代未聞の『事件』だ」

わずかな雪が窓枠に積もり、すぐに消えるように溶けてゆく。

「クラム、ほんとうにそう思っているのかね？」

「もちろん。フランツの作品は、次の二世紀の文学を支配するだろうさ」

ブロートはきょとんととして、一瞬間をおいてから不意に朗らかに笑い出した。

クラム特有の冗談だろうと思って、相手を見た。

しかし彼は彫像のように青ざめて、無表情だった。

「あいつの小説は、ひとつの元型を与え、多くの群小作家たちがそれを模倣し、エピゴーネンと化して、一敗地にまみれるだろう。訳もわからず、単なる表面的な形式を模倣して、悦に入るのさ。いまに、世界中にそんな連中がうじゃうじゃ湧いてくるだろうよ。フランツ・カフカの名前のまわりは、死屍累々、おびただしい屍の山さ。そしてその山の上で、一羽の痩せた鴉カフカが、孤独な声で鳴いているという寸法さ。しかし、奴の作品に比較できる文学は、この世に、ただひとつしかない。旧約聖書のヨブ記だ」

ブロートは腕を組んで、目を閉じていた。

「ふう。まだそこまで、言いのけた奴は、いないな」

窓の外ではモルダウの暗い水がゆらゆらと街灯に照らされ、建物の窓明かりが紫色の波に崩れていた。

「カフカから大量の原稿を預かっている。焼却してくれといわれているんだ」

わざと挑発するように、ブロートはいった。

「『協会』も、それを望んでいる」クラムは応えた。

「しかし、そうはしない」ブロートは、口元に微妙な力を込め、傲然と顔を反らした。

「多分、君はそうだろうな。きっと、そうするはずだ。俺にはまあ、別の考えがあるがね」クラムは遠くを見つめた。そして、苦しそうに呼吸していた。

「いまに時代は……」 クラムは低くつぶやいた。

「フランツ・カフカのものになるだろう」

しかしつぎの瞬間、彼はからだを鋭角的にひねり、ハンケチをひつつかんだ手で口元を覆った。ひどい咽せ方だ。

ブロートはどうしていいかわからず、相手の堅い背中に手を当て、しきりにさすった。しばらく咳こむと、クラムは上を向き、呻くようにいった。

「……ありがとう。だいじょうぶだ」眉間に皺を寄せ、呟いた。

「俺も君の立場だったら、カフカに対しては、そうするのもかもしれない。しかし、もう俺は、個人ではない。後戻りできないんだ」

クラムは顔を上げ、苦しそうに喉に手をやり、ぜいぜいと激しい息をした。

しかしすぐに、笑ったような醜い顔をして「むふッ」と呻くと、前屈みになってまたもや両手で口を押えた。

そしてあわててコップを唇にもってゆき、何かどろりと濡れた濃い苺色のものを吐き出した。

それは新鮮な血液の塊りだった。

クラムは他人事のように、じっと吐き出したものをしばらくの間、見つめていた。

そしてブロートを見ると、ニヤリと笑って、口の中の生温かいものを、コップの中へと、断続的にたらたらと吐き落としていった。

やがて吐瀉された血液が、コップの水の中で赤い煙のような模様を描く。

指の隙間にも、べっとりと血が滲む。

「人の病気を、笑ってられる身分じゃないんだ」

周囲の客の視線が、二人を避けるように冷ややだった。

二人は寒々としたカンパ島の緑地の中の路を、過ぎていった。

クラムは店を出るとき時計を確認した。

夜も更け、すでに雪はまばらになっていた。ぼんやりとした街灯の光が、薄い雪に隠れた石畳みの凹凸を照らしている。

痩せたみすぼらしい黒犬が、寒そうにふるえながら路地の向こうを横切っていった。

「あんまり、冷える夜は外出しない方がいい」

二人は並んで足下の雪を見下ろしながら歩き続けた。

「フランツもおまえのことを心配していた」

「そうかね」

息が白い。

カンパ島はさすがに人通りが少ない。

このあたりは、昔のマルタ騎士団自治領修道院の重苦しい建物がある場所で、島の脇の頑強な石堀の下には暗い水路が、ごうごうと音を立てて走っている。

小運河の縁には、薄く氷が張り出していた。水路脇には、節くれだった樹木が斜めに傾き、葉の落ちた太い枝に雪を受けていた。その根元に二本の黒いスコップが立てかけられている。

向こうの青い木陰から、寒そうにショールを巻いた大柄の女が現れた。

暗くてはっきりとは見えないが、水色の目をした美しい女だった。

周囲を見廻し、クラムは片手を挙げた。

「これ、Mからよ」

謎めいた含み笑いをして、彼女は小さな小包を手渡した。

被り物をとって頭をふり、淡い金色の髪を整えた。ばさりと靡いた金髪が、豪華な雰囲気振りまいた。どこかで見たことがあるような気がする。

雪明かりに、白い額の生え際がのぞいた。

クラムは黙って受け取り、内ポケットにそれを突っ込むと、女に素早く小金を渡した。金を受け取ると、女はじっと相手の目を見ながら、冷ややかなお礼として、軽く首を傾げた。

そして豊かな胸のところで腕を組んだまま、頭を反らし、こつこつと雪の路地の角を曲がっていった。

深い闇の中で街灯が、女の頭を一瞬金色に照らした。

「覚えているかね。『叡知協会』の奇蹟師のラビのところにいる女だ」

ぼそりとクラムがいった。

「いちどだけ、寝たことがある。いったいどこで仕込まれたのか、いい女だ」

「……かかわるな、といっても、無駄だろうな。今さら」とブロート。

「もう個人の意志ではない。俺は、組織の歯車に、突き動かされているんだ。やがて、国家と民族を巻き込んだ大きな変化があるだろう。そういうときはいつも、捨て石が必要なんだ。俺はとにかく、現実にかかわり過ぎた。……詩か。芸術か。ああ、昔、カフェで君たちと、夜通し議論をしていた頃がなつかしいよ。あの頃のプラハは、最高だったな」

そうつぶやくクラムの落ちた肩に、綿のような淡い雪が積もっていた。

黒くいびつな樹木の枝から、一挙にザザザッと雪が崩れ落ちた。

蒼黒い陰鬱な淵に、凍りつくような水の聞き合う音が聞こえた。

マックス・ブロートは手袋を脱ぎ捨てながら椅子に座り、頭を振った。

彼はいま編集室から自宅へ帰ってきたばかりであった。

仕事中にサナトリウムから電話があって、ドーラ・ディアマントがその後のカフカの様態を知らせてきたのであった。

すでにカフカは、ウィーンのあの恐ろしい監獄のようなハイエク教授の病院から、キーアリンクのサナトリウムへと、移動していた。ハイエク教授はこの患者を手離すまいとして、あれこれと卑劣な画策を弄したが、ついにドーラと医師クロプシュトックの熱意に負けたのである。

もう、春になっていた。

キーアリンクの療養所の病室には、ドーラが野花を飾り、窓からは浅緑色の植え込みが見えた。日毎にいろいろな花々が咲き乱れ、野鳥たちが窓辺にやってきた。

カフカはしばらく見ない間にずいぶんと痩せ衰え、とくに目の落ち窪み方が激しかった。もともと若く見える男だったが、まるで年老いてやつれてしまったようだ。

やはり結核はすでに、肺から喉に廻っているらしい。

ベッドの傍らには、つねに友人の若い医師クロプシュトックと、カフカの幼い恋人ドーラ・ディアマントの姿があった。クロプシュトックは、肺結核の先駆的な研究者のひとりでもあるのだが、その研究を中断し、わざわざフランツを看護してくれるほど献身的であった。

それに、ドーラと話をしているときのフランツときたら、不思議なほど優しい穏やかな笑顔をしているのではないか。これはいままでの彼の女たち、フェリーチェB.やミレナ夫人などとの間では、ついぞ見られなかったことだ。

ドーラが水差しの水を換えに病室を出ていったとき、ブロートはカフカの耳元に顔を近づけ、「まったく、うらやましい奴だよ、君は。二十歳も年下の女なんかと」といって肘でつつき、片目をつむって見せた。

「ドーラはね……。料理がとってもうまいんだ」と、カフカは天井を見上げた。

「もし、この病気が直ったら……。ドーラとパレスチナ渡って、レストランを開こうと思うんだ」

そして枕元から、レストランの間取りを書いた皺くちの紙切れを、取り出した。

「レストランで、僕は給仕人をやろうと思うんだ。……大変な、給仕人だけどね。ちょっとした料理ぐらいは、ドーラに習って……。作れるようにしなくっちゃ」

喘ぐようにつぶやく土気色のカフカの顔。

それだけいうのにも、辛そうに見えた。

それでも骨の輪郭のあらわになった顔を輝かせ、ことある毎に『パレスチナのレストラン』の話の繰り返すので、ブロートにもいつしか、本当に二人のパレスチナ行きが実現するかのよう思えてしまうのであった。

パレスチナ、旧約聖書の世界。神がユダヤ人に約束の地として与えてくれた土地。

このパレスチナ行きの儚い夢想は、ブロート自身が長年カフカに吹き込んできたシオニズム思想が、ようやく今になって発芽してきた結果でもあるかも知れない。

「僕の病気が直ったら……。マックスにも一度、ドーラの手料理をごちそうしてやらなければならないな。味で証明するんだ。きっとその顔じゃ……。ドーラの腕前を、てんで信用してやしないもの」

「フランツ、またからだを起こしてる」

ドーラが病室に戻ってきて、眉をひそめて見せる。

「駄目でしょ。ちゃんとクロプシュトックさんがいった通りに寝てないと」

ぷりぷりした顔で、ドーラが水差しをテーブルに置く。

まるでそのことさえ注意深く守っていれば、こんな病気など、すぐさま退散してしまうとでもいわんばかりに。

そして丁寧にカフカの胸まで毛布をかけてやると、ベッドの横に腰をかけ、恋人の両目を見つめながら、いとおしげに額にかかった髪を撫でつける。まるで不注意から、たまたまひいてしまった風邪の応急処置でもしているような雰囲気だ。

ブロートは耐え切れなくなって、口元を押さえながら、横を向いた。

夕方、みんなでビールを飲む。

もちろんカフカの喉はビールを通せない状態だったが、病室でみんながおいしそうに飲んでみせるのを、非常に喜んだ。

ベッドの中でからだをひねり、一緒に喉をごくごくさせて、ささやかなパーティーに参加したつもりになっているのだ。

ブロートは思わず、何杯でもビールを飲んで見せてやりたくなくなってしまった。

かつてヴェルチュやポラックなどの仲間たちと、プラハ中のビヤホールやカフェを、夜遅くまでハシゴした青春の日々が甦る。

「ねえマックス。……レストランの間取りを、こういうふうに変えてみたんだ……。テラスを広くして、客が外でも……。愉しく食事できるようにってね」

朝、カフカを寝かせたまま、病院の庭園をクロプシュトックやドーラと散策する。

何年前か前、カフカがプラハ郊外の果樹園で、オットラと一緒に園芸の趣味に励んでいた頃のことを思い出す。

両手に植木バサミと薔薇の花を持ち、似合わない作業をやることに、自分自身で照れているような微笑を見せていた。

樹木の中にいるときの彼はくつろぎ、幸福そうであった。

三人が遊歩道を歩くと、虻が忙しそうに、ころころとしたからだで花の中にもぐりこみ、黄色い花粉をいっぱい背負って、大慌てで次の花芯へと滑り込んだ。

褐色の蜥蜴が石の上にじっとして、細いからだを温めている。金緑色の小さな甲虫が、枝の分

かれ目にとまり、いま羽を広げて飛び立とうと身構えていた。退院まぎわの子供たちが、樹木の下でパジャマのまま、笑いながら子犬と追い駆けっこをしていた。

いたるところに、生命力があふれていた。

植物園で、子供のように葉っぱだらけになって笑っていたカフカの姿が、目に浮かぶ。あの頃から彼は不意に襲ってくる苦痛に耐えて、自分自身のことは取るに足らないこととして、つとめて明るく振るまっていたのだ。

昔からよく、変な咳をしていた。

あのベッドに横たわって微笑しているのは、身に覚えのない苦難を引き受けているひとりのヨブなのだ、とブロートは思った。

――五月、カフカの病状が悪化した。

窓の外は日に日に鮮やかな緑が萌え立ち、色とりどりの野草の花が咲き乱れはじめていた。

小さな野鳥が病室の窓枠を訪れ、瑠璃色の尾を上下にふりながら、ドーラの手からパンくずをねだった。調子のいいときのカフカはそれを見て、落ちくぼんだ目で静かにほほ笑んだ。

つきっきりで看病しているドーラを見上げて

「いまぐらい僕は、命と健康が惜しいと感じたときはなかった」とかすれた笛のような声でつぶやいた。

そしてまだ少女のようにほっそりしている恋人の腰を、強く抱きしめた。

二人はひとつの金盥で一緒に手を洗い「わたしたちのお風呂」といって子供のように戯れた。

死の直前、最後の本である『断食芸人』の初校が、出版社からサナトリウムに送られてきた。目ばかり光らせ、ミイラのようにげっそりと痩せたカフカは、ベッドに座ったまま震える指にペンをはさみ、『断食芸人』を校正した。

意識朦朧となったカフカは、盛んにうなされた。

灰色の虚無の闇に、無数の階段が狂気のように交錯している。どこに潜んでいるのか、数千匹もの夥しい齧歯類の哭声が聞こえてくる。

かと思うと、突然遠方から明るい波が湧き起こり、水泳着を着たでっぴりとした父の姿が現れる。

「さあフランツ。ちゃんとやって見せるんだ。男らしくな。どうした。そんなことじゃ、人生の荒波を渡っていけんぞ。いいかフランツ、父さんを見てるんだ」

しかし彼はそれには応えず、弱々しい微笑を浮かべながら、闇の底へと沈んでゆく。

苦痛に責め苛まれ続けるカフカと、何とか延命を図ろうとする医師クロプシュトックの間で、凄絶なモルヒネの争奪戦が始まっていた。

病人は、少しでも激痛を和らげたい一心だった。

ある日、カンフル剤でごまかそうとする医師に、カフカは叫んだ。

「僕を殺してください。さもなければあなたは、人殺しだ」

そして全身の力で氷のうをはがし、怖ろしい顔をして病室の壁に投げつけた。

氷の塊はぐしゃりとつぶれ、薄暗い床に鋭く飛び散った。

「もう痛めつけなくてくれ。時間をのばしたからって、どうなるっていうんだ！」

――六月三日の昼すぎ、小雨の中、フランツ・カフカは死んだ。

カフカの死に顔は、苦痛の鑿によって彫り上げられた美しい彫刻のようであった。

柩に入ると、それはますます厳格で高貴な印象を帯びていった。

柩はプラハに送られ、シュトラニッツ・ユダヤ人墓地で埋葬された。

ブロートを始め幾人かの知人の作家、詩人が集まった。カフカはまったく無名というわけでもなかったのだ。

埋葬される時、ドーラ・ダイヤモンドが、新しい黒土に半ば覆われた柩にしがみついて泣きじゃくり、そのまま蒼白になり、気を失った。

鴉が数羽、白い空を飛んでいった。

ブロートの心の籠もった悼辞が終わったあと、あの豪気なヘルマン・カフカ氏が、帽子を胸に、何か言いたそうに、おずおずとブロートの前に進み出た。

少し、痩せたようだ。

「わしは文学のことは、からきし解らんのだが」

と老いた父は、珍しくもじもじとして口ごもった。

「フランツはまあ、始終、何かしら夜っぴいて書いておったわけだが。……何かそのつまり、うちの息子の書いたものは、世の中のために、人様のために、なるような類いのものでしたかな？」

がっしりしたヘルマン氏の短く刈られた髪は、すでに灰白色になっていた。

額の深い皺に、長年の労苦が刻み込まれていた。

老人は、息子の親友の返事を一言も聞きもらすまいとして、注意深く耳を傾けていた。ブロートは口を結び、相手の両目をじっと見据えた。

喉の奥が絞られるように震えていた。

「もちろんですとも――」

すると、皺が深く刻まれた父親の顔が、少し和らいだ。

この頑固な父親もまた、彼なりのやり方で息子を愛していたのだ。

ヘルマン・カフカ氏は、目尻に涙をにじませ、ブロートの両手を何度も固く握った。

翌日、幾つかの新聞が、作家の死を小さく報道した。

— 続く —

グスタフ・ヤノーホは、二重の深い失意の底にあった。

カフカの死は、旅先で知った。

六月の半ば過ぎになって、友人の画家が手紙で知らせてくれたのだ。

手紙を開く前から、怖ろしい胸騒ぎがした。読み終えた後、一瞬、世界が冷たく発光したような眩暈に襲われ、そのまま膝ががくがくと崩れた。

しかも、ヤノーホの父親もまた、五月十四日に自殺していた。

母との離婚後、晩年の父はほとんど抜け殻のように見えた。趣味の大工仕事に没頭するか、さもないと椅子に座ってぼんやりと天井ばかり見ている。

一階の部屋で、吊された外套のように縊れていた遺体を発見したとき、何が起こったのか分からなかった。

こんなことは受け入れ難く、現実であるとはとうてい思えなかった。

彼はしばらく茫然と立ちつくしていた。

黄緑色の外光が、剥製のよう固まった父の頬に射したとき、息子は父の遺体にすがりついた。嗚咽が鳩尾の底から、波打つように込み上げてきた。

泥酔して帰ってきた晩、軽く撫でるように頬を叩かれたごわごわした固い手の感触を、確かめた。人を呼ぶ前に、ヤノーホはその乾いた手を自分の頬に押しつけて、ひとしきり、泣くだけ泣いた。

父親の自殺とカフカの死とは、わずか二十一日の違いであった。

まだ彼が、父の死から立ち直ることができずにいた。わずか一月足らずの間に起こった過酷な二つの事件であった。

父の死は確かに生々しかったが、カフカの死は、遠いところで起こった事件だった。しかし彼にとっては、より重苦しいボディブローのように効いてくる、根底的な打撃であった。何をしても、何を考えていても、何処を歩いても、もうこの世にカフカがいない、と思う。

それは、彼自身の秘やかな信仰が、根っこの所から、虚無の闇へと崩落してしまったようなものであった。世界は自分の精神を、狂気に追いやろうとしている。

(親父もドクトル・カフカも、みんな僕を置き去りにして、どこかへ行ってしまった)

カーテンをだらしなく半開きにしたまま、彼は一日中、服も変えずにベッドに座り、外の光がゆっくりと暮れていくのを眺めていた。

椅子に座って壁を見つめるヤノーホの目は、失意のため、ガラス玉のように澄み切った。そして、父の自死の日から、ちょうど彼の年齢を示す二十一日後、思春期から青春期にかけての精神的支柱であった、あのフランツ・カフカが死んだ。

二十一歳。二十一日。

ヤノーホは、そこに勝手な因縁を、つまり『運命の悪意』を見いだした。

世界は自分を拒絶している。神など存在しない。たとえ悪魔が存在していたとしても。そして、自分はすべてに見捨てられている。

しっかりしていたはずの現実の地平が、みるみる崩れ落ちていく。

人生の暗い波のうねりの中で、踏み応えている力がなくなった。

グスタフは部屋に閉じこもり、しきりに自殺を考えた。

(そっちが、どうしてもその気ならば、僕にだって相当な考えが、あるんだ)

――ある晩、重苦しい夢を見た。

狭い路地裏に、顔ははっきりわからないが、彼のよく知っている者たちが、薄暗い顔をしてひしめきあっている。生臭い体臭すら感じるほどだ。

その暗がり、黒い服を着て陰惨な目つきをした表情をした人形遣いが、グロテスクな人形たちを操っている。

人形は、団子鼻を戯画化されたマックス・ブロートや、思いきり歪んだ顔をしたフランツ・カフカ、それに亡霊となった彼の父親だった。

(ああ、みんな死んで、こんなところに堕ちてしまったんだ)と彼は思った。

いちばん醜い顔をしている自分自身の人形も、ニスでてかてか光る手足を、ぎこちなく上下させていた。

人形遣いの顔は、あのクラムにも似ていた。また子供の頃に見た絵本の死神にも、似ていた。

生前、父親も小声でクラムの一味の闇の動きを噂していた。

そうか、こいつだったんだ、とヤノーホは思った。こいつが僕を苦しめる『運命の悪意』だったんだ……。

こんな奴に、人生を玩ばれてたまるか、そう思って前に乗り出して叫ぼうとしたとたん、目が覚めた。息荒く、脂汗の滲む手で、シーツをきつく掴んでいた。

彼はもう何日も、部屋を出ていなかった。

外の世界は、彼を傷つける悪意に満ちあふれていた。すべてに対し退嬰的な気分になっていた。

鬱屈した青黒い心を抱えたまま、プラハに戻り、久しぶりにアマリアの部屋を訪れた。暗い黴臭い階段を昇って彼女の部屋の前に立つと、中から微妙な声が聞こえてきた。嫌な予感がした。このまま帰るべきかも知れない。しかし、口元に薄い笑いが浮かんだ。

意を決してドアを静かに引いてみると、鍵は開いたままであった。

両手で押さえながら薄く開けると、ベッドの上に、こちら向きになった男の尻が見えた。汗でかてか輝いた充実した筋肉質の尻は、激しく小刻みに動いていた。

カーテンが斜めに耖られ、アマリアの白い足が胴を挟むように強くからまっていた。男は赤銅色の体を大きく反らした。低い重苦しい喘ぎ声が聞こえた。

ヤノーホは、血が耳に上ってゆくのを感じた。

アマリアの顔は見えなかったが、汗ばんだ男の背中に強く食い込んでいる女の爪と、交差して

いる足首が見えた。

彼は、わざと大きな音をさせて、扉を閉めた。

そして思いきり足でドアを蹴つとばし、猛烈な勢いで、ほとんど転びそうになりながら、階段を一段おきに降りていった。

(どうせそうなんだ。誰も彼も、どうせそうなんだ)

ここにも手痛い『拒絶』があった。

走りながらヤノーホは、手の甲で目尻を拭った。

そしてそのまま、地下のピヤホールに駆け込んだ。年上の労働者たちの下卑た視線を浴びながら、前後不覚になるまで、自分をいじめ殺すように痛飲した。

フランツ・カフカの死後数年経ってから、文学界ではしきりにその名が噂されるようになっていった。次第に文壇のお偉方や、名だたる評論家たちの文章の中に、カフカの作品についての言及が多くなった。

これはマックス・ブロートが積極的に運動したらしい。

新たな神を祀り上げることにより、自分は文壇論壇の司祭となるという手法だ。

とはいえ、ヤノーホはそれを遠目で眺めながら、一方で誇らしくも思った。

しかし常に何者かが、自分を監視しているような不安が消え去らなかつた。

あの珍妙な職人風の強盗は、何だったのだろう。連中はわざとヘマな走り使いを送ってよこし、意図的に失敗させて、壁の後ろで嘲っているのだ。

一思いにやらず、真綿で首を絞めるように。

(「三文詩人モルダウに死す」か。あの屈辱的な捏造記事は、脅しだ。しかしそうはいくもんか)

彼はカフカとの『対話メモ』の原稿である灰色のノートを分冊にして、部屋のあちこちに隠しておいた。

彼の目つきは、血走り、険しくなつた。ヤノーホも、もう無邪気な子供ではなかつた。あの対話は、何か重要な事件と関係があるらしい。決してわからないように、古くて厚い本をくりぬいて、その中に押し込めた。

街で見知らぬ男の気配を感じた。また友人の家には「鉤鼻の男」が、しきりに聞き込みにきたりしているようだ。

ヤノーホは、ヨーゼフ・クラムの国家警察のような冷たい横顔を思い出して、脅えた。

(ひょっとしたら、ドクトル・カフカは奴らに毒殺されたのかも知れない。医者も恋人も友人も、すべてグルだったのではないか。みんなして彼が死ぬのを、目を光らせ、しっかりと見届けていたのだ。あれほど孤独な人はいない。そうだ、カフカのほんとうの味方は、結局、俺だけだったのだ……)

しかし、グスタフ・ヤノーホにささやかな幸せがなかつたわけではない。

ヘレネと結婚したのだ。彼女は素朴な田舎娘だったが、心から彼を信頼し、尊敬していた。ただ、病気ばかりしていた。

やがて三十年代に入り、時代はしだいに変動していった。

戦時色が濃くなる中、グスタフ・ヤノーホはチェコ民族派のレジスタンス運動に加わった。チェコ人である彼は、政治的にはナチスともユダヤ勢力とも、敵対していた。知人の幾人かが捕らえられ、虐殺された。逮捕、密告、拷問、殺人、陰謀、裏切り、絶望……。戦争の狂気の中、カフカの文学世界が、しだいに哲学的ファンタジーなどではなく、冷厳な現実と化していく恐怖を味わった。

大戦中、風の噂に、カフカの三人の妹たち、エリ、ヴァリ、オットラが、ナチスによってすべてユダヤ人強制収容所に送られ、そこで死んだということを伝え聞いた。ヤノーホは、兄想いのオットラの芯の強そうな顔を思い、胸がつぶれるような気がした。

戦争が終わった。誰もが虚脱状態だった。

そして戦争終結の一年後、なぜかヤノーホ自身が旧政府の役人の告発により、ある疑獄に巻き込まれた。収賄、窃盗、職権乱用の罪だというのだ。明らかに冤罪だった。

(とうとう仕掛けてきやがったな。まさかと思っていたが、奴らは本気で俺を、社会的に抹殺するつもりだ)

彼は逮捕され、灰色の護送車に乗せられた。妻のヘレネは警官に腕をつかまれ、泣き叫んだ。結婚後、ヘレネは永いこと重い病を患っていた。この病身の妻に、頼れる者がいなくなってしまうのだ。窓を覆われた車の中で、彼は背を丸め、冷たい手錠をじっと睨んだ。カフカの『審判』の世界が、ヤノーホを飲み込んだ。はじめ悪質な冗談かと思ったが、現実がぎりぎりと言を立て、しっかりと相互に噛み合った重い歯車のように、進行していった。

昨日までにこやかだった者たちが、一斉にこちらを振り向いて、悪意をもってヤノーホを名指し始めた。彼が納得しようがしまいが、家畜のように消毒され、顔写真を撮影され、囚人服を着せられた。

下っ端の看守に文句をいうと、手ひどく殴られた。自分はもはや、ひとりの囚人に過ぎなかった。憤激と恐怖の中、悪名高いパンクラーツ監獄で未決拘留のまま、十四か月を過ごした。冷たい鉄格子と灰色の壁に、ヤノーホはカフカの顔を思い描いた。あたかも信仰者が、キリストや聖者の姿を思い浮かべるように。彼の悲痛な抗議は、制服に身を包んだ無表情な連中には、ことごとく無視された。本当の敵は、権力の闇の奥で見え隠れしている者たちであった。

(なぜこんな不合理な苦難ばかり襲ってくるんだ。ひょっとして、カフカと出会ったためか。あの人の世界に呪われているのか。あの人との結びつきが、知らず知らずの間に『運命の悪意』をおびき寄せてしまったとでも、いうのだろうか。もっと幸福な人生が、この俺にも、あったのかも知れない。あいつは、ことによると、死に神か？)

灰色の冷たい壁に、彼は額を押しつける。

目を血走らせ、頭を掻きむしる。

そして、ハッと我に返る。

(いや、それは違う。そんなこと、考えてはいけない。カフカ自身が受難者だったのだ。文学の聖者だったのだ。そもそもドクトル・カフカのような崇高な人物が、なぜあのような悲惨な生しか、与えられなかったんだ。いや、すべてがこの世の構造じたいが、根底から、間違っているのだ)

はないのか)

彼はまた、汚れた床の中で、すべてを嘲笑する陰惨な路地裏の人形遣いの姿を、鮮明に思い描いた。

死神のような顔と生白い指先、不条理なシナリオの下で操られる奇怪な人形たち。

あの人形遣いの囁れ声の口上が、記憶の底から甦る。

『……人生なんて一幕の夢。どうせこの世は人形芝居。幸運も不幸もクジ運しだい。意味などハナからありやしねえ……』

やがてヤノーホが無罪だったことが判明した。しかし、それだけであった。彼が疑われていたとき、世間は興味を持った。無罪と決まったとき、世間は別のことに夢中だった。要するに、はじめから裁判所と新聞屋どもによる謀略だったのだ。

多くの時間と、自尊心が失われた。

戦争が終わって荒涼とした世間に出てみると、自分は一人のみすぼらしい「刑務所帰り」に過ぎないことを思い知らされた。

首をすくめて猫背で歩く彼の頬に、乾いた風が吹き荒んだ。

度重なる不幸の中で、妻の病はさらに悪化していた。

ヤノーホは、商店の窓ガラスに映り込んだ疲れた自分の顔を嘲った。

もはや、かつてのみずみずしい感性も摩り切れて、何の取り柄もない貧相な中年男の姿があった。苦痛を訴えつづける妻の治療費すら、出せないでいるのだ。

彼はモルダウの河岸を風に吹かれながら、将来の見通しもなく、暗い眼をしてのろのろと投げやりに歩いた。

—一金が、欲しかった。

ある日、知人の音楽家夫婦に、カフカとの『対話メモ』の話をする、出版を強く勧められた

。

善意に満ちあふれた音楽家夫婦は、それを聞くと興奮のあまり、カフカの追想記はいまや人類の共有財産であり、貴方が独占するのはむしろ罪悪に等しいと、ヤノーホを叱咤し、かつ、強く激励した。

茫然とした。

その通りだと心から思った。

強い酒を飲んだように、頭がくらくらとした。

涙が出た。

どうしてこのことに、もっと早く気づかなかったのだろう。

すでにフランツ・カフカの名は、大戦後の世界的な文化現象と化し、それはあたかも妖しくも輝かしい蒼い星が、強大な光芒を放ちながら昇っていくようであった。

何ヶ月もかけて読みにくい部分や曖昧な箇所の手直しを済ませ、一九四七年、ついにグスタフ・ヤノーホは、意を決して出版社に『対話メモ』の原稿を送りつけた。

案の定、返事が来ないので失望し、ほとんど諦めかけていた。

ところがしばらくして、他ならぬあのマックス・ブロート本人から、強い賛辞が返ってきた。

彼は紛れもなく、ここにフランツ・カフカその人の肖像を認めるというのである。また、ブロート自身も知らなかった天才の側面も、巧みに描かれてあると加えていた。

すでにブロートは「カフカ文学の権威」となっていた。その名士からこのドキュメントは「本物」だというお墨付きが大々的につけられたのだ。

ヤノーホは、有頂天になった。

生まれて初めて、喜びのあまりに膝を崩した。

「ありがたい。天国のドクトル・カフカが、愛弟子の俺の苦境を救ってくれようとしてるんだ。人生、捨てたもんじゃないな。思えばあの天才が、ウブだったこの自分を、あの悪夢の世界に引きずり込んでくれたようなものじゃないか。平凡なつまらない子供を、詩人だと勘違いさせてくれたのさ。今になってみりゃ、それがすべての不幸の始まりだった」

彼は鏡を見ながら、輝割れた唇を、じっと噛む。

「ああ、そうさ。カフカと知り会わなければ、ここまで悲惨な人生にはならなかったはずだ。そのおかげで俺は、毒虫扱いの前科者となったわけだ。見事な『変身』さね。つまり奴さんには、貸しがあるわけだ。人生のしょっぱなで、あんなのに出食わしちまったからこそ、文学という底無し泥沼に、腰までずっぽりはまっちゃったんだ。……とはいえ、俺としては、決して昔のセンセイを敬愛しこそすれ、恨むようなことはない。どうして、恨むものかね。なにせこのグス

タフ・ヤノーホ様こそは、この世の誰にも負けない、聖カフカの忠実な使徒なのだから」

ヤノーホは机の引き出しに大切にしまっているフランツ・カフカの写真を、じっと眺めた。年齢のない端正な表情。それにしても、何という浮世離れした顔だろう。とうに彼自身も、この夭折の作家の年齢を越えていた。

写真は手垢にまみれ、ヘナヘナになっていた。

この人に自分は選ばれたのだ——そう思うと、熱いものが込み上げてきた。

そして荒廃した部屋の中で血走った目をして、引出しからブローチの手紙を取り出し、弱くなった目を近づけて、指先でゆっくりと撫でまわした。

そして、何度も呟くような声を出して、舐めるように文章を読み返した。

尊大なところはあるものの、それは紛れもなく贅辞だった。

「もうそろそろ、このくらいの報いがあってもよかろうよ。そうじゃアないか。この人生、あまりに報いが、少なすぎた」

そして暗い部屋で、じっと鏡を見た。

目が、霞んだ。

糖尿病が進んでいたのだ。

「ふん。詩人か。文学か——」

川面の霞む春のモルダウ河岸を、下手な詩句を口づさみながら歩いてゆく、かつての夢見がちな十五才の自分の姿が思い出された。

胸の奥から、黒い唾いが、毒汁のように込み上げてきた。

度重なる拷問により、性格まで卑屈になった彼は、泣き笑いのような歪んだ表情を浮かべた。

—続く—

こうしてヤノーホは『この書物に必要なあらゆる変更を施す』権利を、マックス・ブロートに与えた。

ところが出版された本を開いてみると、驚いたことに原文のかなりの部分が欠落していた。カフカと無政府主義者や社会主義者たちとの交流の部分が、まるきり抜けているのだ。

この部分は『何者か』にとって、はなはだしく不快だったのだろうか。

しかしヤノーホ本人からすれば、それでは片輪の書物であり、不本意な残り滓のようなものであった。確かに幾つかの箇所では、マックス・ブロートに対し否定的に触れている部分も、あるにはあった。

しかしそれが、彼の逆鱗にふれたのだろうか。信頼していたからこそ、出版契約も校正刷も、ブロートに任せきりにしていたのだ。読み進むに従って目の前が暗くなった。ヤノーホは、再びすべてが冷酷に閉ざされていくのを感じた。

彼はかつてある人物が左翼誌で「マックス・ブロートは大ブルジョアの民族主義者だ」と決めつけて誹謗していたことを思い出した。

友情に厚く誠実だというブロートの人物像は、まったくの嘘っぱちだったのではないか。その本質は、カフカ神話を利用するだけの俗物売文屋なのだ。

この『権威』は、自分が刑務所から出てきた人間と見てなめてかかっている。彼は失意と怒りのあまり、ブロートの悪口を、知人にいいふらし始めた。

例の音楽家夫婦にも訴えたが、それは勘違いだろうなどといわれ、いつのまにか彼らとも疎遠になった。

(まてよ。ことによると、あのクラムとやらが、さらにその裏で操っていて、人形遣いよろしく、すべてを動かしているのかもしれない。ウグリノ叡知協会は、戦争中ナチスに壊滅されたといわれている。しかし実は中枢部が存続し続け、ひそかなネットワークにより地下活動が続いているっていう話も聞いた。やっぱりクラムとブロートは、グルになってこの自分を破滅させようとしているんだ。俺が逮捕されたのも、あるいは……。)

不幸な体験ゆえに陰鬱に内攻した性格に加え、ますますヤノーホは、世界を猜疑の目で窺うようになっていた。

(しかし、なぜだ。それは要するに、カフカの真の魂の友が、このグスタフ・ヤノーホ、ただひとりだったからだ。つまり、連中にとってこの俺は、居てはならない存在というわけだ)

彼の孤独な論理は、飛躍した。

手ひどい不幸の連続が、彼をひとりの偏執狂に仕上げていた。そしてすべては霧の中に聳える『城』のように、ぶあつい不透明な謎に蔽われていた。

ある日ヤノーホは、カフカを論じた本のマックス・ブロートの肖像を見た。

「誠実な裏切り」によって、カフカ文学を消滅から守り抜いた男。素晴らしい芸術の目利き。世界文学の恩人。いまやカフカという宗教の、最高司祭と化した存在。

それに較べて、自分はどうかろう、このグスタフ・ヤノーホは。

(もちろん、単にカフカの世界に食いつくされた惨めな元囚人に過ぎない。しかしだ。「カフカ文学を守った男」と「カフカ文学に食われた男」と、一体どっちが人間として本物なのか……。この際、世間の前に、明らかにしてやろうじゃないか)

しかし彼の不幸は、なおも続いた。

永いこと病床にあった妻のヘレネが、苦しみぬいたあげく、とうとう死んだ。

美人ではないが、素直で自分を心から信頼し、励ましててくれた優しい妻。結婚以来、幸せなことなど、何一つしてやれなかった。当たり散らす相手がないので、何度ひどい言葉を投げつけたことか。まるでこの自分は、甘やかされて育った子供が、手酷い不幸で潰されるとこうなってしまうという見本のような男だ。

彼は自分の顔を両手の拳で、血が出るまで殴りつけた。

さらに間をおかずに、最愛の娘アンナが、オートバイ事故で亡くなった。全身の血の気がひいた。臓腑をずたずたに切り裂かれるような気がした。一体、なぜこうも自分だけに不幸が連続で押し寄せるんだ。まるで上から悪魔が覗き見しながらせせら笑っているようなものではないか。

悲しみというより、恐怖と怒りで、嘔気がした。世界が、どんよりと濁った闇の底に沈んだ。

彼はアンナの死後、何日もものを食べられなかった。

睡眠薬を口に含んで裸のまま浴室に閉じこもり、石のように固まって刃物を首筋に当てていた。カフカと共に歩んだ路地裏や、カフェのテーブル。さまざまな幻が壁に浮かんで消えた。意識が戻ったときには、手首に浅い掠り傷があり、数本の体毛の沈む冷たい湯水に浸かっていた。

ヤノーホは、再び独りになった。

もう生きていても、仕方がなかった。父を奪いカフカを奪い、そして最愛の妻と娘すら奪われた。いったいどこまでやったら気が済むんだ。今度こそ本当に『運命の悪意』を、ひしひしと感じた。

神は存在するかもしれないし、しないかもしれない。

しかし、もし神が存在したとしても、それは自分のための神ではない——これはカフカ自身の言葉だった。

不条理とは、流行思想などではなく、彼にとっては現実の運命そのものであった。

ある連中に言わせれば、不幸や苦難とは、自分自身で引き寄せるものだという。本当に、そうか。もがけばもがくほど圧迫されるこの蟻地獄のような環境が、嫌でたまらない。ある連中に言わせれば、この世の苦難は魂の修行であり、いつか報われる輝かしい日が来るといふ。それは、真実なのか。果てしなく続く悪夢のような現象。魂は痛めつけられ、血を流し、青ざめるばかりではないか。苦労の後の収穫など、いつまで経ってもありゃしない。

金が無いため、妻の葬式費用は払えず、娘の葬式には参列できなかった。

ヤノーホの収入の道は、断たれていた。

彼は当時プラハの出版社に校正係として、非常勤で勤めていた。その女社長の唐突な自殺により、彼の一年間の給料が不払いとなってしまったのである。新しい経営幹部は、ヤノーホの事務手続きが、口頭の約束にすぎなかったとして法的に無効にし、無報酬にしてしまった。それに抗議すると、今度はいっさいの仕事が取り上げられた。

「こっちが監獄帰りと思って、あいつらは足元を見たんだ。いや、ことによると、またしても例の連中が俺を陥れたのかもしれない。それほどまでにも、カフカの『魂の友』であったこの俺が、憎いのか」

彼はまさに、不条理そのものを生きた。

彼が触れえた現実、ことごとく悪夢と化してしまうのだった。

ヤノーホは、軽音楽やジャズに関する雑文を書いて凌ごうしたが、戦後にまで隠然と続く旧ナチス裏人脈が、ことごとく彼の出版を妨害した。

どこにも逃げ場がなかった。どこにも足場がなかった。

糖尿病も悪化した。白内障は進み、失神は頻繁になった。

くたくたになった彼は、生きる意欲を失った。もはや『対話』どころではなかった。

それから幾年かが過ぎた。

運命が与えた極端な苦しみのため、ヤノーホの風貌も、人となりも、変わった。

自己を詩人だと信じられた青春のみずみずしい表情は失われ、苛酷な人生の中で、すべては灰色に風化し、痛ましい皺だけが刻印された。

彼は極度の貧困の中にあつた。若い頃の読書も教養も、何の役にも立たなかった。あの頃はそんなものが、よりよい人生のためになると、他愛もなく信じていたのだが。文学も、詩も、自分にとって、一体何のために役立ったろう。

むしろいまのような孤独と不幸に導いた原因なのではないか。

彼はブロートにへりくだった手紙を書いた。自分の苦境と『カフカとの対話』についていままで押し殺していた不満を、おすおすとした調子で静かに述べたのだ。

ある晩、独り身のヤノーホの部屋のドアが、乱暴に叩かれた。

開けるとフロックコートに身を包んだ背の高い二人の男が、両脇から彼の腕を押さえた。そしてそのまま黒塗りの車に押し込まれ、目隠しと猿轡をされた。

プラハ郊外の鬱蒼とした林に囲まれた館のようなところで、四日ほど監禁された。監獄での拷問のぞつとするような恐怖の感覚が甦った。その後の記憶は曖昧だった。

気がついてみると、朝露の中、プラハ北方の公園の芝生に横たわっていた。何日監禁されたかは、新聞を買ってはじめてわかった。財布はそのままだった。記憶がとぎれとぎれで、何でも意識朦朧とした状態で目隠しをされたまま、何人もの男たちに取り囲まれ、強いフラッシュを浴びせられ、何時間も同じ尋問と返答を、反復させられたような気がする。何らかの薬物を飲まれたような、ぼんやりとした記憶もある。

そしてヤノーホは、その直後の『カフカとの対話』の版に、以下のような奇妙な文章を自分で書

き綴ることになる。

「私はトランクを床に空けた。一番底に古いヨハン・シュトラウスのワルツが一冊、その下に私の古い灰色の思想の倉庫があった。そしてシュトラウスのワルツの中から、タイプした書類の束がのぞいていた。それは私の『カフカとの対話』の足りないオリジナル部分であった。私はそこに腰を下ろしてしまった」

つまり、彼の主張するストーリーはこうである。

ある日ヤノーホは、妻の死後。ほとんど行っていないナチオナル街の旧居に出向き、古い書棚の荷物の整理をしようとしたところ、あの埃だらけの箱の中から『対話』の欠落していた部分が見つかった、というのである。

その原稿こそが、前回までのマックス・ブロート編集の版で、欠落したまま出版されてしまった部分だという。

彼が以前不満としていた『失われていた部分』とは、ほかならぬヤノーホ本人の思い違いで原稿を送り忘れていたにすぎない――。

彼は続ける。

「ドクトル・マックス・ブロートは、私の本を好き勝手に削除したのではなかった。彼は一行たりとも、握り潰したり、省略したりしてはいなかった。私は彼に永年不正を働いていたのだ」

同じ文章で彼は『城』や『審判』などカフカの代表作を読んでいないことをしきりに強調する。そしてカフカ研究者たちを、そのことで何度も驚かしたことを繰り返した。自分の人生がカフカ文学に予言されていたことを、そしてそれは、象徴的な高みにまで高められていたことを、文学研究者たちの書評をして言わせようと仕組んだのだ。

しかし、実はヤノーホは、それまでに出版されたカフカの全著作を読んでいた。

むしろ、どんな批評家よりも「身を入れて」精読していたのであった。まるで魂の糧である聖書のように。

それ以外に、敗残の彼には、なすべきことなど何もなかった。

彼はかつての魂の師であった人物――いまや世紀を代表する大作家となった人物――の全集の厚い扉を静かに閉じるたびに、暗い灯の下でおののいた。

カフカの作品は、あまりにヤノーホ自身の人生に、似過ぎていた。

いい方を変えれば、あまりにも彼自身の人生を、細部に至るまで予言し過ぎていたのである。

ヤノーホは、一人孤独な戦慄を感じていた。

カフカの作品。それは、過去の遠い闇の中から、カフカによってひっそりと差し出された個人的な私信のように思われた。

しかしその恐怖は、この世の誰にも伝えることはできなかった。また、他人などに到底信じてもらえるとも、思われなかった。

明け方、鬱じみた気分の中、ふと我に返ったとき、ことによると自分の魂の奥深い部分が、わざと『審判』や『変身』や『掟の門』を演じさせているのではないかとも、思わないことはなかった。

誰が悪いわけでもない。

傀儡師に操られる木偶人形よろしく、酸味のある不幸をえんえんと演じているのだ。魂の奥の部分が、自分自身に悪意を持って、わざと躓かせ続けているのだ。そうなると、もはや自分すら

信じられない。

人形遣いは誰なのか。

とりとめもない陰鬱な放心は、暗い猜疑心に、そして狂気へと変わっていった。

「俺だけが、あの人に、選ばれたのだ」

ある日ヤノーホは、旧ナチス将校と噂されるある人物と、見覚えのある痩せた冷たい顔をした男が、マサリック河岸を親しげに並んで歩いているのに目をとめた。

そして、血が逆流するほど驚愕した。

あの秘密警察のような顔。鉤鼻の男。

薄い唇に尖った鼻。目深に帽子を被っていたその男は、まさしく年老いたヨーゼフ・クラムその人であった。

ひとまわり小さくなって、杖をつき、片脚を引きずっていた。

ユダヤ人スパイであるクラムは、とっくに収容所で惨殺されたという噂であった。

異端の思想団体であったウグリノ叡知協会も、戦争中に徹底的にナチスによって壊滅されたはずである。あるいはクラムは密告者としてナチスに身を売り、二重スパイとして、仲間を売るような卑劣な裏取引により、戦後まで生き延びたのであろうか。

帽子を目深に被ったヤノーホは、煙草を取り出し、二人が来るまでそこにじっと立ち止まっていた。

「マッチは、ありますか」

彼は正面のクラムの灰色の目をじっと見つめていった。

鉤鼻の老いた男は、コートに手を突っ込み、探そうとした。

手と首は、痙攣するようにしきりに細かく震え、風邪をひいているのか、薄く鼻水が垂れている。皺だらけの額に刻まれた大きな傷は、拷問の跡であろうか。

この男も、深く刻まれた脅えの中で生きているのが見てとれた。

うつむいていた老人はふと顔をあげ、ぎくりとした目で、ヤノーホの顔を見た。

ヤノーホも、見た。

「あなたは、ヨーゼフ・クラム氏では」

クラムはあわててハンケチで鼻を拭くと、首を細かく振り、連れの人物が不審がるのもかまわず、痛々しく片脚を引きずりながら、その場を立ち去っていった。

河べりの夕靄の中を遠ざかってゆくわびしげな背中を見ながら、ヤノーホはまたしてもこの世が、奇怪な悪夢のように思われた。

「文学史捏造家」――これが出版業界が与えたグスタフ・ヤノーホの通称となった。

妙なことで著名になったものの、ヤノーホへの世間の疑惑は、ますます激しくなっていた。

彼の新しい不幸とは、出版当時『カフカとの対話』がかなりの評判を獲得しながらも、批評家や学者たちからは「偽書」の判定を下されたことであった。

相当な部分が、ヤノーホの身勝手な創作だというのである。

愛読者、ファンとして二三次話しただけのカフカとの関係を、ことさらに肥大させて、まるでゲーテとエッカーマンとの特別な関係のようにでっち上げた信用ならぬ山師。特に、後に見つかったとされる失われた原稿部分が、疑惑の中心となり、スキャンダルとなった。

なかには、故意にヤノーホの普段の人柄までを中傷する人物まで現れた。

ヤノーホは必死に否定したが、もとより感情的な彼は、論客ではなかった。

いつしかジャーナリズムの道化となり、文士の風上にも置けぬペテン師、物笑いの種となった。

自暴自棄となった彼は、プラハのカフェや居酒屋に入り浸った。

店主は、ヤノーホが糖尿病であることを知って酒を与えなかったが、彼は目をかすめてグラスに継ぎ足すのであった。

「ほかに、もう愉しみなど、ありゃしない」

若い学生たちが、流行のカフカの作品について唾を飛ばして議論しているのを見つけると、グラスを片手に澱んだハイエナのように目つきをして、脇にすり寄ってきた。

「何だって？ 違う違う。そんなことじゃない。カフカは、理屈じゃないんだ。だいたいお前たちは、カフカについて何もわかつちやいない。なあんにも、わかつちやいないんだ」

そういつて、執拗にからんだ。

とくに「マックス・ブロートの解釈では……」などという青臭い声がどこからか聞こえようものなら、憎悪を帯びた目で、何も知らない無邪気な学生を睨みつけた。

ブロートの名は、彼にとっては激情を誘発する禁句だったのだ。

陰惨な形相をしてグラスをひっくり返し、ぜいぜいと息をし、よろけながらそちらのテーブルに渡っていくと、ねちねちと陰鬱な議論をふっかけた。

時には「触媒」がどうのこうのと、意味不明のことをぶつぶついつているときもあった。稀に、上機嫌なひとときには、ほろ酔い気分で、昔カフカと一緒にヤコブ教会の鎖に吊るされた干からびた盗賊の腕を見に行った時の思い出話を、夢見るような目をして披露してみせた。

「いいか、フランツ・カフカは、このわしを連れて行ってくれたんだ、このわしをな」

自らの話に、自分自身ですっかり感動してしまっているように、老人の目には薄い涙がにじんでいた。

毎晩のようにヤノーホ老人のごたくを聞き飽きている学生たちは、面白半分で囃し立てながら、この老いた道化のジョッキに、ビールをなみなみと注いでやった。

彼らは老いぼれの干涸らびた昔話よりも、早く女の話に戻りたがった。

「いいぞオ親爺！ 消えちまえ」

「おや。化石が何やらブツブツつぶやいてるぞ。プラハの化石が」

「触媒がいるぞ、触媒が」

ヤノーホは、テーブルにこぼれたわずかなビールの白い泡をすすりながら、

「いいか。……カフカはなァ、わしを、グスティと呼んでくれたんだ、グスティと。親愛を込めて優しくな。同じ詩人として、唯一、近親感を感じていたというわけさ。ああ、そうだとも。誰だと思う？ あの天才、フランツ・カフカがだ！」

彼はゲップをしながら、ふらふらとした脚で立ち上がる。

「触媒グスティ！ 触媒グスティ！」

老人は店内を睥睨するように、スプーンでコップを叩いて囃し立て続ける若い学生達を、ぐりりと見渡す。

涙のにじんだ目を細め、遠い日々を回想するように何事かをつぶやき続ける。

口のまわりをビールの泡だらけにした風采の上がらない老人は、ほとんど呂律が回っていないかった。

「ふん。学者どもには、何にもわからんのさ。誰もあのカフカに、そんな一面があったことなど、思いつきもせんだろう。だいたいあの頃のプラハはなァ、お前さんたち、今の若い連中の知っているプラハとは違う。全然、違っていたんだ！ あれが、あれこそが、ほんとうのプラハだ」

この妙な人物は、あちこちの酒場やカフェに出没し、暗く猜疑心に濁った目つきをして、カフカの『真の魂の友』を自称した。

そしてあたかも、世界中で自分だけがカフカの本当の理解者でもあるかのように、口元に唾液をためて、絶望的にまくしたてた。

常連の客たちは、しだいにこの初老の白髪頭の男を避けるようになった。

ヤノーホは飲みつぶれて深夜の閉店までカウンターに伏せ、椅子や食器の片付けを始めた店主に道路に引きずり出されることが、よくあった。

彼は道端で蹲ったまま、ぶつぶつとゲーテやリルケの詩を口ずさんだ。

「……ふむ。詩なんて何になる、しょせん、詩なんてもなァ」

民家の石段に座り込んだ老人は、そうつぶやきながら、眠りに落ちる。

こうしてしだいに病いが進み、それはやがて貧困の悪条件とあわせて、取り返しのつかないものになっていった。

しかし彼にはもう、どちらでもよかったのだ。

一九六八年三月三日。

グスタフ・ヤノーホー少年時代は自己を詩人であると信じ続け、両親とフランツ・カフカからはしばしばグスティと呼ばれ愛されていた男は、孤独のうちに死んだ。

六十五歳であった。

(了)

プラハの人形遣い

<http://p.booklog.jp/book/22072>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22072>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22072>